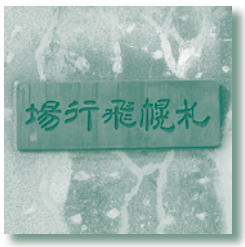
HOKKAIDO PEACE MAP



ほっかいどう 平和マップ

北海道教職員組合・「ほっかいどう平和マップ」作成委員会

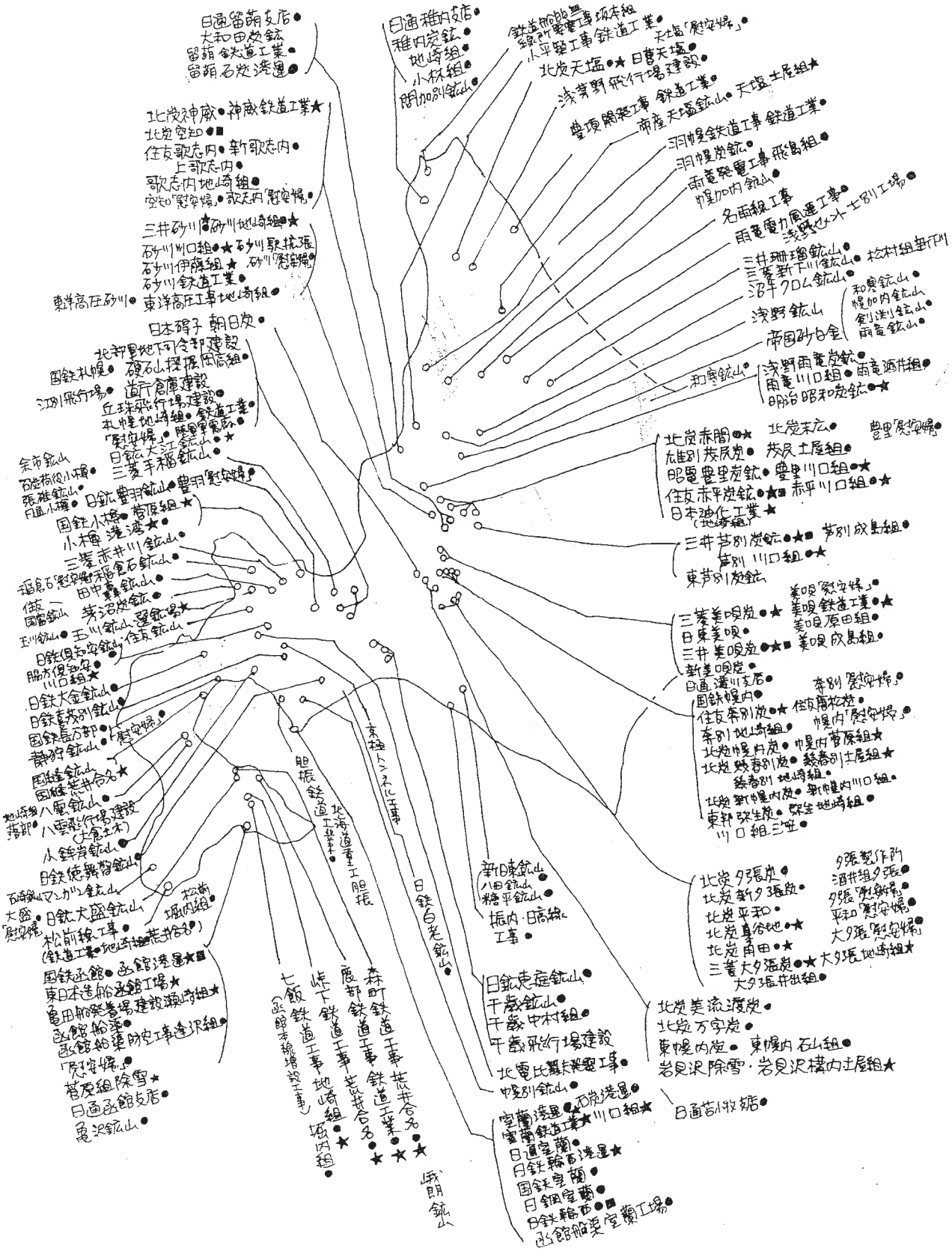
目　次

ほっかいどう平和マップ図……1
北海道（アイヌモシリ）「戦時朝鮮人強制労働調査資料集」……2
発刊にあたって……4
総論……5
　1．なぜ、「平和マップ」なのか？……5
　2．平和教育・平和学習をすすめるにあたって……6
　3．「ほっかいどう平和マップ」とは何か……7
　4．「ほっかいどう平和マップ」をどう活用するか……8
札幌市　札幌飛行場……10
千歳市　海軍千歳飛行場……12
江別市　江別空襲……14
江別市　木製戦闘機「キー106」と江別飛行場……16
江別市　江別尋常高等小学校奉安殿（屯田兵火薬庫）……18
江別市　屯田兵村跡……20
石狩市　望来（もうらい）空襲平和祈念碑……22
当別町　劉連仁（リュウ・リェンレン）生還記念碑……24
東川町　中国人および朝鮮人強制連行……26
留萌（沖）　樺太引き揚げ三船遭難慰霊碑・殉難碑・平和記念碑……28
旭川市　軍都・旭川～陸軍第七師団……30
稚内市　『九人の乙女の碑』～真岡郵便電信局事件……32
美瑛町　旧陸軍演習場兵舎門柱……34
美瑛町　旧陸軍演習場美馬牛（びばうし）兵舎倉庫・貯水漕跡……36
函館市　学童集団疎開……38
福島町　駆逐艦「柳」平和記念塔……40
函館市　有川桟橋の建設……42
函館市　函館山要塞……44

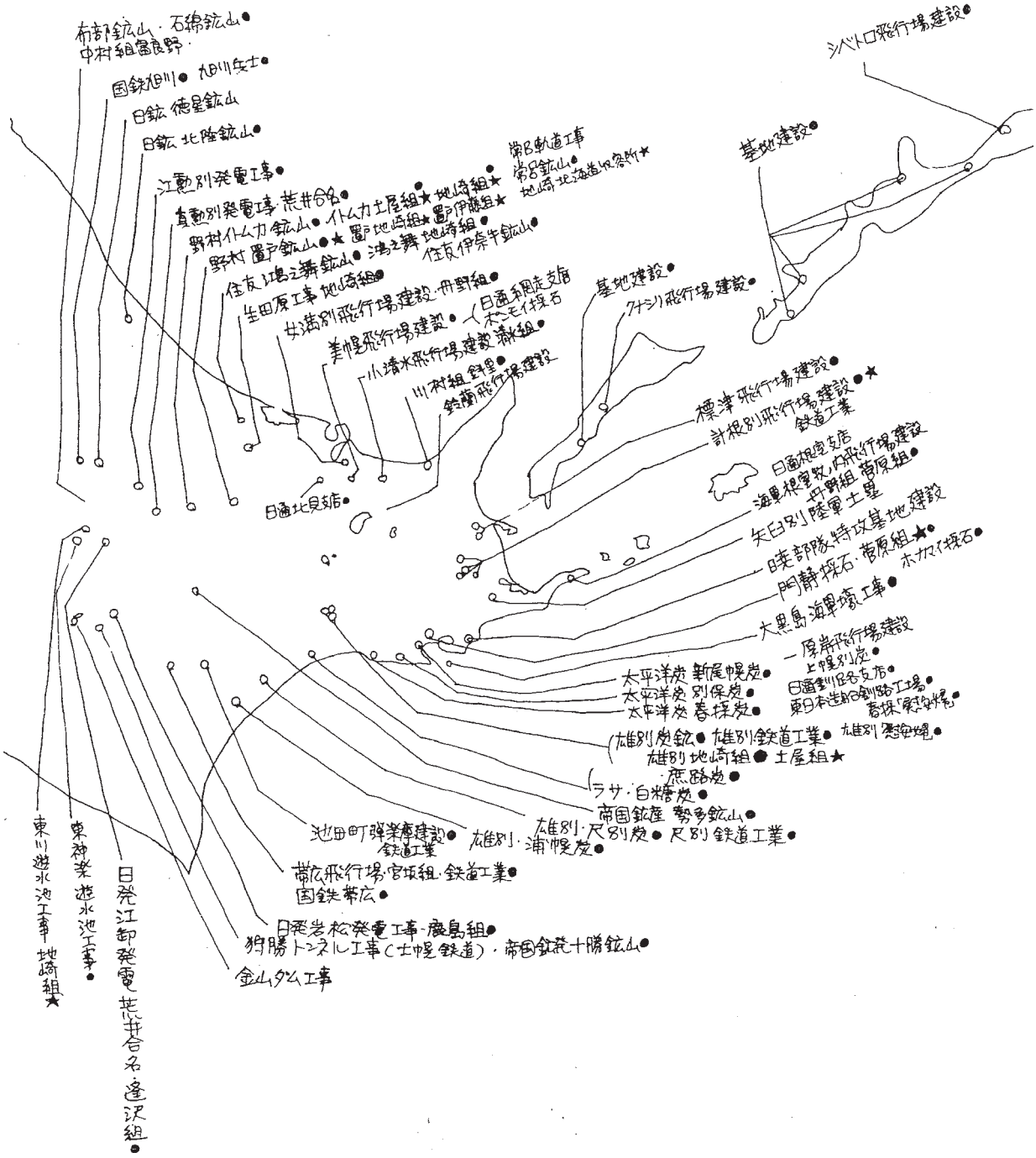
函館市　函館空襲……46
松前町　松前線工事への朝鮮人労働……48
室蘭市　室蘭への艦砲射撃……50
日高町　厚賀沖　大誠丸事件……52
平取町　二風谷の奉安殿……54
幌加内町　雨竜ダム建設「タコ部屋」労働・朝鮮人強制労働……56
帯広市　帯広空襲の碑……58
帯広市　第七師団（熊部隊）と 第一飛行師団（鏑部隊）が駐屯した「軍都」 ……60
音更町　鈴蘭地区攻撃の痕跡……62
幕別町　空襲による被弾痕跡……64
浦幌町　十勝海岸線　トーチカ……66
新得町　朝鮮人強制連行……68
池田町　航空修理廠建設における朝鮮人強制労働……70
池田町　防空壕で被弾した少女・少年が無念の死……72
芽室町　今は憩いの公園に、軍隊がいた！……74
本別町　本別公園に残る軍用物資・弾薬庫跡……76
本別町　本別空襲による被弾痕跡……78
本別町　仙美里　馬魂不滅の碑……80
釧路市　市立共栄小学校炊事遠足爆発事件……82
釧路市　死者192人、罹災者6000人超す釧路空襲 ……84
根室市　根室空襲……86
中標津町　計根別飛行場群建設における中国人・朝鮮人強制労働……88
中標津町　計根別飛行場の空襲……90
網走市　網走空襲……92
網走市　ポンモイ石切り場の強制労働……94
紋別市　鴻之舞鉱山における朝鮮人強制労働……96

ほっかいどう平和マップ図

北海道（アイヌモシリ）


日通留萌支店
大和田炭鉱
留萌金太郎工業
留萌石炭運搬
日通稚内支店
稚内炭鉱
地崎組
小林組
朋加別鉱山
鉄道部線路工事 坂夫組
小平築工事 鉄道工業
天塩「慰安婦」
北炭天塩 日曹天塩
浜芳野飛行場建設
豊頃開発工事 鉄道工業
南産天塩鉱山 天塩土屋組
羽幌鉄道工事 鉄道工業
羽幌炭鉱
羽幌鉄道工事 飛島組
雨竜発電工事
幌加内鉱山
名雨線工事
雨竜電力風道工事
浅野セメント士別工場
三井珊瑚鉱山
三菱新下川鉱山 松村組 朝日
沼牛クロム鉱山
浅野鉱山
帝国砂白金
和寒鉱山
和寒鉱山
幌加内鉱山
創洋鉱山
雨竜鉱山
浅野雨竜炭鉱
雨竜川口組 雨竜酒井組
明治昭和炭鉱
北炭赤間
北炭末広
豊里「慰安婦」
北炭別 茂尻炭
茂尻土屋組
昭電豊里炭鉱 豊里川口組
住友赤平炭鉱 赤平川口組
日本油化工業（地崎組）
三井芦別炭鉱 芦別成島組
芦別川口組
東芦別炭鉱
三菱美唄炭
美唄「慰安婦」
美唄鉄道工業
美唄原田組
日東美唄
三井美唄炭
美唄成島組
新美唄炭
日通滝川支店
国鉄幌内
奔別「慰安婦」
住友奔別炭 住友開拓
奔別地崎組
幌内「慰安婦」
北炭幌内炭 幌内菅原組
北炭幾春別炭 幾春別土屋組
幾春別地崎組
北炭新幌内炭 新幌内川口組
東邦炭生炭 炭生地崎組
川口組 三笠
北炭夕張炭
夕張製作所
北炭新夕張炭 酒井組夕張
北炭平和 夕張「慰安婦」
北炭真谷地 平和「慰安婦」
北炭南田 大夕張「慰安婦」
三菱大夕張炭 大夕張地崎組
大夕張井出組
北炭美流渡炭
北炭万字炭
東幌内炭 東幌内石山組
岩見沢除雪・岩見沢構内土屋組
日通苫小牧支店
日鉱恵庭鉱山
千歳鉱山
千歳中村組
千歳飛行場建設
北電比羅夫発電工事
幌別鉱山
室蘭港運 石炭港運
室蘭鉄道工事 川口組
日通室蘭
日鉄輪西港運
国鉄室蘭
日鋼室蘭
日鉄輪西
函館船渠室蘭工場
新日東鉱山
八田鉱山
糠平鉱山
振内・日高線工事
日鉄白老鉱山
東海トンネル工事
北海道重工船橋
船橋鉄道工業
鹿部鉄道工事 鉄道工業
森町鉄道工事 荒井合名
七飯鉄道工事 荒井合名
峠下鉄道工事 地崎組
函館本線増設工事
堀内組
峠朋鉱山
日通留萌支店
大和田炭鉱
留萌金太郎工業
留萌石炭運搬
北炭神威 神威鉄道工業
北炭空知
住友歌志内 新歌志内
上歌志内
歌志内地崎組
空知「慰安婦」 歌志内「慰安婦」
三井砂川 砂川地崎組
砂川川口組 砂川駅拡張
砂川伊藤組 砂川「慰安婦」
砂川鉄道工業
東洋高圧砂川 東洋高圧工事地崎組
日本碍子 朝日炭
北海道地下可令部建設
国鉄札幌 硬石山探掘 岡高組
江別飛行場
道庁倉庫建設
立川飛行場建設
札幌地崎組 鉄道工業
「慰安婦」 陸軍電気部
日鉱大江鉱山
三菱羊蹄鉱山
余市鉱山
石狩荷役小樽
張碓鉱山
日通小樽 日鉱豊羽鉱山 豊羽「慰安婦」
国鉄小樽 菅原組
小樽港湾
三菱赤井川鉱山
福島「慰安婦」 福島食石鉱山
住友 田中農鉱山
国富鉱山 芳泉炭鉱
玉川鉱山 玉川鉱山 翌鉱場
住友鉱山
日鉄俱知安鉱山
朋内俱知安炭
川口組
日鉄大金鉱山
日鉄奔別鉱山
国鉄長万部
静狩鉱山
「慰安婦」
国鉄鉱山
国鉄芦井合名
地崎組 八雲飛行場建設
荷部 八雲鉱山
（大倉土木）
八鉄芦別鉱山
日鉄使舞智鉱山
石崎鉱山 マンガン鉱山
大盛 日鉱大盛鉱山
「慰安婦」
松前 堀内組
松前線工事
（鉄道工業 地崎組 荒井合名）
国鉄函館 函館港運
東日本造船 函館工場
島田船渠 造場建設 瀬川組
函館船渠
函館船渠防空工事 遠沢組
「慰安婦」
菅原組除雪
日通函館支店
恵沢鉱山

（註）
● 朝鮮人連行確認地を示す
◎ 朝鮮人の存在確認地を示す
★ 中国人の連行地を示す
■ 連合軍捕虜の連行地を示す
▲ 台湾からの連行地を示す
○•無印　未調査地•調査対象地、動員された可能性がある所を示す



「戦時朝鮮人強制労働　調査資料集　－連行先一覧・全国地図・死亡者名簿－」

（竹内康人 編著、神戸学生・青年センター出版部、2007年８月１日刊）より転載

発刊にあたって

「地の記憶」

北海道の大地にはたくさんの記憶が刻まれている。

多くの人が知っている記憶もあれば、一人しか知らない記憶もあるだろう。古いものもあれば、今まさに作られているものもある。多くの人が知る記憶は長い時間留まるだろうが、一方であっという間に失われていく記憶もある。北海道の大地はそうした記憶の集積といえよう。

私たちも、大きさの違いこそあれ、この地に記憶を刻んで生きている。

私たちは、これらの記憶を切り離して生活することはできない。なぜなら、記憶は価値観を形づくり、無意識のうちにそれと照らし合わせながら生活しているからだ。

平和と戦争をめぐる記憶も、多くの人が共有するものもあれば、ごく個人的な記憶もある。それらは戦争のごく一部で、「断片」にすぎないが、互いに絡み合い戦争の被害と加害など、あるいは「銃後」の世界の全体像を構成する。

教職員は、自分自身の記憶とともに地に刻まれた記憶と向き合う。常に自らの価値観に照らし合わせながら子どもたちと向かい合う。子どもたちとともに学ぶ平和教育実践においても、そうした戦争の記憶と向き合う教職員自身が重要になってくるのだ。

「ほっかいどう平和マップ」は、自分と北海道に刻まれた、あるいはこれから刻まれるであろう戦争、平和、民族、人権をめぐる「断片」を結びつける一つの題材にすぎない。したがって、「ほっかいどう平和マップ」だけで平和教育実践は生まれてこない。

私たち教職員は、自らの「記憶」をもとに、目の前にある「断片」と向き合い、紡ぎ、そこから見える「戦争と平和をめぐるリアルさ」に迫っていくことで平和教育実践が成立することを認識しなければならない。

「ほっかいどう平和マップ」には完成がない。今後も各支部・支会・分会から「記憶」が集められ、蓄積され、体系づけられていく作業が繰り返され、「ほっかいどう平和マップ」は継承されていく。

これらをもとに、私たちは「戦争」や「平和」、「差別」や「弾圧」の歴史などを読み解き、平和教育実践を重ねていかなければならない。

「ほっかいどう平和マップ」が今、果たすべき役割は大きい。

「平和教育の日」の推進を！

アメリカに追随する自公政権は、2006年末から「教育基本法」の改悪、「イラク特措法」、「国民投票法」、「新テロ特措法」と矢継ぎ早に強行成立させ、「戦争をする国」をめざして、憲法改悪の動きを加速させています。

今、学校では、「学習指導要領体制」による差別・選別、管理・統制の教育がおしすすめられています。「学力の向上」「規範意識の醸成」の大合唱の中、その実は「一部エリートの養成と国家に従順な国民の育成」です。経済格差がそのまま教育格差となり、「格差の固定化」がすすむ状況にあって、一部の若者からは将来に対する絶望感から「希望は戦争」という考え方さえ広まろうとしています。

戦後60年以上が経過し、戦争を体験し、語り継ぐことのできる人々が減り続けていますが、私たちは「子どもたちを再び戦場に送るな」のスローガンのもと、「平和・人権・民主主義」教育を一層推進しなければなりません。

各支部・支会・分会は、「平和教育検討推進委員会」がまとめたこの「ほっかいどう平和マップ」を活用し、「とりたてて行う平和教育の日」を中心に平和教育を教育課程に位置づけるとりくみを強化していくことが大切です。

私たち教職員だけでなく子どもたちも「新たな証言者」として育つことを願ってやみません。

北海道教職員組合　教文部

総論

1．なぜ、「平和マップ」なのか？

北海道は、「アイヌ・モ・シリ（人間の住む静かな大地）」と呼ばれる場所である。しかし交易を拡大しようとする江戸幕府によって侵略がはじまった。それ以降、アイヌ民族の同化政策が進められていったのだ。その手法こそ、創氏改名や「日の丸・君が代」強制、皇国史観の強制といった日本による朝鮮半島などアジアへの植民地政策の拡大の手法の原型にほかならない。

北海道には、明治政府が屯田兵を使い「開拓」に名を借りた軍隊組織による計画的な支配地域の拡大という独自の歴史がある。また、朝鮮人・中国人の労働者を動員し過酷な条件のもとで強制的に働かせ、多くの人命が失われた全国屈指の場所でもある。同時に囚人労働や「タコ部屋」労働など北海道独自の過酷な労働動員が強いられた。その陰には「労務慰安婦」と呼ばれる女性たちがいた事実にも目を向けなくてはならない。

アメリカとの本土決戦やソ連の侵攻に備えた最前線としてトーチカ群が設置されたり、沖縄戦での死者は沖縄県民に次いで多いのも北海道出身者であったことなど、その歴史的事実もある。

現代に目を転じてみると、小樽港や室蘭港、函館港への相次ぐ米海軍艦船の入港、檜山管内学校をターゲットに見立てた米軍機の攻撃訓練、Ｆ15戦闘機の飛行訓練の千歳移転、沖縄の実弾砲撃演習の矢臼別移転など日米安保に関わる問題もある。また、記憶の新しいところでは自衛隊のイラク派兵に、旭川の北部方面第２師団が最初に送り込まれたという事実も見逃せない。

「アイヌ民族への差別政策」「地域の戦争史実」をはじめ「米軍再編にかかわる現在進行形の実態」が北海道という地域で起きていることを読み解くことによって、世界で起きている平和と戦争・紛争をめぐる数々の問題に迫ることができよう。

北教組は、「ほっかいどう平和マップ」作成にあたり、各支部に対して指示し、支部・支会・分会から平和マップ資料を収集した。今後も引き続き資料の収集を続けていき、「ほっかいどう平和マップ」の充実をはかっていくことを確認している。

北教組平和教育の３目標

1．戦争・原爆の悲惨さと非人間性を被害と加害の両面から教える。
2．戦争の原因とその本質を実証的にとらえさせ、平和への展望を切り開く。
3．平和へ向かう意思と力を育てる。

□　具体的授業は指導に当たる者が、地域、子どもの実態、これまでのとりくみの状況をふまえ、創意工夫して集団的に創ることが大切である。

□　ヒロシマ・ナガサキの学習について

戦争体験の中でもとりわけ原爆被爆体験は、大量無差別の破壊、残虐行為の極地であり、同時に現代の核戦争被害の原型としてヒロシマ・マガサキの地域的体験にとどまらず、国民的体験としてさらには、人類的体験として子どもたちに継承されていく必要があるものである。

具体化にあたっての指針

⑴　戦争の悲惨さと非人間性を「被害」と「加害」の両面から掘り下げ、歴史的事実をつかむ。
⑵　戦争の原因とその本質を実証的にとらえさせ、反戦・平和への意識と意欲を育てる。
⑶　平和へ向かう意思と力を育て、平和を求める世界の市民と連帯して平和を創る。

A　憲法・教育基本法の理念に基づき、人権を基調とした教育課程の編成をすすめ、すべての領域で「平和教育」を位置づける。

B　具体的授業は指導に当たる者が、地域、子どもの実態、これまでのとりくみの状況をふまえ、創意工夫して支部・支会・分会・学年団など集団的に創ることが大切である。

C　「原爆被爆体験」は、戦争体験の中でも大量無差別の破壊、残虐行為の極致であり、同時に現代の核戦争被害の原型としてヒロシマ・ナガサキの地域的体験にとどまらず、国民的体験としてさらには、人類的体験として子どもたちに継承されていく必要があるものである。

D　「戦争加害」の実態の学習では、中国、朝鮮半島、アジア全域で日本軍が起こした侵略、虐殺、略奪などの残虐行為の実態を写真資料や被害者の証言などに目を向け，史実を掘り起こして見つめ直す。

E　戦争・紛争地区や飢餓の蔓延している地域などで平和を創造するために、政府や国際機関に頼らず、地雷除去、医療、食料支援などの活動している世界市民たちの取り組みを学習し、平和を求める世界の人々と連帯して行動することの意義をつかませる。

F　アジア侵略の原型となったアイヌ民族への同化強制・差別政策をはじめ、北海道における「北海道空襲」「強制連行・強制労働」の歴史的事実を掘り起こし、北海道から世界史や近現代の社会を見つめる「平和観」を育む。

2．平和教育・平和学習をすすめるにあたって

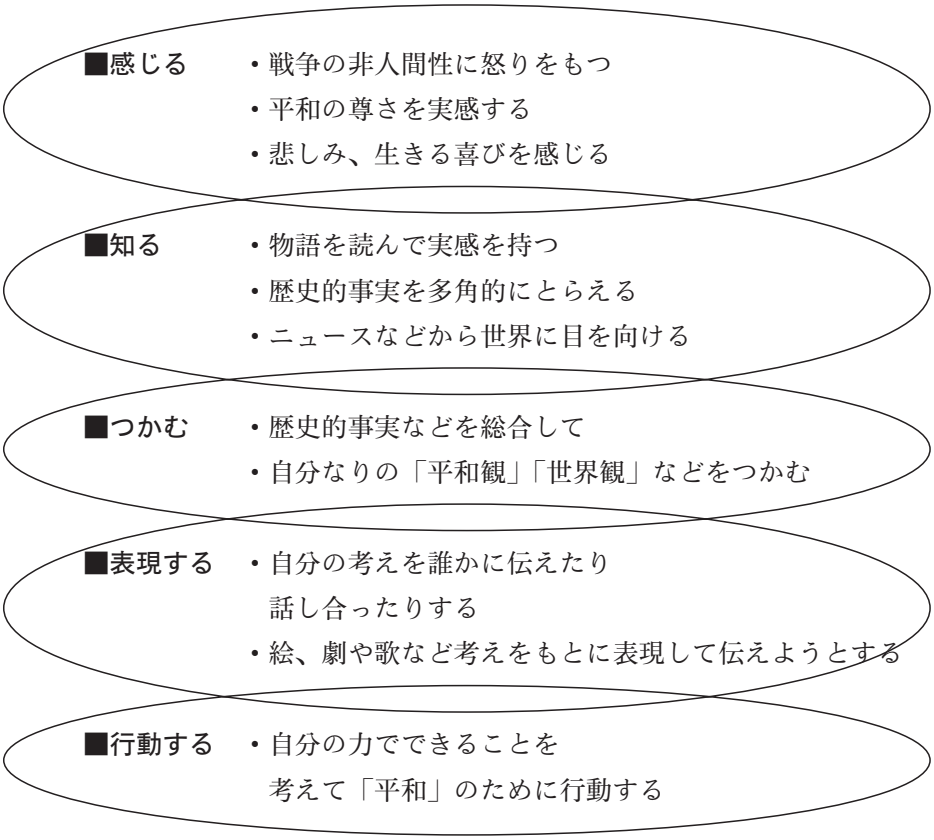
全道合研の「平和・人権教育」分科会で、平和教育実践がすすまないことの一因として、指導する側に平和教育をする知識が欠けている、「中立性」を問題視されたり自ら「中立性」について考えるあまりできないなどの声がある。戦争体験者でなければ、平和や戦争をリアルに伝えることはできないのかと言えばそうではないだろう。実際、「ヒロシマ・ナガサキ」や沖縄戦を語る体験者が高齢化してきており、若い人たちが体験を語る役目を引き継いでいる。

教職員は、子どもたちが「平和」を学ぶことのガイドとして、共感しながら学習を深めていくことが求められる役割なのではないだろうか。

全ての教育活動は、「平和」や「人権」を基調に成り立っている。したがって、どの学年でもとりくむことができるはずだ。学年が進むにしたがって、学習する内容やその深まり方がかわってくる。どの教材を選びどのように学習活動を作っていくかという視点を次の図のように考えてみた。

子どもたちの内面から外へ向かって意識が広がり、より自発的になっていくことが望ましい。

平和教育の全体構造



3．「ほっかいどう平和マップ」とは何か

以下は、各支部に提案された「ほっかいどう平和マップ」作成について書かれたもので、これに従い各支部では資料収集が行われた。

1．作成目的

⑴　過去のそして現在の起きている戦争・紛争の被害・加害体験（認識）を引継ぎ共有し、子どもたちに伝える平和教育の日常化を図る。

⑵　地域の戦争遺跡・体験者、現代の基地問題のリストアップ化により、地域から平和を学ぶ教材化を図る。

⑶　アイヌ民族の差別からの解放という地域課題と結びつけられた平和教育課題を明らかにする。

⑷　全道でとりくまれた「戦争史実の掘り起こし運動」の集約の位置づけももたせるとともに、新しい戦争史実の掘り起こしにつなげていく。

⑸「学び」から平和創造への行動化に結びつく内容を携えたものとする。

2．作成にあたっての現状認識

⑴　四半世紀にわたって取り組まれてきた「北海道」における平和教育実践を検証し、今後の平和教育・人権教育の充実発展をすすめていくための成果と課題を明らかにすることが必要である。

⑵　北教組の平和教育は、「人権教育を基調とする」ものであると確認されてきたが、これは、「積極的平和観」に立つことであり、世界の平和教育の流れと合致するものであり今後も再確認していく必要がある。

⑶　現場の実践段階ではとしては「反戦」を語り伝える「平和教育」に集約されがちであり、足

元の「人権」（子どもの権利、被差別民族の権利、女性の権利、労働者としての権利など）問題との遊離も指摘されてきたところである。（また、その逆の傾向として、反戦と反差別の結びつけが弱い）

⑷　平和教育の具体的実践課題としては、日本の戦争責任問題が社会化された80年代以降、被害意識に依拠した平和教育から、戦争を「被害・加害・抵抗（反戦）・差別・階級的視点」から構造的に明らかにしていく平和教育への深化が求められてきた。

しかし、加害問題への実践と認識上からの踏み込みの弱さ、抵抗闘争（反戦闘争）の掘り起こしの弱さ、反差別・階級的視点への認識の甘さなどから、実践の一般化にはまだ時間を要している。（多くの子どもの中には未開拓な「平和力」が内在しており、近年、平和を創り出す運動へ子ども自身が発展させていく社会的な取り組みからも読み取ることができる「平和力」への働きかけは十分なのかを評価しなければならない）

⑸　こうした現状を背景にしながらも、恐怖をあおるマスコミや政府によって意図的に進められる「対テロ戦争」を口実とした監視・戦時体制の日常化や、極めて意図的な朝鮮・反日感情へのバッシングの扇動により、大人のみならず子どもたちの「絶対平和主義」も揺らいでいる。（とりわけ「９・11」以降の世論の論調や政府の強硬姿勢にも、子どもたちの平和観が影響を受けていることに着目すべきである。）

⑹　以上の現状認識から、「北教組の新しい平和教育指針（試案）」を提起しているが、実践的検証と整理化も今後の課題となっている。（新しい平和教育の課題としては、子どもたち自身の手による平和創造の活動に結びつく学習が求められている。）

ただし、平和教育の特設時間確保の可能性は、北教組の組織率と自主編成運動への取り組みの経緯から他府県に比べ格段に大きいことは有利な条件でもある。

以上の認識による実践課題を克服していくものとしての「マップ」としていくことが求められているのではないか。

３．戦争遺跡を教材化することの意義

戦争遺跡とは、「近代日本の侵略戦争とその遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗に関わって国内外で形成され、かつ現在に残された構造物・遺構や跡地のこと」と理解することができる。

戦後60年を過ぎ、戦争の記憶が「ひと」から「もの」へ確実に移行している中で、歴史の証人としての戦争資料・遺跡は、現在の平和価値・未来への指針となるものである。戦争遺跡を直接体験することは、戦争を身近に体験することとなり、戦争を主体的にとらえる契機となるものである。

地域の戦跡の教材化は、教室にとどまった学習からフィールドワークを取り入れた動く平和学習となり、地域での平和創造の活動につながっていく可能性をもつといえよう。

４．「ほっかいどう平和マップ」をどう活用するか

実は、手元にある「ほっかいどう平和マップ」をどう活用するかが最も重要な課題だ。

この「マップ」は、平和教育実践では、肉のない骨格だけのものにすぎない。教育実践によって肉付けをしていかなければ完成しない。

先に述べたように、全道合研の「平和・人権教育」分科会の場においても、平和教育を実践できないということが報告され討議されることがある。しかし、「平和・人権教育」こそすべての教育活動の根幹であり、すべての教科・教科外、すべての領域において行われるべきものだと認識する必要があろう。

憲法第99条では「天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負う」とし、私たち公務員が、「平和主義」を教育実践することに対する積極的な意味づけをしている。また、「第１回ハーグ万国平和会議」の開催と「ハーグ陸戦条約」締結100周年を記念してオランダのハーグで1999年に開かれた「ハーグ平和アピール市民社会会議」で採択された「公正な世界秩序のための10の基本原則」の中で「１　各国議会は、日本国憲法第９条のような、政府が戦争をすることを禁止する決議を採択すべきである。」とアピールするとともに「９　平和教育は世界のあらゆる学校で必修科目であるべきである。」（いずれも君島東彦訳）という提言をしている。また、道教委も北教組の質問に対して「平和に関する教育は、これまでも学校教育や社会教育において取り組まれておりますが、道教委といたしましては、世界の平和と人類の福祉に貢献できる児童生徒の育成は大切であると考えております。教育活動で侵略戦争という言葉を使うことは問題とはしません。（2001年９月４日）」と回答している。このことから見ても、「平和教育実践」を阻むものはないどころか、「平和・人権教育」こそ、私たちの「本務」だといえるだろう。しかし、実際にごく一部の管理職が個別の教育内容について「中立性」を問題視して、実践をさせないようないやがらせにも似た「指導」をしてくるという報告もある。

そのような状況の中で、「平和教育」の実践はしたいが、その中立性を指摘されたらどうしよう、という自問自答の中で、結果的に「中立性」という言葉にがんじがらめになるあまり「自己規制」に陥るということが全道合研でも報告されている。そもそも「平和教育実践」に限らず、あらゆる教科・領域においても、指導する教職員自身の思想性や判断、規範意識が反映されないものはない。物語文の読み取りや作文指導、学級指導、学校行事すべて、指導者の内心なくしては指導できない。ならばなぜ「平和教育」だけが、その中立性を管理職から問題視されなければならないのか、そこに大きな問題点があるだろう。そして管理職の指導の中にこそ、「政治的意図」が隠されていることを見抜かなければならない。

逆説的に考えると、「平和の尊さを理解しない」、「戦争の非人間性に目を向けない」、「心の自由や平等を重んじない」「社会の歪みや不正を正すすべを知らない」などの子どもに育てたいのかという疑念に立たざるを得ない。

実際に他都府県においては、内容についてかなりの攻撃・「是正指導」がされている実態にある。しかし、その中でそこの教職員たちは自らの正当性を信じ、全国の仲間との連帯をもとに自ら実践で乗り越えていこうとしている実践は全国教研で報告されている。

「ほっかいどう平和マップ」は、各地に残されている平和教育実践の資料の一部を見やすく見開きでまとめたもので、パッケージされた集大成ではなく、いわばガイドブックだろう。それらのテーマには、膨大な資料が支部・支会・分会に残されているだろうし、市町村史の記述、地域の郷土資料館や博物館にも数多く残されているだろう。

また戦争の遺物・遺跡として、各地に残されているものもあるだろう。大切なのは、その「ガイドブック」を手がかりに、アクションを起こして、自分なりにその対象を探ってみるところから始まるということだ。

実際に子どもたちと見学学習をしたり、修学旅行のコースの中に入れることもできるだろう。また、自分が旅行に出かける際に、少し足を伸ばしてそれらの場所を訪れることもできる。そんなことを蓄積して、「ほっかいどう平和マップ」の骨組みに「肉」が付いていくだろう。そして、全道教研、支部教研、支会教研でそれらを互いに交流しあっていく中で、肉体として完成するというになろう。

「ほっかいどう平和マップ」は、今後も、全道各支部・支会・分会からの「断片」を蓄積して積み上げていきます。掘り起こしと活用、実践交流をすすめていきましょう。

札幌市　札幌飛行場

概　要

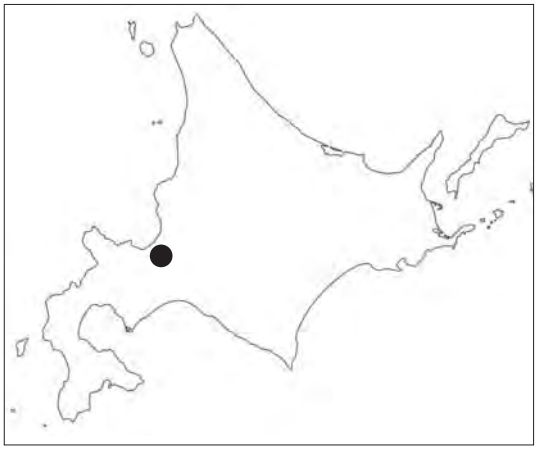
札幌飛行場（丘珠空港ではない）は、かつて道内ではただ一つの東京への定期航空路を持つ空港だった。

この飛行場の歴史は、1926年、旧北海タイムス社が報道用のため、北24条以北を滑走路として使用したことに始まる。

1933年、逓信省はこれを含めて拡張し、53万平方メートルの広大な飛行場とした。

戦時中は陸軍飛行場とされ、整備、拡張のため朝鮮人の強制労働も行われた。

敗戦の1945年、この飛行場は閉鎖された。



＜行き方＞　地下鉄北24上駅から24条通りの北側歩道を西へ向かう。西８丁目の美専学園駐車場の横、普通の民家の前に、それはある。

資　料

◇民家の門の両脇にある正門

◇左の門柱と、「風雪」の像

「風雪」の像は、1987年に彫刻家の坂坦道さんが制作したもの

北区歴史と文化の八十八選

八十八

㉕札幌飛行場正門跡と「風雪」碑

ここにある2基の門柱は、かつて道内ではただひとつ東京への定期航空路を持っていた札幌飛行場正門の跡である。この飛行場の歴史は大正15年（1926年）、旧北海タイムス社が報道用のため、北24条以北を滑走路として使用したことに始まる。昭和8年（1933年）、逓信省はこれを含めて拡張、53万平方メートルの広大な飛行場とした。今井百貨店の屋上にすえつけられた航空灯台は、夜間飛行のための指標であった。昭和20年（1945年）終戦の年、札幌飛行場は閉鎖された。また、隣には同飛行場をしのぶプロペラ型のブロンズ像「風雪」碑がある。これは、昭和62年（1987年）に彫刻家の「坂坦道」さんが製作したものである。

当時の札幌飛行場

キーワード

を

平成15年4月

札幌市北区役所

◇門柱前にある北区役所による説明板。わかりやすい。

千歳市　海軍千歳飛行場

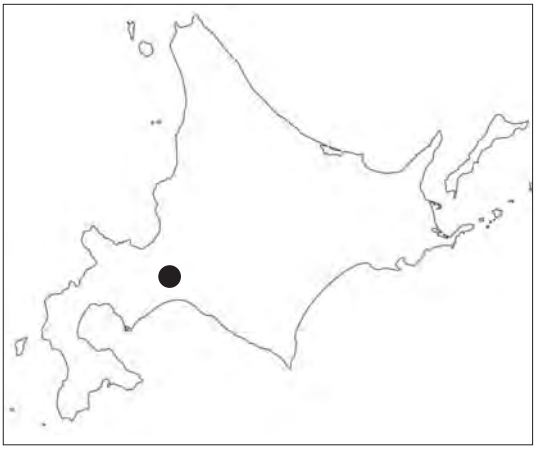
概　要

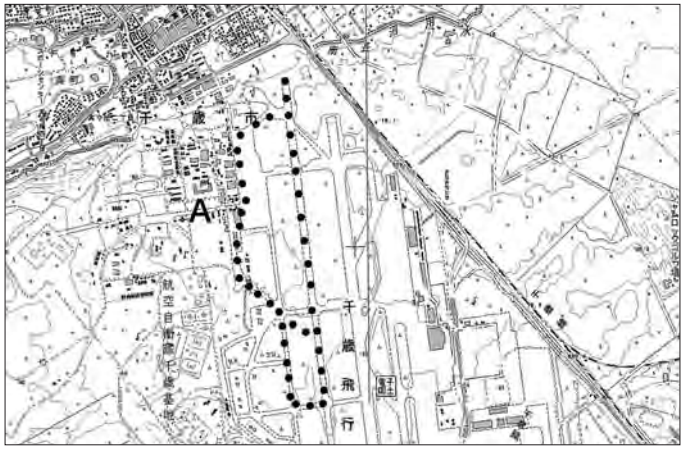
千歳には、敗戦当時三本の滑走路があった。

現在、航空自衛隊千歳基地の一部となっている「千歳飛行場」と、陸上自衛隊第七師団駐屯地となっている通称「東部隊」の敷地内にある二本である。

「千歳飛行場」は、1926年10月22日、小樽新聞社飛行機北海一号が初めて着陸したことをきっかけとし、1932年に飛行場設置請願。1934年に村民一致で建設工事を行い完成した滑走路が前身である。その後、1936年に行われた陸軍特別大演習に備えて拡張。翌1937年には海軍航空隊基地設立が決定し、1939年11月開隊とともに、海軍航空隊の飛行場となった。1945年５月には、海軍特別航空隊の特攻要員が55名千歳に移動し、特攻訓練を行った。同年７月10日には、この訓練中の一機が現市役所付近に墜落し、乗員と幼児を含む４名が犠牲となる事故も発生した。

東部隊内に残る滑走路は、大型陸上攻撃機「連山」（エンジン４発）のための飛行場だったため、連山滑走路と呼ばれた。大型のため大滑走路が必要とされ、工事が進められたが、完成したのは1945年８月15日だった。このため工事中の訓練等には、隣接する第三滑走路が使用されたらしい。この飛行場建設には、朝鮮人労働者が数多く動員されている。





左は現航空自衛隊千歳基地正門。

左の門柱に「千歳飛行場」と、書かれている。

上の地図中Ａ周辺が、国道から見える航空自衛隊基地

・・・で表した部分が、当時の飛行場

滑走路は、現在も自衛隊機専用で、民間機用に新千歳空港が建設された。両方の飛行場を担当する管制官は自衛官である

資　料

◇米軍駐屯中1953年の千歳飛行場と連山滑走路の一部

現東部隊は、米軍基地だったためかこの時代の写真はない

右上が滑走路の一部

滑走路の左側に駐屯地の一部が見える

敗戦間もなく1947年の連山滑走路と第三滑走路

－連山－

〈参考資料〉

- 「千歳市史」
- 「語り継ぐ北海道空襲」
  菊池慶一著（北海道新聞社）
- 国土地理院HP
- Google

現在の連山滑走路と第三滑走路の一部（東部隊内～GoogleMap）

現在は滑走路としては使用していない。部隊祭りの際、パレードを行ったり体験搭乗等を行う場所となっているようだ

千歳は戦時中空襲をほとんど受けていない。何度か上空に飛来し、たった一度、向陽台方面の真々地沢の炭焼きがまに銃撃して去ったのみである。千歳市史には、「米軍が千歳飛行場を無傷にしておいたのは進駐するときに飛行場として使用するためであったという。心憎いまでの自信である」と書かれている。

江別市　江別空襲

概　要

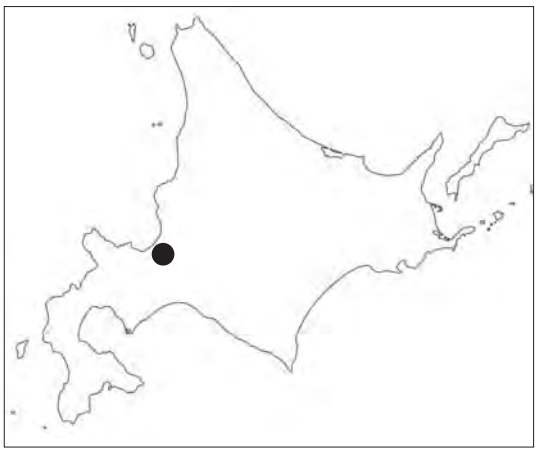
1945年７月14,15日の北海道空襲の際、江別も被害を受けている。

江別では７月14日の早朝から夕方にかけて三度の攻撃があった。

一度目は午前５時30分頃、グラマン７機来襲。江別飛行場から野幌機農学校（現酪農学園大学）まで、連続して機銃掃射。

二度目は午前７時50分頃、野幌・厚別間を運転中の上り408列車に、森林公園方面から飛来したグラマン３機が反復機銃掃射。場所は、現在のJR線と国道が交差する地点から少し野幌寄りだという。

三度目は午後３時グラマン４機が石狩方面より飛来し、王子航空機製作所へロケット弾４発投下。王子職員１名死亡。重傷者１名、軽傷者３名。流れ弾（機銃）が緑町本町の田村長屋に命中。赤ちゃんに用便中の母親が死亡。日本発送江別発電所へロケット弾投下。流れ弾（ロケット弾）が対雁共同墓地内無常堂へ被弾、死者２名という被害を受けた。（江別の歴史２号より）



跨線橋から見た現在の様子。右が当時の国道。襲われた列車に乗っていた人たちは、左の防風林内に逃げたという。

上の地図中央付近が現場か

資　料

江別市郷土資料館に展示されている、江別空襲の際、米軍機が残していった遺留品。

左上が、米軍機の銃弾帯
左下が爆弾、あるいはロケット弾の破片。

〈参考資料〉
- 「江別の歴史」２号
- 「江別の歴史」４号
- 「江別昭和史」
- 「語り継ぐ北海道空襲」
  菊池慶一著
  （北海道新聞社）

前川政美さんの証言

野幌駅を出発して間もなく、林業試験場付近の防風林あたりの登りにさしかかったとき、種苗試験場の丘の方から、突然グラマン三機が低空で来襲した。列車はほぼ満員だったが、前川さんは勿論、乗客の誰一人、まさか敵機に襲われるなんて思ってもいなかった。突然、激しい爆音がしたかと思うと、バリバリという機銃掃射の音がした。我先に床に伏せる者、椅子の陰に隠れる者などで、車中はごったごったの大騒ぎとなった。前川さんは背中にお湯でもかけられたように熱くなり、生きている心地がしなかったそうだ。やがて銃撃も止み、ほっとしていたら、今度は前よりももっと激しい機銃掃射が始まった。二回目の弾は、客車の窓下に帯状に鋲が打ってある鉄板の部分に当たり、青い光が飛び散った。後で見ると、その鉄板の上に、横に穴がいくつもあいていたそうだ。飛行機が飛び去って行ったと思うと、みんな我先にと、旧国道の反対側の防風林の中に逃げた。（「江別の歴史」４号より抜粋）

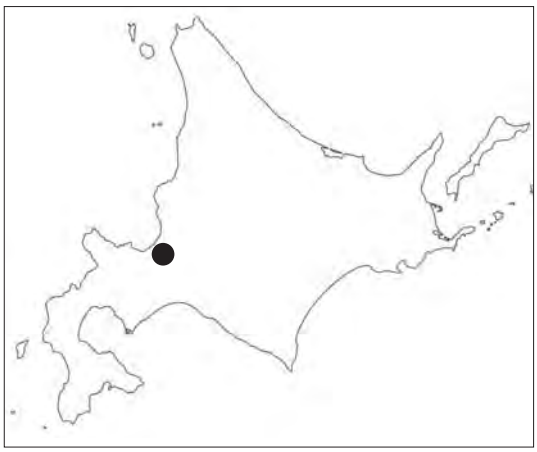
江別市　木製戦闘機「キー106」と江別飛行場

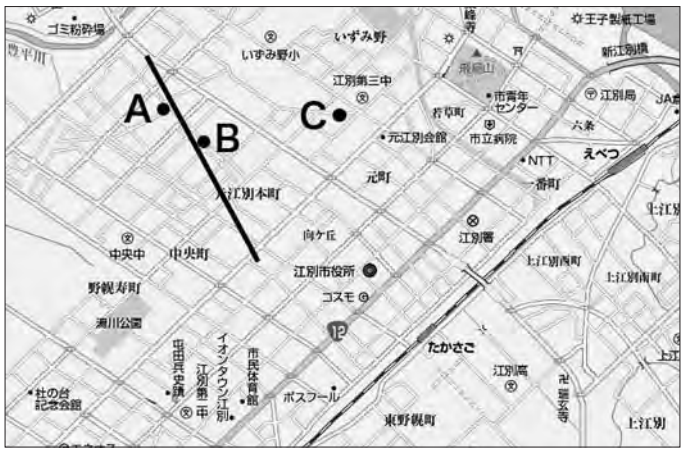
概　要

もともと日本は資源小国であるため、資源の大部分を海外からの輸入に頼っていた。特に石油とアルミの原料ボーキサイトは国内資源がなかった。当然、戦況が悪化するとともに兵器を製造する資源が枯渇した。そこで、戦闘機を木製にする計画が出てきた。そしてついに、1943年９月、陸軍はアルミ製戦闘機「キー84（疾風）」そっくりの木製戦闘機の試作を命じた。そして制作されたのが「キー106」である。

王子製紙江別工場が戦闘機製造へ転換したのは1944年５月。ここで、「キー106」が製造された。

また、戦闘機製造を命令されてから、江別では飛行場建設のための用地取得が行われた。そして江別市対雁から元江別に至る地域に飛行場建設が行われた。計画では幅50m、長さ2000mになるはずだったが、実際に建設された滑走路は、幅は計画通りだったが、長さは1350mほどであった。この飛行場を使って１号機が飛び立ったのは、1945年６月11日だったといわれている。





左図中Ｂ、対雁小学校横
自治会館前の石碑
←　碑文に周辺が飛行場だった
ことが記されている

Ａ：飛行場跡表示
Ｂ：対雁小学校横の石碑
Ｃ：誘導路跡

資　料

1947年、米軍撮影の航空写真（国土地理院HPより）

A～石狩川
B～千歳川
C～江別駅周辺
D～野幌駅周辺
E～王子製紙工場
　（王子航空機）
F～誘導路
G～滑走路
H～湯川公園付近

〈参考資料〉

- 叢書「江別に生きる」シリーズ
  「木製戦闘機キ106」
  田中和夫著（江別市教育委員会）
- 「語り継ぐ北海道空襲」
  菊池慶一著（北海道新聞社）

5丁目通り付近に立つ標柱

キー106の風防ガラスとタイヤ
江別市郷土資料館

第3中学校前の誘導路跡
生活道路として使われている

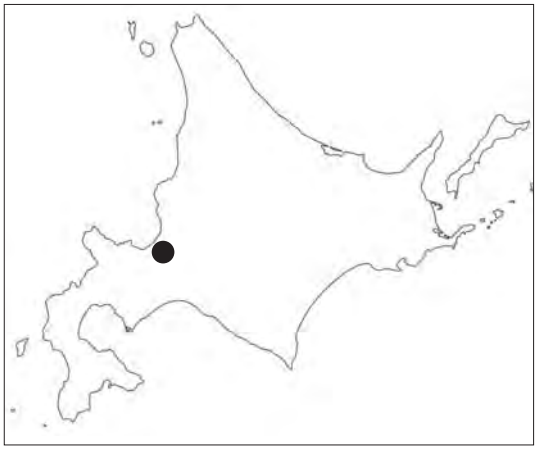
江別市　江別尋常高等小学校奉安殿（屯田兵火薬庫）

概　要

1878年、江別に初めて屯田兵が入植する。

江別小学校のある萩ヶ岡に、1887年第三大隊本部が置かれた。火薬庫は、1886年頃、大隊本部付属施設として建てられたと推定されている。江別屯田兵は1891年に予備役となり、役割を終えた。

1899年、萩ヶ岡に江別尋常高等小学校（現江別小学校）が開校した際に、「御真影」「教育勅語」の奉置所「奉安殿」となり、戦後まで使用されていたが、学校の改築工事にあわせて（1952年～1955年）現在地に移設され、今日に至る。



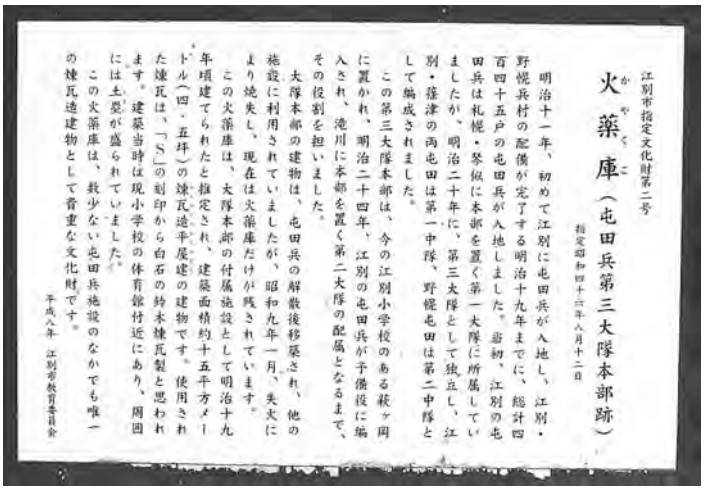
＜行き方＞

JR江別駅を背にして、左側すぐの丘が江別神社。神社を左手に見ながら水道局庁舎前を歩いていくと江別小学校が見える。神社と小学校の間の道を上がっていくと、小学校の敷地ではなく、神社側の土手の上に火薬庫がある。

資　料

◇現存する屯田兵施設の中で唯一の煉瓦建造物

◇江別指定文化財を示す説明版



江別市指定文化財第二号

火薬庫（屯田兵第三大隊本部跡）

指定昭和四十二年八月十二日

明治十一年、初めて江別に屯田兵が入地し、江別・野幌兵村の配備が完了する明治十九年までに、総計四百四十五戸の屯田兵が入地しました。当初、江別の屯田兵は札幌・琴似に本部を置く第一大隊に所属していましたが、明治二十年に、第三大隊として独立し、江別・篠津の両屯田は第一中隊、野幌屯田は第二中隊として編成されました。

この第三大隊本部は、今の江別小学校のある萩ヶ岡に置かれ、明治二十四年、江別の屯田兵が予備役に編入され、滝川に本部を置く第二大隊の配属となるまで、その役割を担いました。

大隊本部の建物は、屯田兵の解散後移築され、他の施設に利用されていましたが、昭和九年一月、失火により焼失し、現在は火薬庫だけが残されています。

この火薬庫は、大隊本部の付属施設として明治十九年頃建てられたと推定され、建築面積約十五平方メートル（四・五坪）の煉瓦造平屋建の建物です。使用された煉瓦は、「S」の刻印から白石の鈴木煉瓦製と思われます。建築当時は現小学校の体育館付近にあり、周囲には土塁が盛られていました。

この火薬庫は、数少ない屯田兵施設のなかでも唯一の煉瓦造建物として貴重な文化財です。

平成八年　江別市教育委員会

1878年、初めて江別に屯田兵が入植し、江別・野幌兵村の配備が完了する1886年までに、総計445戸の屯田兵が入地した。

当初江別の屯田兵は、札幌琴似に本部を置く第一大隊に所属していたが、1887年、第三大隊として独立した。

第三大隊本部は今の江別小学校がある萩ヶ岡に置かれ、1891年、江別の屯田兵が予備役に編入され、滝川に本部を置く第二大隊の配属となるまで、その役割を担った。

大隊本部の建物は1934年に消失し、火薬庫だけが残った。

火薬庫の建築面積は約15平方メートル（4,5坪）の煉瓦造り平屋建て。使用された煉瓦は、「Ｓ」の刻印から、白石の「鈴木煉瓦」製と考えられている。建築当時は現江別小学校の体育館付近にあり、周囲に土塁が盛られていた。

◇「奉安殿」と共に「修身教育」の素材だった「二宮尊徳像」も隣にある

コラム

戦前・戦中の「修身」教科書で「二宮金次郎（尊徳）は、「勤勉」「愛国」の題材として取り上げられた。

今も道内の学校には数多く残っているが、金属類として戦中拠出されたものもあった。

〈参考資料〉

「江別歴史ガイドブック」シリーズ１「史跡が語る江別の歩み」

江別市　屯田兵村跡

概　要

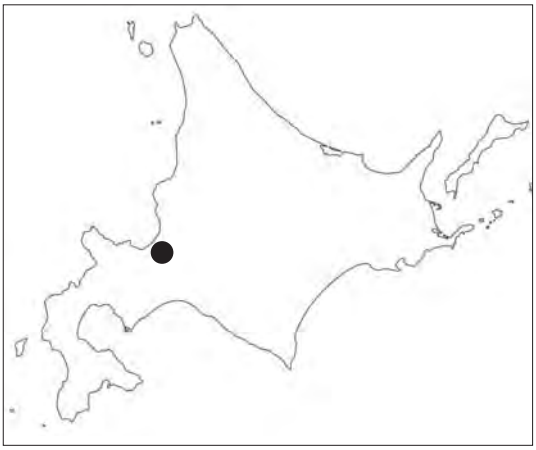
北海道の屯田兵制度開始は1875年琴似兵村に始まっている。江別への入植は、この琴似と、翌年の山鼻兵村に次いで３番目、1878年に始まる。

野幌への入植は、1885年と1886年の二次にわたり、225戸入植して始まっている。

江別には、この屯田兵の遺構が少なからず残されており、貴重な資料となっている。

野幌兵村が第三大隊第二中隊とされたときの中退本部の建物は、現存する最古の屯田兵遺構である。また、湯川公園内には屯田兵の住居が復元保存されている。

市民の憩いの場であり、総合運動公園となっている「飛鳥山」は、江別屯田公有地であり、馬場が設けられ、地方競馬も開催されていた。



上の地図中
Ａは、飛鳥山
（石碑が建つ）
Ｂは、湯川公園内屯田兵家屋
（４番通り側に駐車場がある）
Ｃは、錦山天満宮内の「野幌屯田兵第二中隊本部」
（２番通りに面するが、駐車場なし）

資　料

◇北海道指定文化財　野幌屯田兵第二中隊本部

洋風二階建て、建築面積150,72㎡,屋根は切り妻造り、柾葺、切り妻造りの玄関ポーチが付く。小屋構造はバルーンフレームと呼ばれ、開拓使以来のアメリカ風の建築手法が用いられている。

現在は江別市郷土資料館分館として、屯田兵関連の展示を行っている。

1994年に創建当時の場所、形態に近づけて復元修復し、公開している。

◇野幌屯田兵屋（広島県から入地した湯川忠継さん一家が生活していた）

◇飛鳥山「開村記念碑」

◇「兵即農と書かれた碑」

屯田兵とは

歴史の教科書では「北方の警備（対ロシア）と、北海道の開拓が任務だった・・・と、書かれているが・・・

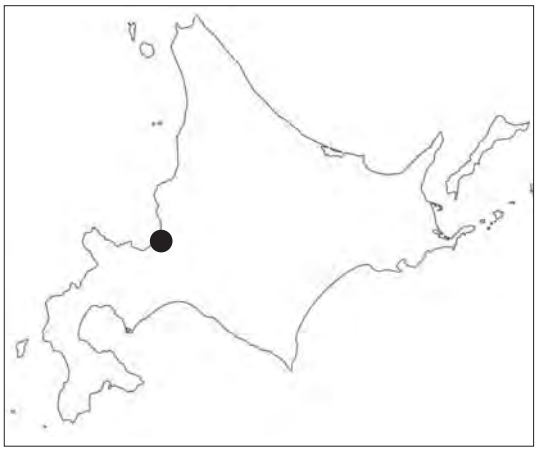
江戸時代から明治初期まで、日本の政府は北海道を、アイヌ民族の領土と認識していた。（伊藤廣著「屯田兵村の百年」による）ロシアも同様の認識だったため、つまり、どちらが先に自国の領土とするかの争いだった。そこで、ロシアに対抗しながら、「未開地の開拓」と称してアイヌ民族の土地を奪う侵略の最前線という役目を果たしたのが「屯田兵制度」なのである。その後、支配下に置いたアイヌ民族に対して「皇民化政策」を押し進めたのは知られている通りである。

〈参考資料〉・「江別市郷土資料館文化財」シリーズNo.3
「屯田兵村の百年」伊藤廣著

石狩市　望来（もうらい）空襲平和祈念碑

概　要

厚田村（現石狩市厚田区）望来地区が空襲されたのは、1945年７月15日の午後２時過ぎ。艦載機が37機来襲し、一度は上空を通過し北へ向かったが、反転して南下を始め、厚田本村、古潭地区、望来地区が攻撃された。望来地区では三回にわたって機銃掃射や爆撃を受け、死者11名、負傷者６名、家屋34戸の被害を受けた。



場所の説明

石狩市から国道231号線を北へ。厚田区聚富（しっぷ）で一度坂を上って高台を走る。高台の端から望来地区から厚田本村へと続く海岸線が見渡せる。その印象的な景色を見ながら坂を下り望来の集落へ入っていくとすぐ、右手に「三千里」という食堂の看板が見える。

右折して、その横の小路を入っていくと左手が望来中学校。そして突き当たりが望来神社である。神社の社殿の右側に祈念碑が建っている。

資　料

◇望来神社社殿との位置関係（駐車場から）

◇望来空襲の詳細

望来空襲での死者には７名の子どもも含まれている。艦載機が近づいてきたとき、子どもたちは秋村さん宅の前で遊んでいた。秋村キクエさんは危険を感じて子どもたちを家の中に呼び入れ、布団を引き出してかぶせた。その時、吉永牧場から農業会倉庫周辺に数発の爆弾が投下され、一発が農業会倉庫と隣接する秋村家に命中し、建物は轟音とともに破壊された。キクエさんと、子どもの富子さん、治夫さん、近所の長谷部欽也さん、英明さん兄弟、山田猛一さん、吉野和宏さんの七人が、一瞬のうちに犠牲となった。遺体の収容は翌日になったが、どの遺体も手足がバラバラになり肉片が飛散していたという。

この他に、裏の畑に防空壕を掘りに出かけた相川嘉男さんが機銃掃射で。警防団員として火災現場に向かう途中の吉永松太さんが機銃掃射で。家族を防空壕に避難させようとしていた小池平治さんは玄関先に出たときに、至近距離で爆弾が破裂して亡くなっている。福士兼太郎さんは、空襲の数日後、爆風で鼻が吹き飛ばされた無惨な姿で発見され、病院に搬送されたが、一ヶ月後になくなった。

望来空襲平和祈念碑は、望来神社の横に1992年に建立されている。黒御影石の碑文には、「戦争の悲劇を再び繰り返すことのない平和な社会の創造こそが亡き霊に対する最大の供養であることを願い、後世の人の良き道しるべとなるよう茲に祈念碑を建立するものである。」と、書かれている。

「語り継ぐ北海道空襲」菊池慶一著（北海道新聞社）

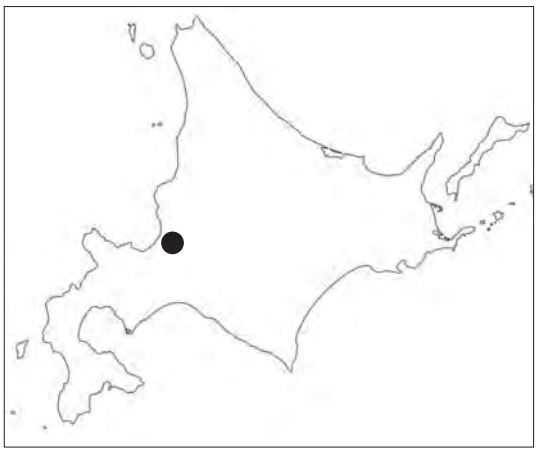
当別町　劉連仁（リュウ・リェンレン）生還記念碑

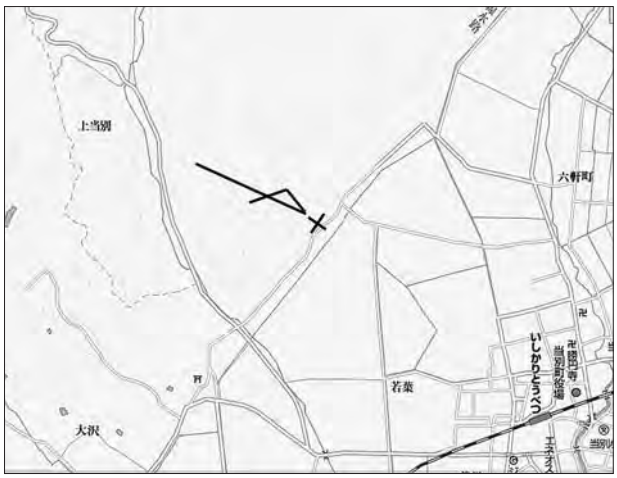
概　要

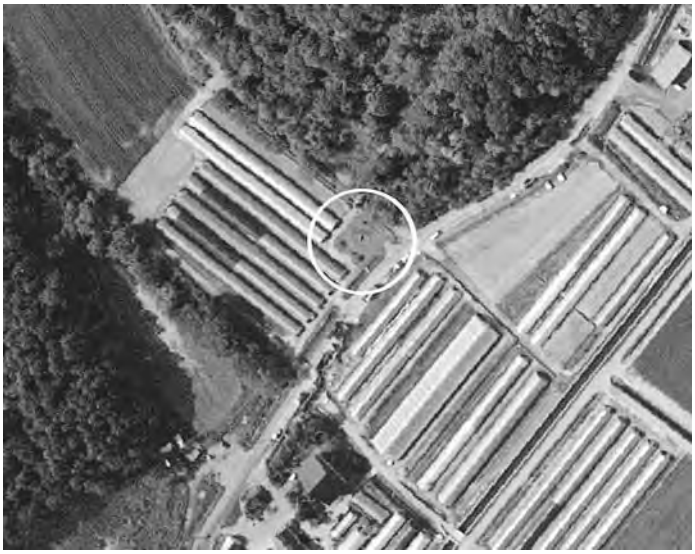
1944年８月、劉連仁（リュウ・リェンレン）さんは中国から強制連行され、沼田町の昭和炭坑で過酷な労働をかせられた。1945年７月30日、仲間と５人で炭坑を逃げ出し逃亡生活を送った。すぐに二人が捕まったが、８月15日に終戦になったことも知らず、３人で逃げ続けていたが、二人の仲間も捕まった。その後は一人で逃げ続け、冬は地面に穴を掘って中で眠り、夏は畑の作物や海草を拾って飢えをしのぎ、13年間も逃げ続けたが、1958年２月、ウサギ狩りに来ていた地元の猟師に発見され、ついに保護された。

その後、身元が明らかになり、本国へ帰国することができた。帰国後、日本政府に対して公式に謝罪を求めて訴訟を起こした。

生還記念碑は、2002年９月に建てられた。が、劉連仁さんは、記念碑を見ることなく、87歳で亡くなった。







＜行き方＞

当別町若葉から材木沢を通って石狩市五の沢・望来方面へ抜ける道が、山間に入る直前、山際に沿って走る道路があるので、当別方面から来て右折。２km弱走ると、左手に記念碑が置かれた公園が見える。

左の航空写真の中央、円の中が公園。
上の図では×印

資　料

◇劉連仁生還記念碑と、その周辺

記念碑周辺には桜が植えられており、横に碑文が置かれている。

記念碑の制作者は丸山隆氏（北海道教育大学札幌校助教授）だった。

氏は除幕式を見ることなく、前々日に亡くなられた。

記念碑は渾身の遺作となった

◇記念碑内部

記念碑は御影石を荒く削り、劉連仁さんの穴居生活を象徴している。

制作者の丸山氏は、記念碑の内部から桜が伸びるようにしたかったようだが、桜は周辺に植えられている。

◇横に立てられた碑文

＜参考資料＞

- 「劉連仁・穴の中の戦後」 野添健二著
- 「穴から穴へ13年」 早乙女勝元編集
- ビデオ「中国人強制連行」
- 「ライヤンツーリーのうた」（ビデオ・絵本）
- 「劉連仁記念碑建立のあゆみ」（劉連仁生還記念碑を伝える会）

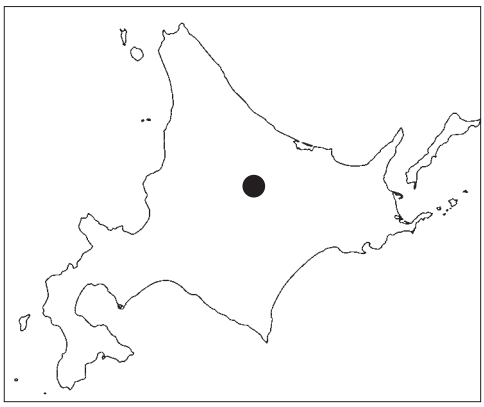
東川町　中国人および朝鮮人強制連行

概　要

1942年、大日本帝国の閣議決定にもとづき、政府、並びに軍が直接指導して朝鮮人に加え中国人も国内に強制連行し、135の事業所に労役させ、多くの中国人・朝鮮人を死に至らしめた。

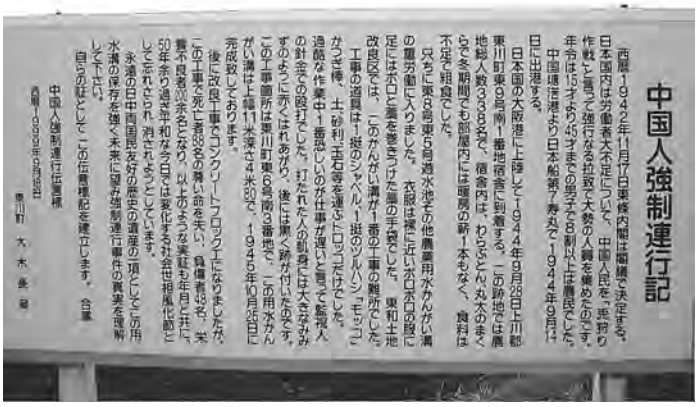
1944年、東川の地にも338名の中国人が強制連行され、「江卸（えおろし）発電所」の建設に関連し遊水池工事に苦役させられ、連行途上を含め88名が犠牲となった。その遊水池は、今もなお忠別河水の水温上昇施設として、東川町や旭川市に及ぶ水田を潤しているとともに「遊水池公園」として町内外から憩いの場所として親しまれている。しかし、それは、多大な犠牲のもとにあるということを忘れてはならない。

なお、東川町には中国人犠牲者の慰霊碑だけが立てられているが、中国人のみならず多くの朝鮮人が強制連行され強制労働・虐待された事実をとらえなければならない。



A　強制連行跡地

B　東川町共同墓地



資　料

＜中国人強制連行・強制労働の事実の記憶＞

東川町では、1972年から毎年、盧溝橋事件（1937年）が起きた７月７日に、この地に強制連行され過酷な強制労働により亡くなった中国人の「慰霊祭」が行われている。「慰霊碑」は東川町共同墓地内にあり「慰霊祭」はそこでおこなわれている。

遊水池公園内に建つ日中友好の像「望郷」
（2000年７月７日　東川町で建立）

＜封印してはならない朝鮮人強制連行・強制労働の事実＞

「旭川に近い北海道上川郡東川町（当時は東川村）江卸発電所での先生のタコ部屋体験、そして、それを打ち破る集団抵抗（集団蜂起）事件は、今までだれにも語られることなく、歴史の闇の中へと封印されたままであった。日本で戦時中、強制連行された労働者の蜂起事件として花岡事件が知られている。江卸発電所での集団抵抗事件は、それに匹敵するものとして壮絶な迫力を持っている。現在、東川町には強制連行で犠牲になった中国人だけの慰霊碑だけが建てられている。しかし、ここには鄭皙仁先生たち朝鮮人の実態が消されたまま、その文字が一字すらも記されていない。」

鄭皙仁（チョンソギン）著「当事者が書いた強制連行　北海道闇に消えた十一人」の巻頭言（監修渡辺一徳）

＜朝鮮人強制連行・強制労働の真相＞～「東川町史」第２巻Ｐ.578～582より抜粋

● 東11号在住　岡村吉清の話

「タコ部屋」には、10歳代後半から20歳台位の若い朝鮮人と思われる土工夫が１つの「タコ部屋」に50人くらいたと思われる。収容されている土工夫が、作業中時折私の顔を見ると「アイゴー・アイゴー」といって悲しさに堪えかねてか、助けを求めていた声は今でも忘れられない。

● 旭川保健所　有末四郎の記録

昭和19年１月４日、朝鮮半島から集団労働者を雇用している東川村江卸にある日本発送電工工事現場で、発疹チフス発生のおそれありとして東川村役場に連絡、鳥羽部長を帯同、ペスト予防衣を着用馬そりで現場を視察した。工員宿舎（タコ部屋）は、しらみのそうくつでその凄まじさは目を見張るばかり、工員のじゅばんや寝巻の衿に列をなして動いているのを目のあたりにみて、現在もその光景を思い起こすと肌に粟を生ずる思いである。

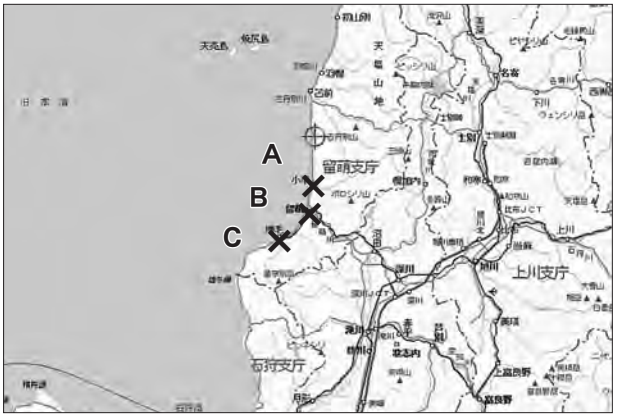
留萌（沖）　樺太引き揚げ三船遭難慰霊碑・殉難碑・平和記念碑

概　要

1945年８月22日、敗戦から１週間後、樺太（サハリン）から引き揚げる避難民を乗せた三船が小樽に向けて運航中、留萌沖で「国籍不明の潜水艦」の魚雷攻撃をうけて沈没、多くの犠牲者を出した。

三船とは、小笠原丸、第二新興丸、泰東丸。三船で死者が1700名にもなったのは乗船していたのが引き揚げ途中の老人、子どもばかりであったからである。留萌港にたどりついたそのうちの１隻には、血と肉塊が甲板に散乱し、右舷のまくれた鉄板に挟まれた死体や、天井からぶらさがっている死体などで、目を覆いたくなるような悲惨な状況だった。

以後、しばらくの間は「国籍不明の潜水艦による攻撃」とされてきた。旧ソ連が崩壊していく中で、92年10月、毎日新聞が旧ソ連の潜水艦だったと報じた。当時、スターリンが、留萌と釧路を結ぶ北海道の北半分（両市を含む）の占領を意図し、航行中の敵船舶の撃滅を命じていたことが資料により判明したのである。



A小平町鬼鹿海岸に建つ慰霊碑

B留萌市千望台　平和記念碑

C増毛町　小笠原丸殉難碑

資　料

＜小笠原丸沈没＞～犠牲者641名

1945年８月15日、逓信省の海底線布設船『小笠原丸』（1397トン）は、当初は逓信省関係者だけを乗せる予定だったが、大泊の群衆を放置できず、1500名あまりの引き揚げ者を乗せて19日に稚内へ戻った。20日午後11時45分、1514人の引き揚げ者を乗せて大泊港を出港した。稚内で887人が降り、小樽港に向かった。船には、乗員82名、海軍警備隊員ほか17名、そして推定633名の引揚者が乗っていた。22日午前４時22分、激しい衝撃音とともに雷撃を受けた。１分30秒後小笠原丸は、船首を空中へ高く突き出し、ゴーっという音とともに沈んだ。遠くに黒々浮上した潜水艦は、海面に浮き上がった引揚者に向けて赤い閃光の機銃掃射を行った。

＜第二新興丸大破＞～犠牲者推定400名

海軍の特設砲艦『第二新興丸』（2500トン）は、東亜海運の貨物船だったが、砲艦に改装されていた。第二新興丸が４回目の引揚者を迎えに大泊の桟橋に着いたのは８月19日の夜である。朝までに数千俵の米や粉末味噌の袋などが船倉に積み込まれた。約3600名の引揚者を乗せた第二新興丸は21日午前９時、大泊港を後にした。午前４時過ぎ、船上には朝の霧がうっすらとかかっていた。突然右舷見張り員が「右50度、雷跡！」と絶叫した。轟音と衝撃がはしると同時に前甲板の大穴があき、水柱を高く吹き上げた。船は急激に大きく右に傾き、つんのめるように船首を下げた。機関室からの連絡で、魚雷が爆発したのは隣の二番船倉と判明した。二番船倉の降り口付近は大勢の人がひしめき合い、泣き声と家族を叫び求める絶叫が響いていた。周りには血まみれの死体が散乱していた。第二新興丸は、潜水艦の再浮上に備えた戦闘態勢をとりながら、留萌港南岸壁にスクリューを半分浮かしたままようやく接岸し、生存者3219人が下船した。

＜泰東丸沈没＞～犠牲者667名

『泰東丸』（887トン）は、第二新興丸と同じく東亜海運に所属していた。小笠原丸、第二新興丸を大泊で見送った泰東丸は、21日午後11時頃、激しい雨の中を780名の引揚者を乗せて大泊の岸壁を離れた。翌朝海はベタ凪となり小樽をめざしていた。左手の岸辺に鬼鹿の花田家番屋が見えた。午前９時頃、リュックや子どもの水筒、木片などのおびただしい浮遊物が海流ににのって船の周りに漂ってきた。死体が流れてくるのも見えた。乗客はざわめいた。航海士の大脇は「どこかの船が浮遊機雷にやられたな」と思った。大脇は左右の見張りを厳重にするよう指示し、針路を陸寄りにとった。「臨検は避けられない」と判断した貫井船長は、エンジンを停止し無抵抗の意志を示すため、白旗を揚げるよう指示した。しかし、砲弾は船腹に当たり、９時55分船は沈没した。翌日から鬼鹿の実相寺で遺体の供養がおこなわれた。生存者113名。その他７名は、漁船「文栄丸」に救助された。

（「留萌支部平和教育推進資料」第８集より）

※　事件の犠牲者は1,708名とされているが、引揚げの混乱時であり乗船者名簿等はなく正確な乗船人員は不明。遺体が確認されていない行方不明者も相当数いるため、実際の犠牲者は更に多かった可能性がある。

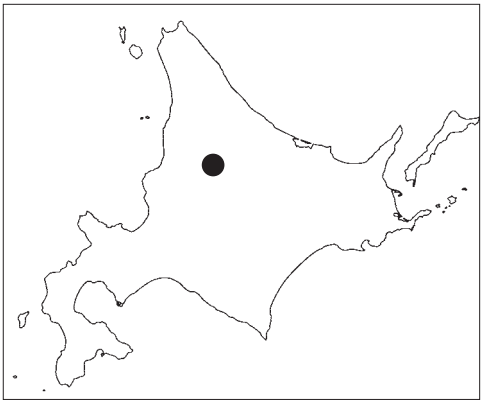
旭川市　軍都・旭川～陸軍第七師団

概　要

1886年の日清戦争後、日露戦争に備え北海道に第七師団が設置された。司令部は当初札幌月寒におかれたが、1900年に旭川市春光に移転した。これは、直接的に脅威であったロシア帝国・ソ連からの国土防衛ということからも、北海道のど真ん中に軍事拠点をおくのが理想的であったからである。以来旭川は軍都として栄えた。第七師団設置により、この地に住んでいたアイヌ民族が強制的に移住させられた。

戦争末期1944年、敗戦が決定的となり、いよいよ「本土決戦」に突入かという時、太平洋岸への上陸侵攻に備え、師団は道東展開を命ぜられ司令部は帯広に移った。旭川の第七師団は「もぬけの殻」だったというわけであり、北海道空襲においては陸軍の中心的軍事都市であったにもかかわらず被害は少なかった。

現在、陸上自衛隊第２師団駐屯地がおかれ、今もなお「軍都」としての姿がぬぐいさられていない。駐屯地そばの北海道護国神社には、約６万3000「柱」の戦没者が祀られており、「靖国神社以上の侵略戦争賛美」神社ということも言われている。また、駐屯地の横に「北鎮記念館」、軍の社交場であった偕行社は「中原悌二郎（彫刻家）記念館」としてある。



A　北鎮記念館

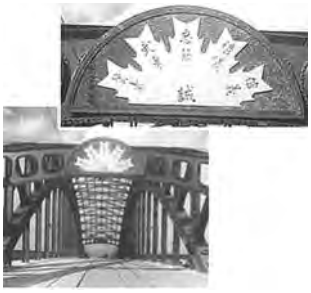
B　旧偕行社

C　旧第七師団司令部門柱

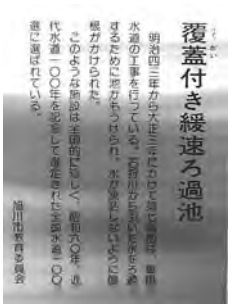
D　覆馬場

資　料

◇　旭川市春光町旧５区に、旧陸軍第七師団司令部の門柱が残っている。その近くに一際目立つレンガ造りの大きな建物がある。騎兵第七連隊が騎兵訓練をしていた屋内馬場である。これは、全国で唯一の屋内馬場であって、冬、極寒の中にあっても訓練できるようにということで、レンガの建物に覆われており、「覆馬場」と呼ばれていた。一度に30頭ほどの馬を乗り回す広さがあったということである。



◇　旭橋建設当時は、すでに戦時色が濃く軍の要請もあって戦車が渡れる強さで設計され路面電車も通っていた。橋の正面には「誠」という文字を中心に「忠節」「礼儀」「武勇」「信義」「質素」の軍人勅諭網領が書かれた旭日章が高く掲げられた。電車が橋の上を通過するとき、車掌は「気をつけ！」と号令をかけ、市民はこの橋を渡るとき脱帽したというように、軍都旭川を象徴する橋だった。第七師団の多くの兵士がこの橋を渡って戦地へ向かった。※　現在の旭橋～2004年第２師団イラク先遣隊としてこの橋を渡り戦地へ。



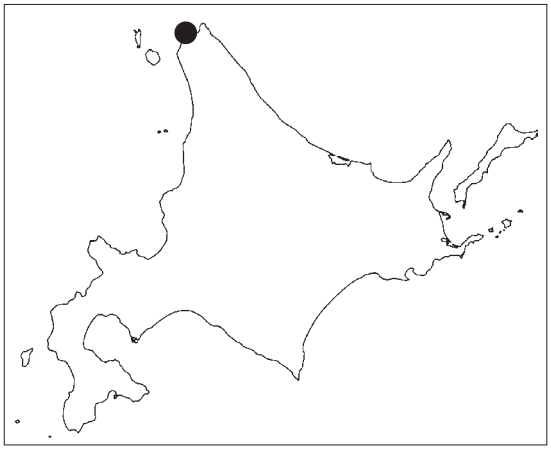
◇　第七師団軍用水道池～第七師団が整備した上水道。当時、まだ井戸水が当り前の時代だったが、師団地域が井戸に不適だったのと伝染病の流行があったりしたため、師団内に明治から大正にかけ軍用水道が整備された。その配水濾過池が当時の近文台（春光台）に造られた。この配水池は今も旭川市の水道局が春光台配水場として利用している。

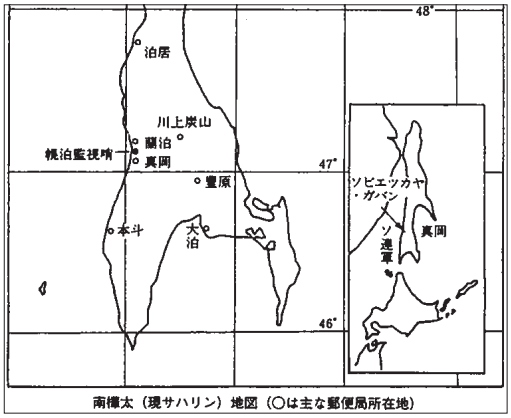
稚内市　『九人の乙女の碑』～真岡郵便電信局事件

概　要

1945年、敗戦間もない８月20日、樺太・真岡町にソ連軍が艦砲射撃を行い侵攻した。真岡は戦火と化し幾多の町民の命が奪われた。そして、この惨禍をしめくくるような「集団自決」が、真岡郵便局電話交換室で起きた。電話交換手（当時の郵便局では電信電話も管轄していた。）の女性12名は郵便局別館に孤立してしまった。極度の緊張感の中、９名が「自決」した。

12名のうち３名が生き残った事実とともに、電話交換手以外の局員やこの日勤務に就いていなかった電話交換手に「自決」したものはいなかったことなどが、この事件の「真相」に迫るカギとなる。





南樺太（現サハリン）地図（○は主な郵便局所在地）

※　稚内公園内の『氷雪の門』～

1963年８月20日に建立され、以来、毎年８月20日に「氷雪の門・九人の乙女の碑平和記念祭」がおこなわれている。

資　料

◇　『九人の乙女の』碑には、交換手姿の乙女の像を刻んだレリーフがはめ込まれ、亡くなった９名の女性の名前、そして、彼女たちの最後の言葉となった『皆さん　これが最後です　さようなら　さようなら』の文字が刻まれている。

　彼女たちの死は「壮絶な最後」として詩になり小説になり映画にもなって「九人の乙女」の悲しい物語として知られ、1963年に稚内公園内に「彼女たちの霊を慰め、その功績を讃えるために建立された」ということである。

◇　碑には、こんな顛末が記されている。

　＜－八月二十日ソ連が樺太真岡上陸を開始しようとした　その時突如日本軍との戦いが始まった　戦火と化した真岡の町　その中で交換台に向かった九人の乙女等は死を以って己の職場を守った　窓越しにみる砲弾のさく裂　刻々迫る身の危険　今はこれまでと死の交換台に向かい「皆さんこれが最後です　さようなら　さようなら」の言葉を残して静かに青酸苛里をのみ夢多き若き花の命を絶ち職に殉じた－＞

◇　しかし、碑文には当初、次のように「軍の命令による死」であると記されていた。

　＜－八月二十日、日本軍の厳命を受けた真岡郵便局に勤務する九人の乙女は、青酸苛里を渡され最後の交換台に向かった。ソ連軍上陸と同時に、日本軍の命ずるまま青酸苛里をのみ・・・＞というものであった。したがって碑文は、「殉職」であると書き換えられたことになる。さらに、亡くなった９名は、公務殉職として「勲八等宝冠賞」を受けた上、靖国神社に合祀されている。

◇　ノンフィクション作家の川嶋康男さんは、『九人の乙女一瞬の夏』という著書で次のように指摘している。

「『戦後』という言葉そのものが、歴史のはざまで薄められている今日も、この『九人の乙女』の悲劇は語り継がれている。樺太の『終戦』を象徴するといわれる反面、その勇姿が殉国美談化され、流行歌や映画にもなった。つまり、年若き乙女たちが決死の覚悟で電話交換業務を遂行し、女の誇りを守り抜くため、自ら命を絶った行為を『大和撫子』の鏡であるとして『殉国』へ昇華する構図である。」（まえがきより抜粋）

◇　「九人の乙女」の「死」は、「沖縄戦」における住民の「強制集団死」という本質に共通する。「軍官民共生共死の一体化」を体現し「殉国死」（自らの意志による死）するという「靖国の視座」を突き破る追求が大事である。

美瑛町　旧陸軍演習場兵舎門柱

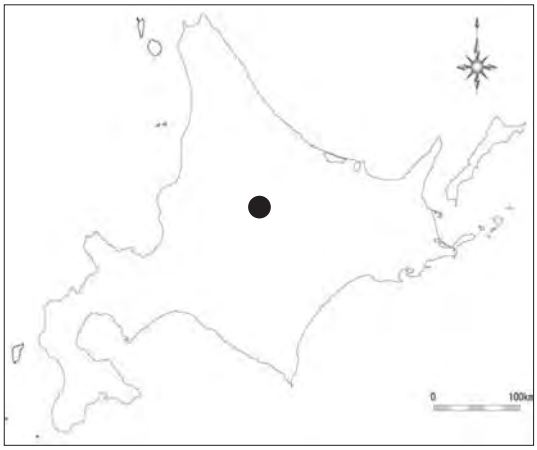
概　要

1908年２月14日陸軍演習場規則の発布に伴い、旧陸軍第７師団美瑛演習場が、同年美瑛村字美瑛原野（現在の新星、福富、水沢、三愛と美馬牛の一部）の丘陵に創設された。

歩兵、砲兵の戦闘射撃訓練を目的とした演習場は 6728.92haに及び、併せて歩兵１個連隊を収容する衛成地（兵舎12、連隊・大隊本部２、炊事場３、厩舎７、浴室３、診断所１、酒保１、衛兵所１、弾薬庫１、主管官舎１、標的庫１、敷地面積14.08ha）を擁していた。

門柱は、この敷地の営門に建てられたものであり、演習場の歴史を残す数少ない遺構である。

〈参考文献〉「美瑛町史」



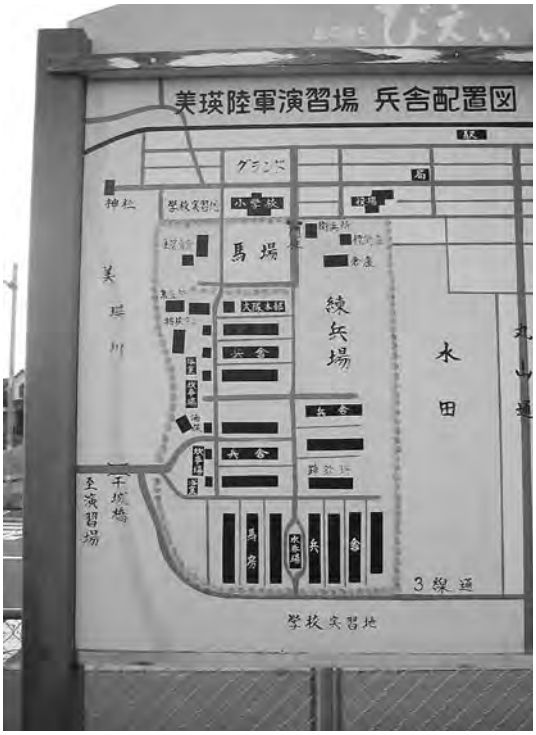
＜行き方＞

美瑛町は、旭川市から車で約20分～30分。国道237号線を富良野方面に向かう。

美瑛町の町並みが見えたら左折し、美瑛駅の方へ。美瑛小学校を目指す、美瑛駅から車で２～３分、市街地の中心部に美瑛小学校があり、その敷地内に門柱がある。

○　門柱の間にある表示の表側。美瑛町の文化財に指定されている。

　書かれている内容は、町史に記載されている内容とほぼ同じ。



○　表示の裏面。当時の兵舎配置図。

射撃訓練

（「美瑛町史」より抜粋）

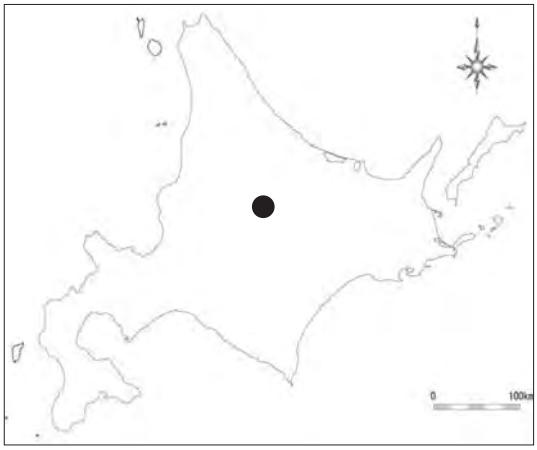
美瑛町　旧陸軍演習場美馬牛（びばうし）兵舎倉庫・貯水漕跡

概　要

美瑛の丘陵地帯は、地形の変化に富み、小川も多く、演習場としては最適の土地であった。歩兵や砲兵の戦闘射撃演習に必要であるとして、開拓入植者が開墾した土地を返還させ、美瑛の地に演習場を設けた。

美瑛旧陸軍演習場美馬牛兵舎は、1937年に建設された。

美瑛町美馬牛市街地の裏側に兵舎・炊事場・診断所などを設置し、演習を行っていた。現在も、美馬牛駅前に演習場倉庫が移転保存され、美馬牛小近くに演習場用の貯水槽跡が残されている。



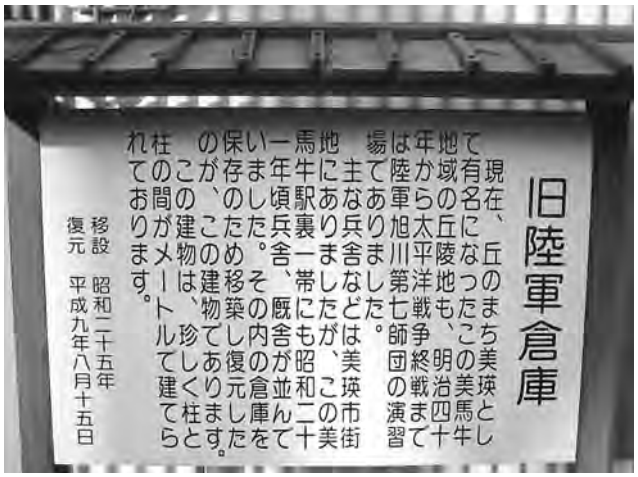
◇　給水漕

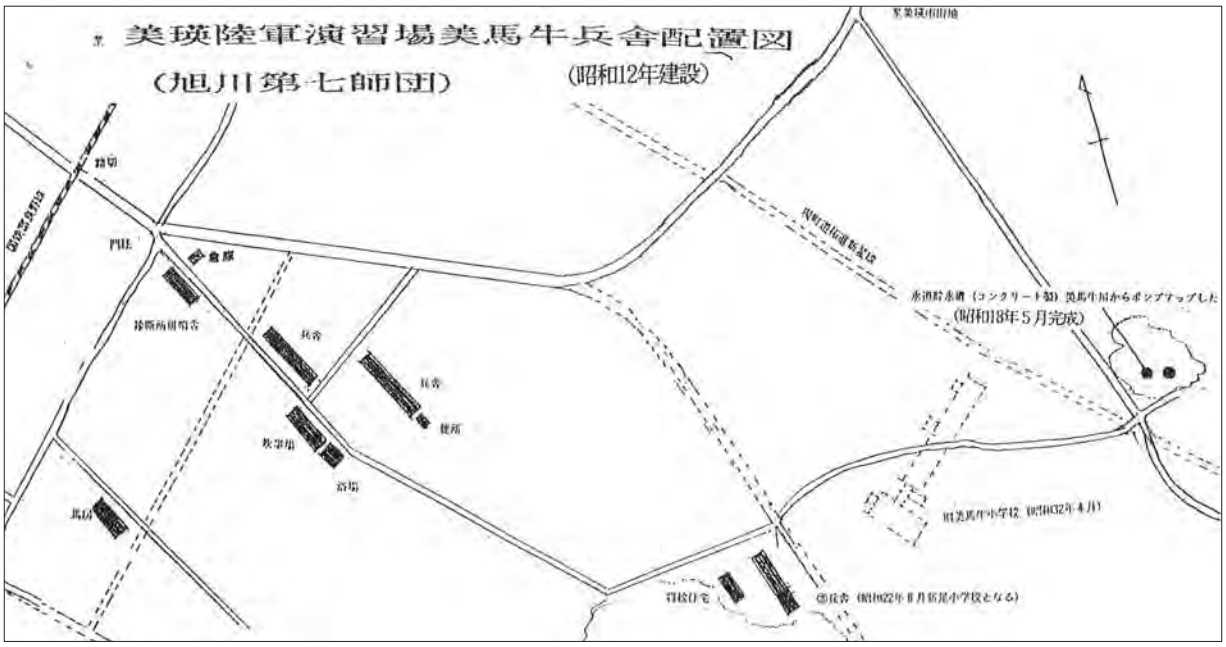
◇　演習場倉庫の窓

○　給水漕・・・コンクリート製の水道貯水槽。美馬牛川よりポンプで汲み上げ、美馬牛地区の演習場施設の水源となっていた。

美馬牛駅から車で数分、美馬牛小学校道路脇に二つの小山らしき物が見える。

○　演習場倉庫・・・保存のために移築復元したもの。「あすなろ館」として地域で活用されている。美馬牛駅前にある。





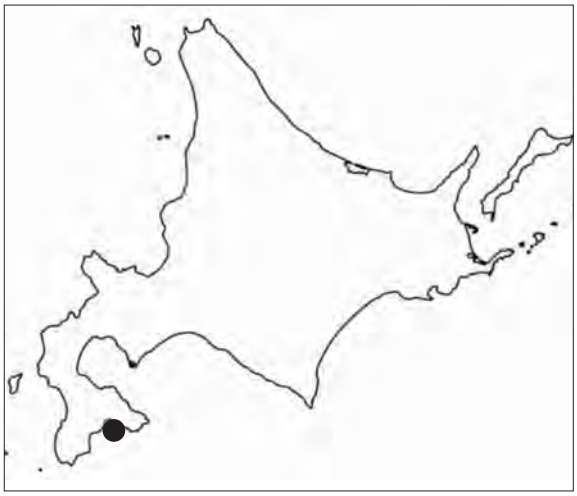
(「美馬牛90年の歩み」より抜粋)

函館市　学童集団疎開

概　要

本州では、東京をはじめ多くの都市圏で、子どもたちを地方都市などへ分散させる学童集団疎開が頻繁に行われていた。それまで、空襲などの直接被害が無かった北海道では、1945年まで集団疎開は行われていなかった。北海道空襲の後、函館では、日本で最も遅い学童集団疎開が行われた。

あわせて、歴史のある学校では、国民学校当時からの沿革史が残されていることがある。現在の函館市立青柳小学校の例を挙げる。



現在の函館市立青柳小学校の様子

資　料

1．渡辺康夫さん（1945年当時函館市立新川国民学校４年生）の証言

私は学童集団疎開の体験を持つ１人です。（函館空襲から）10日程過ぎてから学童集団疎開が始まりました。当時私は新川国民学校の４年生でした。学童集団疎開の行き先は八雲町野田生（のだおい）のお寺です。寺の名前は失念して想い出せませんが、函館駅で父母から「からだに気をつけなさいよ」と言われて汽車に乗って行きました。今も忘れられないのは、宿舎が寺の本堂でしたから夜になると気持ち悪く、おっかなかったことです。それに何といっても食べ物が不足してありませんでしたので野草入りのおかゆです。…終戦になり、野田生から列車に乗って来た車中で大人のお客が「函館には米兵達が沢山来ていて不安で、女の人は夜に外へ出入り出来ないような状態で大変危険だ。」というので非常な恐怖感を抱いて来た記憶があります。教員になってからも一貫して、自分の教え子たちには、二度と戦争体験をさせてはならないと考えて来ました。

「証言　日本最後の学童集団疎開」より

2．現在、函館市立青柳小学校に残されている物と青柳国民学校沿革史から抜粋

⑴　現在、函館市立青柳小学校に残されている物

- 「教育勅語」（桐製の箱もあり）縦長の物と横長の物の２種類
- 「国際連盟脱退に関する詔書」「対米英宣戦布告詔書」
- 尋常小学校国史絵図～「忠君愛国の情操と徳性とを滋養すべき…」と記述あり。

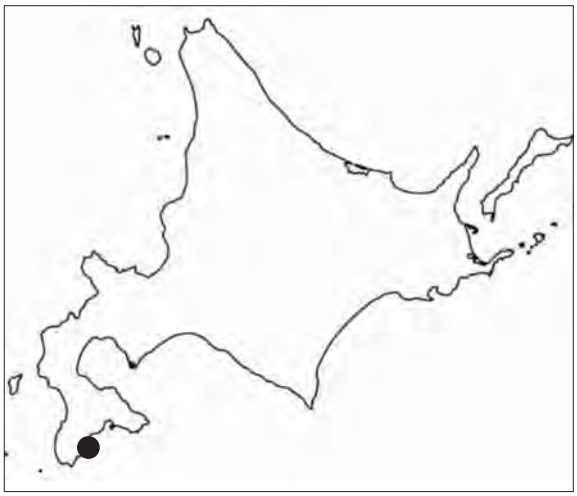
⑵　青柳国民学校沿革史より一部抜粋

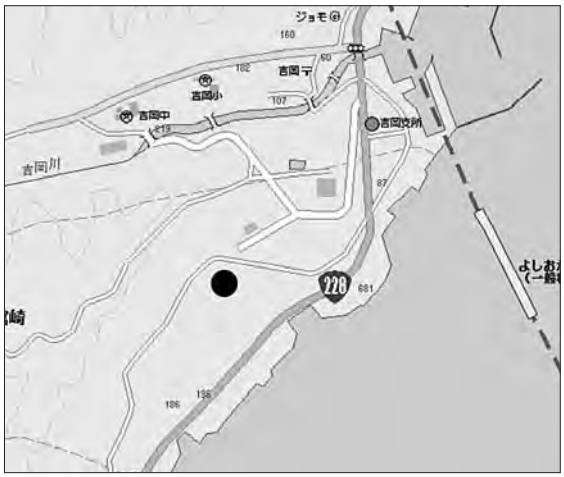
1945年４月９日　楓樹液採取出動（高２）
　　10日　楓樹液採取出動　記名調査（胸名、上靴、防空帽）
　　12日　防空非常訓練実施
　　16日　市疎開衣料集積
　　20日　Ｂ29解説指導講習会実施
　　21日　種薯二俵出荷（地下室保存）
　　25日　集積保管中疎開衣料疎開先へ出荷
　　26日　護国神社参拝
　　29日　天長節参賀式
　　30日　体操修練会（航空体操）
　５月７日　護国神社清掃（高２）
　　11日　護国神社参拝　警戒警報発令
　６月13日　体育大会
　　23日　砂利集積出動
　７月２日　授業停止（本日より向う一週間、防空家庭訓練）

福島町　駆逐艦「柳」平和記念塔

概　要

1945年、７月14日、15日の両日「北海道空襲」の中で、函館と青森を結ぶ青函連絡船網の破壊を目的に、海上にいる連絡船と函館と青森の連絡船基地などに対して大規模な攻撃がかけられた。この際、米軍機は津軽海峡の福島町月崎沖に停泊をしていた駆逐艦「柳」（1,262トン）を発見し攻撃。駆逐艦「柳」は撃沈された。死者21名、負傷者95名。





吉岡「トンネルメモリアルパーク」内

駆逐艦「柳」の碑と福島町から望む津軽海峡

資　料

駆逐艦の高角砲や機銃からパッパッと射たれる火と煙、飛行機から撃ちだされる機銃掃射や爆弾の恐ろしい音、大きな水柱で艦が見えなくなり「あっやられたか。」と思った次の瞬間波をけって進んでいる艦の姿が見え、そのような状態を繰り返したあと艦は突然高い高い水煙で見えなくなったのです。その様子を裏山の林の中から見えていた人達はいっせいに手を合わせて「なんまいだ、なんまいだ。」と泣いたのです。そのあと水煙の消えた艦は停止し、艦尾の一部はまくれあがっていました。

（「広報ふくしま」～駆逐艦「柳」福島沖交戦記録シリーズ）

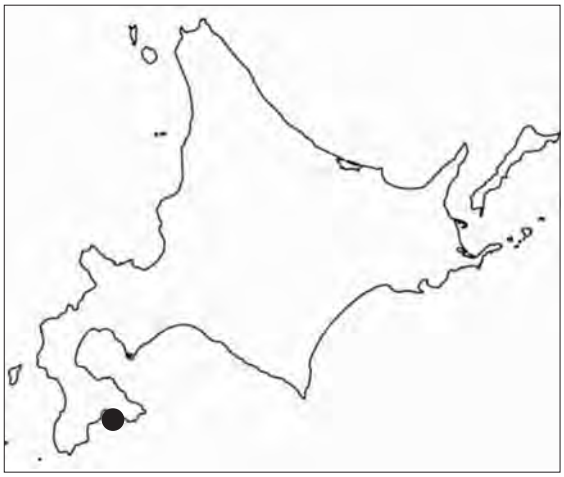
平和記念塔

米軍機の攻撃を受ける駆逐艦「柳」

函館市　有川桟橋の建設

概　要

石炭増産の国策により、北海道側の積出港の一つとしての函館において、1922年、青函連絡船係留用岸壁として計画された有川桟橋建設工事が着工され、1943年有川埠頭第３岸壁、44年埠頭第４岸埠頭が完成した。その第４岸壁は、岸壁の中は空襲の時には防空壕として人間が歩ける広さと高さの通路が確保される特殊なつくりになっている。かつて中国・朝鮮からの強制連行された人々が埋め立ての土石を運んだ場所が手前の広場として残っており、現在は、ヨット置き場となっている場所が朝鮮人・中国人労働者の強制労働によって埋めた場所である。現場体験者の林憲蔵さんによると、「･･･その当時の強制連行者は真冬でもはだしにワラジ履きで足から血を流しながらも、棒頭の号令で怒鳴られて働かされていた。」そうである。



コンクリート製の有川跨線橋橋脚跡

有川埠頭第４岸のようす（2001年撮影）

資　料

1．有川構内線のある現場で勤務した体験者、林　憲蔵さん、石川哲男さんの証言要約

有川の３岸、４岸の増設工事は、国鉄札幌工事区施設部の指揮監督の下、国内（市内やその周辺の住民も含む）からの徴用と中国・朝鮮からの強制連行者によって進められた。

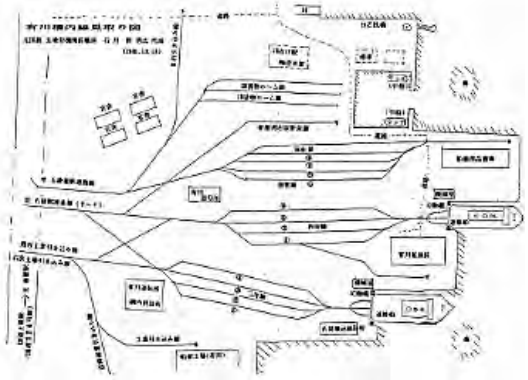
その土・砂・石は戦時中に敵の空襲から機関車を守るための防空壕を作った穴の土石（現在の函館市西桔梗町、宇治園工場のある付近）と、同じく同町にある守田の山より土砂を採掘し、有川の３岸、４岸工事の他、五稜郭操作場の拡張工事及び五稜郭駅等の埋め立て工事に使われた。

土砂の運搬は、施設部が管理使用していた施設部専用の運搬線路に当時使用されていた工事用機関車7200型にトロッコ７台を曳かせて作業を実施していた。運搬されたトロッコは目的地まで行って停止し、土砂はサイドの壁が開き地面に落ちるようになっていた。トロッコは一般貨車の半分ぐらいの量しか運搬出来なかった。

当時、岸壁を作る際はケイソンの施設もなく、埋め立て用の土砂は海辺の近くまでトロッコが往来する線路を引き海中に土砂を投げ入れた。運んだ土砂はスコップなどを使って手作業で整地した。波の荒い日は土砂が沖に何度も流された。

特に第４岸は、守田の山から貨車で運んだ土を強制労働の中国・朝鮮人によって波打ち際に運ぶと、大波で土が沖へさらわれるといった繰り返しであった。土砂が余りにも流れるので杭を打って流失を防止したこともあった。土砂は守田の山からトロッコ線専用の線路があった五稜郭機関区の西側を通り五稜郭駅の横を抜けて有川への通路線を通って運んだ。当時のトロッコ線専用の工事線路は現在道路となって使用されている。

聞き取り・要約は浅利政俊さん（函館空襲を記録する会）



送れ一噸でも多く

函館港局の石炭輸送荷役挺身隊

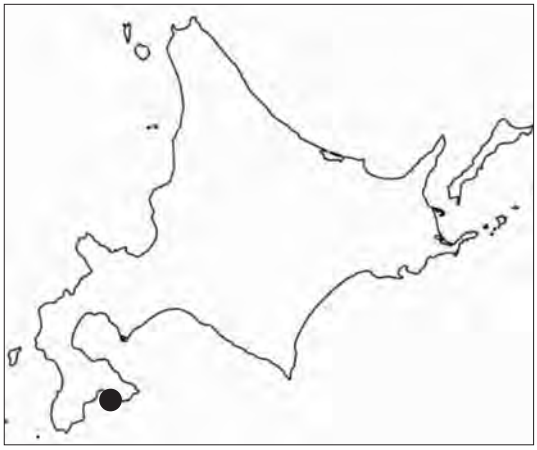
全員決死、突貫作業開始

函館市　函館山要塞

概　要

日清戦争後、新たなロシアの脅威に対して北方を警戒し、函館港と津軽海峡の警備のために1897年に要塞建設がはじまった。建設には５年を要し函館山全域に様々な施設が設置された。砲台は、御殿山第１、御殿山第２、千畳敷（28センチりゅう弾砲）薬師山砲台及び千畳敷（15センチ臼砲）、立待保塁（９センチ加農砲）の４箇所。そのほかに掩蔽壕、発電所、電灯所、火薬庫、弾丸庫、戦闘司令所などが設置された。

これらの砲は、射程が８kmほどで、津軽海峡中央部を往来する船舶を攻撃できず、実際に要塞完成後、まもなく始まった日露戦争においても、ロシア海軍巡洋艦３隻が津軽海峡で輸送船「高島丸」を撃沈させ、伊豆半島沖まで南下したが、要塞はただ手をこまねていただけだった。1927年、津軽要塞と改称され、大潤砲台、汐首岬砲台、白神砲台、竜飛砲台と連携して津軽海峡の警備をすすめることになったが、設置された砲は、旧式のままということもあり、1945年、青森・北海道空襲でも市民を守ることはなかった。敗戦まで市民は、函館山に立ち入ることはおろか、写真さえ撮ることを禁じられていた。

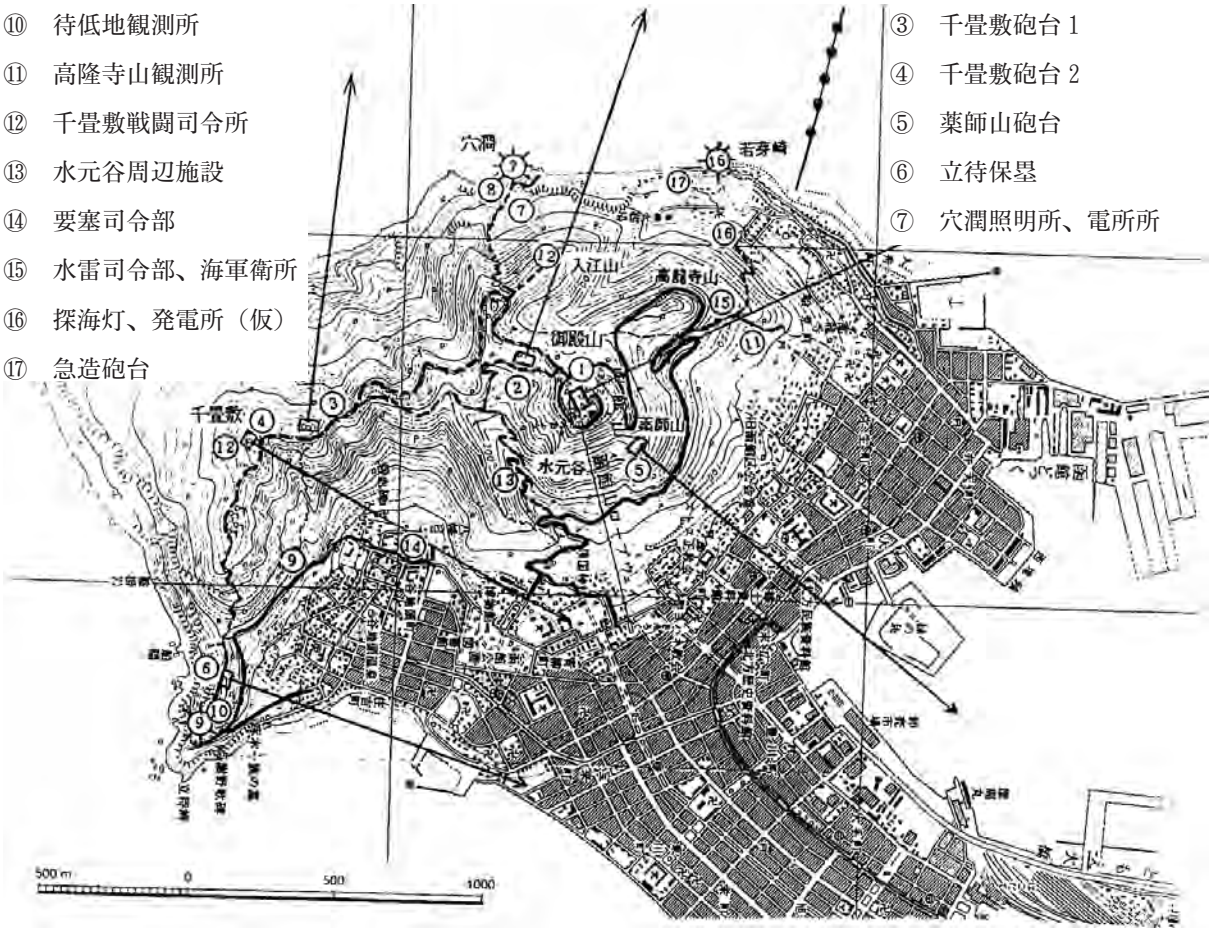


御殿山第２砲台跡

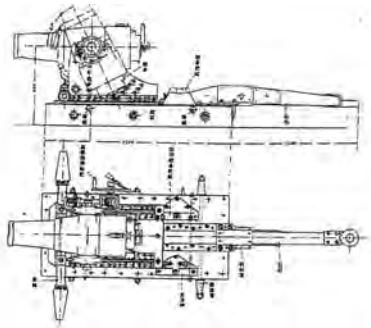
資　料

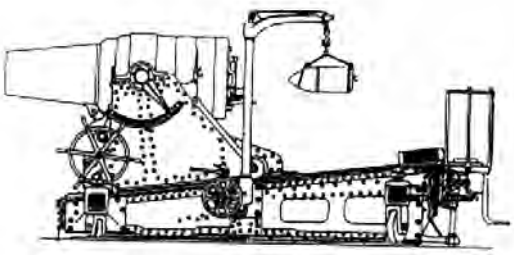
⑧　穴潤低地観測所
⑨　立待照明所、発電所
⑩　待低地観測所
⑪　高隆寺山観測所
⑫　千畳敷戦闘司令所
⑬　水元谷周辺施設
⑭　要塞司令部
⑮　水雷司令部、海軍衛所
⑯　探海灯、発電所（仮）
⑰　急造砲台

①　御殿山第１砲台
②　御殿山第２砲台
③　千畳敷砲台１
④　千畳敷砲台２
⑤　薬師山砲台
⑥　立待保塁
⑦　穴潤照明所、電所所



28cmりゅう弾砲





15cm臼砲

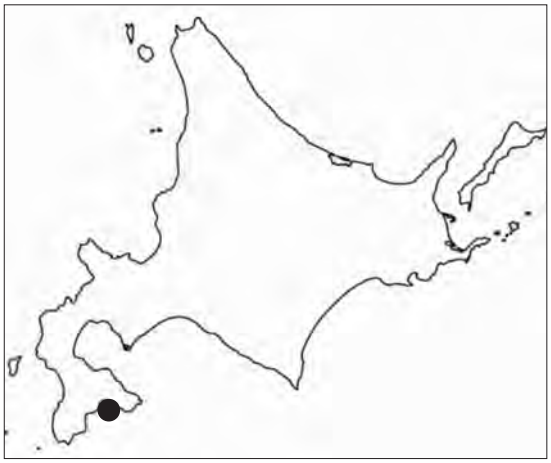
資料；「函館産業遺産研究会」より提供

現在ある函館山ロープウェイ山頂駅の真下には御殿山第一砲台弾薬庫が残されており、公園管理所の許可を得て見学することができる。

函館市　函館空襲

概　要

1945年、７月14日、15日の両日「北海道空襲」の中で、函館と青森を結ぶ青函連絡船網の破壊を目的に、海上にいる連絡船と函館と青森の連絡船基地などに対して大規模な攻撃がかけられた。14日早朝から、港湾施設をはじめ函館市内に米海軍航空機によって爆弾やロケット弾、機銃掃射などによって波状的に攻撃された。海上では死者・行方不明者429名、駒止町（現在の船見町付近）では、大規模な火災が発生し384戸が焼失するなどして全市で29名が亡くなった。15日午前５時ごろ36機の攻撃機が飛来したものの上空は雲に覆われ、市内での被害がなかったが、戸井地区、南茅部地区、椴法華（とどほっけ）地区では機銃掃射などによって16名が犠牲になった。



称名寺にある「函館空襲慰霊碑」

旧駒止町に残る火災跡（木田）

資　料

1．船舶関係の被害

	青函連絡船	汽　　船	機　帆　船	駆　逐　艦
沈　　没	8	11	30（70）	1
座礁・炎上	2	4	1	
破　　損	2	8	16（79）	

※　カッコ内数字は「米軍戦略爆撃調査団報告」による。

	乗組員	函館船員養成所生徒	旅　客	海軍警備隊隊員	その他	合　計
死　者	45	14	53	27	2	429
行方不明者	288	死者・行方不明者の別を確認できず				
負傷者	61		1	1		63

2．陸上の被害

	死　者	負傷者	建造物破壊	家屋焼失
西部地区	25名	16名	12～13棟	169棟384戸
住吉地区	2名			
函館駅周辺	23名		12～13棟	（プラットホーム490㎡）
松風・大森町付近	11名		9棟	
海岸町付近			4棟	
戸井地区	7名	1名		9戸
椴法華地区	3名		役場1棟	椴法華国民学校焼失
南茅部地区	6名	多数	6棟	10戸
その他	28名			

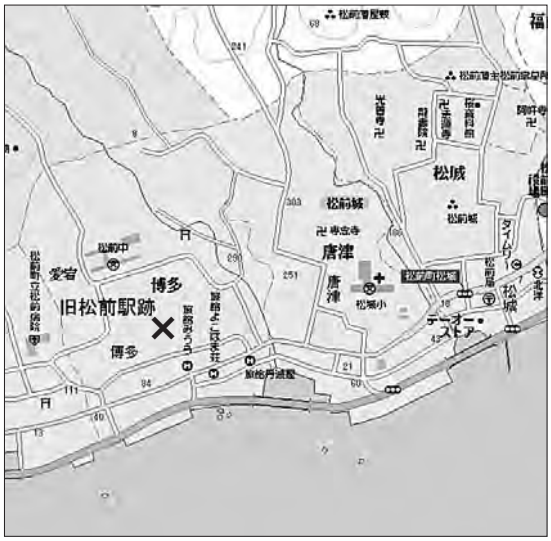
3．証言から（市立函館病院を攻撃した米軍機）

函病（函館病院）の前の基坂（もといざか）の真上に米空軍機が近づき、機関銃から弾丸が乱射され路上のコンクリートの路面にパラパラと落ちて大変な音がしたのです。そして敵の弾丸が落ちるのが見えるのです。明らかに函病を攻撃して来たんです。130号室に軍属と共に居た人がおりまして、「撃たれた！」と連絡してきました。「大変だ！弾丸が当たった人が出た！」と大声で叫んできたのです。もう脈は全くふれていませんでした。地下足袋をはいたまま足をかけ、力いっぱい帽子に突き刺さってる弾丸を引き抜きました。弾丸は頭蓋骨深く突き刺さって、帽子と共にいっしょに抜けて来たのです。弾丸は脳を貫通したのではなく深く骨に突き刺さっていたんです。患者の頭から抜きとった弾丸の長さは6センチ位でした。　　「教えて下さい。函館空襲を」（浅利政俊著　幻洋社刊）

松前町　松前線工事への朝鮮人労働

概　要

1941年、隣接する上ノ国村から産出されるマンガン鉱石輸送のために、碁盤坂駅（後の千軒駅）まであった福山線（翌年松前線に改称）の延長工事が開始された。工事計画の拡大に関わっては、町民や近隣住民に知らされないまま着手された。この際、約1000名の朝鮮人労働者が動員され、過酷な労働を強制されたが、線路は完成を見ることはなく、現在も海岸の険しい断崖に線路の後が残っている。



現在も残る建設途中で放棄された松前線跡
（白神岬をすぎた松前町内国道228号線から見える鉄路の跡）

資　料 「松前町史」から

松前線工事とは？

1940年（昭和15年）、国策会社「帝国鉱業開発会社」が松前に進出し、軍需用鉱石の満俺（マンガン）掘削のために福山鉱山を設置し、千軒岳直下の高小屋鉱山を設置し、前千軒岳直下の高小屋地区の鉱床を大々的に開発することになり、さらに福山鉱山は高小屋鉱山を主体に、健八流、御三岳（旧大島村）、豊国、赤神（旧小島村）などの鉱山、隣村上ノ国村の中外、今井（字石崎）と合わせて国内産出の満俺をこの地域で賄うべく計画し、碁盤坂駅（後の千軒駅）から、上ノ国村字石崎までの福山線延伸が決定されたが、住民はおろか町村にさえ知らされていなかった。

この工事に動員されたのは、ほぼ全員が朝鮮半島出身者で南部の慶尚北道、慶尚南道出身者が多く全体の３分の２を占めていた。1941年から1942年の間に、この地域で鉱山及び鉄道工事に従事していた朝鮮半島出身者は880人。それ以降では御三岳、豊国の両鉱山にそれぞれ50人ずつ、高小屋鉱山には100人以上が、合計1000人の朝鮮半島出身者が松前町内で働いていた。

この鉄道工事に従事していた朝鮮人労働者は「朝鮮人勤労報国隊」（あるいは「勤奉隊」）と呼ばれ、食糧配給が乏しく衣料についても着たままの物しかない人が多かった。

飯場はいわゆる「タコ部屋」と呼ばれる方式で、出入り口は常に施錠されており、畳１畳分の居室の窓の外には鎧戸が取り付けられ、夜には居室にも施錠されていた。

体験者の三井忠男さんの証言（４年間松前飯場、赤神飯場に勤務）

幹部及び模範台の日給は２円80銭から２円50銭。平の（朝鮮人）勤奉隊員は日給１円80銭で、雨天の場合は作業が休みになるので実質稼働は月15日～20日であった。飯場の食費は月12円、作業のための広東袋のような作業着やズボンは９円、草鞋は20銭、その他にタバコ等を入れると黒字になる人はほとんどなく働いても赤字になるという仕組みになっていた。

朝は、午前５時起床、午前６時日章旗を掲揚して作業現場に向かい、班分けをして作業に入るが、それに取締人（模範台）、逃亡監視と土木の指導をし、さらにその上に棒頭という幹部がおり、作業の指揮監督をしていた。幹部は仕事を怠けている者があれば衆人の見ている前であろうと棒で殴りつけ、隊員の戒めとし、作業を見ている町民が思わず目をそむけるような残虐な行為があえて行われていた。

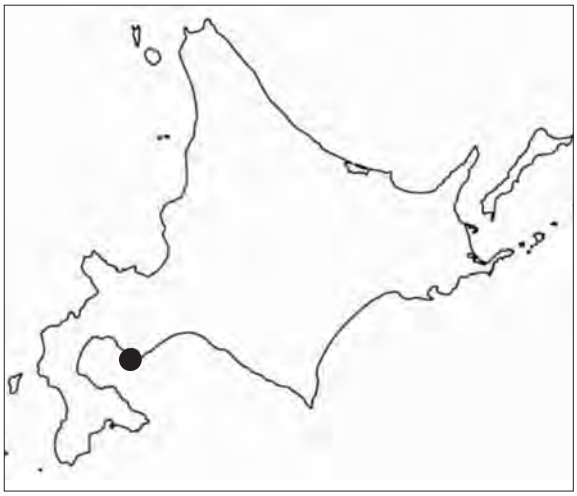
作業は冬期間午後６時、夏期は午後７時までに終わり、飯場に帰り、毎日入浴の上夕飯を食べた。夜間は逃亡の恐れがあるので、特別の場合を除き（作業は）行わなかった。食事は一日２合で広東米が多かった。食糧配給は１人１日２合３勺に労務加配米があって、１日２合５勺は配給になっていたが、幹部の多食分に充てられ、隊員の実質飯量となったのは、２合であった。食事はつねにワカメのみそ汁にたくわん３、４切れ、週に一度位ホッケの焼魚がつくというものであった。そういうわけで激しい労働と空腹のため、監視の目を盗んで畑の馬鈴薯や人参、大根を食べたり、中には馬糞の中のとうもろこしを拾って喰うものがあり、監視人が発見するとまた棒で叩くということが常に行われていた。

また、勤奉隊員の今一つの悩みは衣服の問題であった。本州に渡る際支給された作業服は３、４ヶ月で破れてしまうが、衣料は絶対量が少なく配給制であるので、たまに配給があっても幹部用にされ、労働者たちの手には入らない。まして酷寒期の作業には防寒具もなくゲートルの中にわらを巻いて作業するなど見るも無惨な姿だった。そのため風邪にかかる者が続出し、それに体力の消耗もあって急性肺炎となって死亡するものが多かった。

室蘭市　室蘭への艦砲射撃

概　要

東北地方から北海道全域にかけて米軍の大規模な空襲が行われた1945年７月14日、室蘭上空には、米軍機約30～40機が襲来し、午前・午後と２回、船舶をはじめ埠頭・灯台・鉄道・市街地に対して機銃掃射爆撃が行われた。港内や港外では約20隻ほごは撃沈され、多くの工場も攻撃された。翌15日朝、日本製鋼所室蘭製作所・日本製鐵輪西製鐵所の二大軍需工場を対象に「アイオワ」「ウイスコンシン」「ミズーリ」といった戦艦３隻や巡洋艦２隻・駆逐艦９隻から１時間にわたって艦砲射撃が行われた。しかし、被害は軍需工場のみならず、御前水や中島社宅街には路上に死体が転がっていた。戦後になって、経済安定部は、14日は、死者６名、重傷者２名、15日は、死者387名、重傷者105名、行方不明者15名と発表した。これは、軍人軍属を除く数字で正確な死傷者数は分かっていない。



室蘭八幡宮の境内に建てられた慰霊碑（この他にも、中島本町、輪西にも慰霊碑が建てられている）

資　料

1．「師範学校（現道教育大学）」学生の辻岡明信さんの証言

師範学校卒業の前年招集された辻岡さんの体験

７月、私は幹部候補生の試験を受けるため、室蘭に向かった。14日、試験を終えて、胆振管内早来町の部隊に戻ろうと東室蘭駅に向かったが、空襲警報で列車の動く気配はない。高台に避難し、機銃掃射をする米軍艦載機を見上げた。その日は小学校の同級生の家に泊まった。

翌日も朝から空襲警報で列車は動かず、同級生の姉さんと２人で家を守ることになった。そのうち飛行機の音が聞こえてきたが、避難せず、家にとどまった。まもなく家全体が揺れるようになった。外を見ると、近くの家が土ぼこりを上げながらこなごなに飛び散った。「爆弾だ。防空壕に逃げなくては」と、姉さんとともに走りだした。十字路に来て、「どっちの方向に逃げようか」と声をかけたそのとき、体がふわっと浮いた。次の瞬間、目の前が真っ黒。息が苦しく、頭が土に埋もれていることに気づいた。

かぶっていた鉄かぶとを外し、顔を上げて立って驚いた。同級生の家がない。埋まっていた穴からはい上がると、姉さんが倒れている。抱き上げた途端、口から真っ赤な血があふれ出た。防空壕まで走り、何とかするように頼んだが、まだ爆音がするので、姉さんの母親も助けに出られない。私も壕がいっぱいで入れず、どこに逃げたらいいのかも見当もつかず恐ろしかった。さまよっているうちに兵隊に会い、初めて、米艦からの艦砲射撃だったとわかった。

後日、同級生の家を訪ねた。仏壇には、亡くなった姉さんが奉られていた。あの日、私とは、たった１メートルしか離れておらず、わずかな差が生死を分けた。

戦後、師範学校に戻った学生たちは、戦場で命を懸けろと指導してきた教員を責めた。「彼らは、弁解せず、ただ謝るだけ」。こんな教師にはなりたくない、と感じた。

辻岡さんは卒業後、中学校の教壇に立つと、体験を話し、生徒に本質を見極めるよう訴えてきた。「最近盛んに使われている『愛国心』というのは、何かあったら国のために命を投げ出すこと。軽々しく使う言葉ではない」と力を込めた。

「戦渦の記憶～戦後六十年　百人の証言」（北海道新聞社刊）より

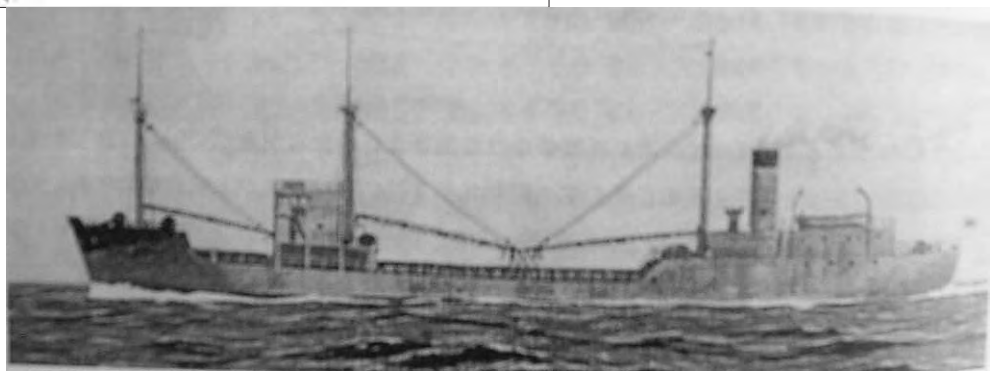
日高町　厚賀沖　大誠丸事件

概　要

アジア・太平洋戦争末期の1945年４月19日、北千島占守（しゅむしゅ）島から沖縄に投入される兵員1393人を乗せた輸送船「大誠丸」が厚賀沖でアメリカの潜水艦の攻撃を受けて沈没した。大誠丸は、北千島の占守島を出発し、幌筵（ほろむしろ）島で海上機動第３旅団の兵員、戦車６両、爆弾2400発、大型上陸用舟艇４隻、火砲など600トンを載せ、函館に向かった。積荷は函館で一旦陸あげされ、兵員は駆逐艦に転乗し、沖縄へ向かう予定だった。しかし、大誠丸は19日１時55分、新冠郡節婦（せっぷ）南西12キロ付近で、潜水艦サンフィッシュの雷撃を受け、船は直ちに停止、右舷25度に傾斜し５時20分に全没した。

大誠丸は「人爆混載」の輸送船だったため、乗員、兵員は被弾後、真っ暗な海に飛び込む者も多かった。救助の要請で近くの浜では漁民が小型漁船で救助に向かった。また、漂着した兵員も含め救助者を近隣の住民が総出で救護に当たったという。結局、742人の命が地元住民に救われたが、651人が命を落とした。

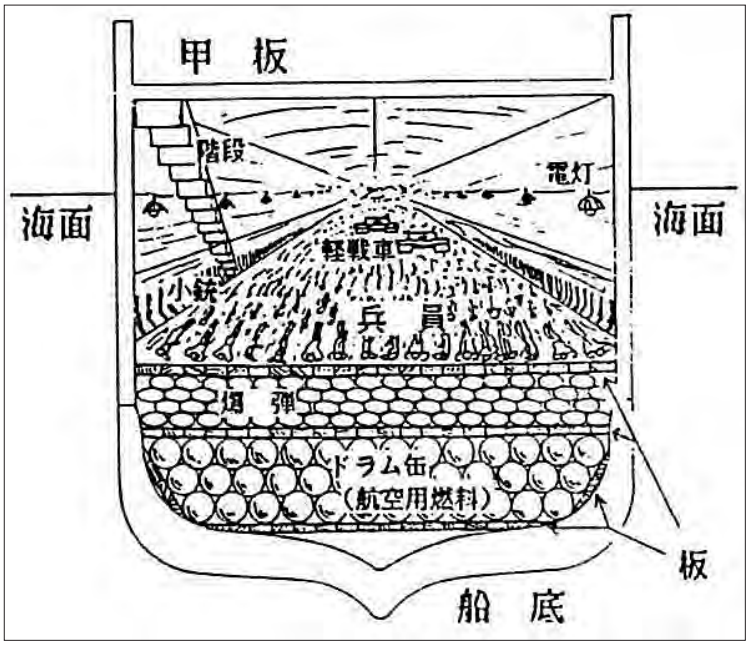
大誠丸航海ルート
日高支部発行
「日高における戦争の記録」より



大誠丸

資　料

大誠丸内部の図



証言から（救助活動した住民）

4月19日の朝、兵隊が来て、「輸送船が攻撃を受けたので漁船を出してほしい」と言いました。その当時は、漁船は浜にあげていたのですが、船を出しました。いざ、沖へ船を出してみるとその数の多いことに驚くばかりでした。海の中で流れながら「助けてくれ」と叫んでいる兵隊もたくさんいました。1回目は60人を収容して帰還しました。3回目の救助作業では、元気のよい兵士が3人であとは遺体ばかりでした。

証言から（大誠丸に乗っていた兵士）

船は、すぐに沈没しなかったが、総員退避の命令で少ない救命胴衣を奪うようにして身につけ、暗い海へ飛び込む者も多かった。しかし、みぞれ混じりの雨が降っていた4月の身を切るような冷たい海中での漂流は危険と判断した私は、船内にあった潜水服を着て、沈没の間際まで待った。その間に、船の救命艇が救助を求めて陸へ急いだ。艇がたどり着いたところは、門別町の厚賀だった。当時、そこには漁港もなく、漁船は砂浜にあげられ、まだ、春の出漁準備もできていなかったが、部落総出で船を用意し救助に向かったと後で聞いた。いよいよ沈没の危険が迫ったとき脱出した。身体の消耗を防ぐため、漂流物につかまり、白みかけた陸を見ながらじっと救助を待った。救助船が着いたのは、夜が明けきった8時ごろだった。

生存者らは、息つく暇もなく船が次々と収容してくる遺体の受け入れに従事した。町の人は山から薪を切り出し、一体ずつ名札を立てながら、河原で丁寧に火葬してくれた。この煙は1週間も町の空を覆い尽くしたと言う。ただちに憲兵隊が入り、事件の漏洩を防ぐため、「かん口令」を敷く中、翌20日は、そそくさと汽車で青森へ向かった。

アジア太平洋戦争と『輸送船』

戦争中、東南アジアから石油等の資源を輸送するのも、中国、太平洋の戦線に兵員、武器弾薬を運ぶのも船に頼らなければならない。しかし、護衛についての意識が薄く、潜水艦や戦闘機の攻撃を容易に受け、多くの船が沈められ、命が犠牲となった。また、徴用された船は2600隻に及び船員も6万人余が命を落とした。

参考資料「日高における戦争の記録」日高支部発行　1991年

平取町　二風谷の奉安殿

概　要

二風谷の萱野茂アイヌ記念館に保存されている皇民化教育のシンボル。「北海道旧土人保護法」により、道内には23校の「旧土人学校」が設置された。この奉安殿は1912年、天皇の臣民への同化を強制するものとして造られた。萱野茂さんは、奉安殿の前で最敬礼をしていなかったため教師に殴り倒された経験を持っている。敗戦後、この奉安殿は1945年に撤去された。しかし、これは明治期に造られ、同化政策と皇民化教育を押し進めた象徴として貴重なものであることから、資料館に移築保存された。

明治政府のアイヌ民族、沖縄の人々に対する「同化政策」は、アジア諸国への植民地政策への原型であった。内国植民地としてのアイヌ民族に対する同化政策が、台湾、朝鮮、ミクロネシア、「満州」、等アジア民衆に日本語、天皇制、日本の慣習、文化を強要する「皇民化教育」のモデルとなっていく。

この「奉安殿」は、通常の奉安殿ではなく、この意味で日本の天皇を軸とする「植民地支配」の象徴であり、アイヌ民族への抑圧、人権侵害の象徴とも言える。

資　料

正面には観音開きの戸。外装は茶色のトタン張りで、内部は漆喰壁造りである。
屋根は補修され、木造トタン張りの姿はほぼ原型を保っている。

萱野茂二風谷アイヌ資料館

二風谷の民族文化研究家だった故萱野茂さんの個人コレクションを展示している。アイヌ民族関係の所蔵品だけではなく、世界各地の先住・少数民族の生活・工芸資料が数多く陳列されている。

「御真影」が納められていた棚

貝沢正さんの自伝から

校門と校舎の中心南側に天皇・皇后両陛下の御真影を祭る奉安殿が松に囲まれて建てられてあり、登下校の際には必ず最敬礼させられました。ここには御真影と教育勅語がおさめられ、儀式の際に先生は礼服をつけ白い手袋をはめ、扉を開け前にささげて全員敬礼の中を重々しく式場に入りました。

奉安殿とは

奉安殿とは戦前の学校に「下付」された天皇皇后の「御真影」（肖像画や写真）や教育勅語などの謄本類を保管された建物である。明治、大正期の学校では校長室に作られた。大正末期、昭和初期には火事、地震の災害を避けるために校舎外に独立して建てられるようになった。昭和に入り、児童には登下校の際に最敬礼することが義務付けられた。教職員が職員室からそのようすを見て、守らない者には容赦ない制裁がまっていた。

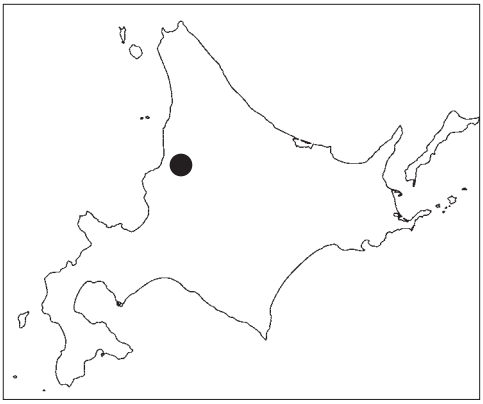
幌加内町　雨竜ダム建設「タコ部屋」労働・朝鮮人強制労働

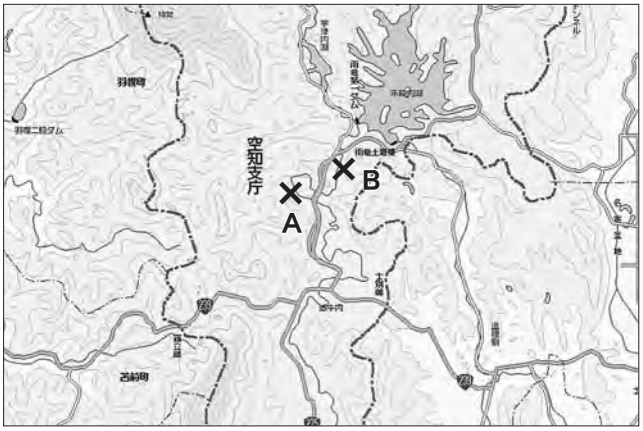
概　要

雨竜ダム建設工事では、元請の飛島組や雨竜電力の下に、たくさんの下請けの会社や組があり、きびしいタコ部屋労働（日本人）と朝鮮人強制連行・労働が行われた。その実態のすべてはまだはっきりしていないが、日本人（その多くはタコ部屋労働者）は少なくとも数千人にのぼったと思われる。

また、1939年からは、朝鮮半島から強制連行された労働者が働かされた。その数は工事途中の1942年の段階で3,000人近くにのぼっている。このダム建設のために「最大時で7,000人、のべ600万人」の労働者が働かされたとも言われている。そのうち、これまで明らかになっている犠牲者（名雨線工事を含む）は、日本人168人、朝鮮人36人となっている。

現在、日本・韓国・朝鮮・アイヌの若者たちを中心として、遺骨発掘と歴史認識共有を含めた新しい人間関係樹立をめざす「東アジア共同ワークショップ」が行われており、雨竜ダム建設に関わる強制連行の実態解明がすすめられている。





◇A　生命の尊さにめざめ、民族の和解と友好を願う像

◇B　旧光顕寺～笹の墓標展示館

資　料

○　笹の墓標展示館内展示物

○　旧光顕寺について

「1935年、朱鞠内～宇津内間の鉄道工事が始まりました。労働の担い手は主に『タコ部屋』労働者でした。厳しい労働の中で次々と出た鉄道工事の死者は、光顕寺に運び込まれました。1937年には日本人41人、朝鮮人２人の43人もの犠牲者が出たのですから、月平均４人もの死者があったことになります。1938年に雨竜ダム工事が始まってからも、光顕寺は死者をとむらうお寺でした。檀家（寺の信徒）の人の証言によると、濡れたままの遺体が次々と運び込まれ、本堂の畳は腐ってしまい、床が抜けたといいます。」

（「空知民衆史講座ホームページ」より抜粋）

○　「タコ部屋」労働とは

明治政府は、北海道を「開拓」するため、まず囚人を石狩・釧路・網走方面に送り込んだ。彼らは鎖につながれて、死ぬまで厳しい労働をさせられた。彼らの造った道路を通って、以前は武士であった士族を中心とした屯田兵が送り込まれ、「開拓」されていったのである。その後、工業化が進む中で、北海道の木材・石炭・鉱石をはじめとする天然資源の重要性が増していった。これらの資源を利用し、産業をおこすため、道路・鉄道・港湾・工場地・宅地・治水・ダムなどの土木工事は増えた。ところが、この強制労働で使われた囚人は、明治政府の方針に反対して捕らえられた政治犯が多く、鎖に繋がれて死ぬまで労働をさせるので、死刑よりも過酷であるといわれたこの刑には反対の声が上がり、また、土木工事での労働力の不足から、明治中期には囚人労働はなくなった。しかし、「未開の地」であった事から、人を募集しても人が集まらない事は目に見えていたし、途中で脱落者が生ずる事も考えられた。また、公共の職業斡旋の形態ができあがっていなかった事もあり、民間業者が労働力をかき集めてある場所に幽閉し、劣悪な労働環境下で酷使する、いわゆる『タコ部屋』労働が行われるようになった。

（「空知民衆史講座ホームページ」参照）

帯広市　帯広空襲の碑

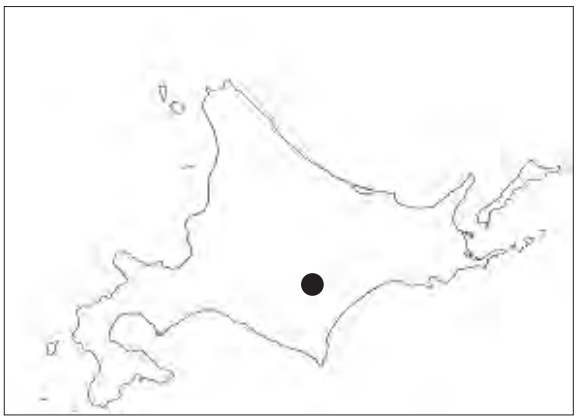
概　要

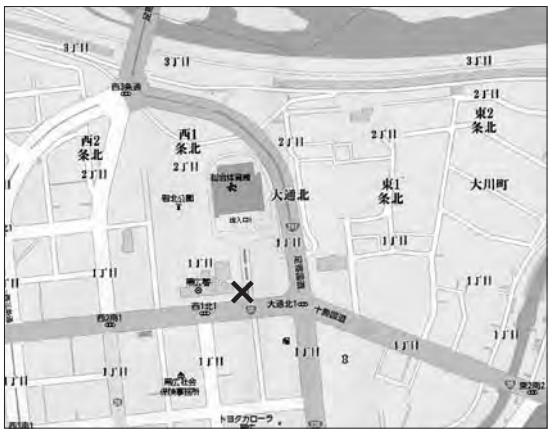
1945年７月15日、この碑と目と鼻の先ほどの場所が空襲にあった。

記念碑に刻まれている「59戸の被災」とは、市史に書かれていたことによる。が、実際には２～３百メートル離れた西２条２丁目あたりまで、機銃の弾や、破片がささったり、天井がおちて、畳の上が土砂の山であったり、ということから、正確にはかなりの数の家が、被災していると考えられる。

また、当初碑文には亡くなった５人の方々の名前も入れる予定であったが、「史跡」として教育委員会に寄贈する段階でクレーム（でなければ、市有地は借りられなかった）がつき実現しなかった。

現在、「帯広空襲を語る会」が空襲体験の継承を行っている。





碑文より

この付近一帯は昭和20年７月15日午後３時　アメリカ軍の空襲にあい死者５名
家屋の損壊59戸の被害をうけた　　帯広市教育委員会

資　料

証言　帯広空襲　野田たみ子さん（71）帯広在住

必死で防空ごうに

帯広大谷高等女学校の生徒で12歳だった。当時の自宅は市内西２南１。1945年７月15日午後３時ごろ、空襲警報のサイレンが鳴り、自宅庭にあった防空ごうに隣家の赤ちゃんを抱いて入った。『ドーン』とものすごく大きな音がして、赤ちゃんが火のついたように泣いた。

大人５、６人は入ることができた立派な防空ごう。厚さ15―20センチの木製のふたが衝撃ではね上がり、空が見えた。どのぐらいたったか、「敵機が去った」という大人の声がして、見上げると飛行機が何機も帰っていくところだった。

両目失った小さな子

強烈な印象として残っているのは、家の防空ごう近くで大けがを負った男の子を見たこと。お母さんに連れられ、国道沿いを西の方へ行った。男の子は両方の目が飛び出ていた。

あの日は、男の子を見たショックで夜も眠れなかった。「どうしてこんなにひどいことが起きるのか。戦争はこんなむごいことなのか」と考え続けた。

あのころは、毎日がひもじくて、食べるものはトウキビか馬が食べるエン麦やコーリャンを混ぜたご飯。校舎は軍の兵舎に取られ、別の学校へ午前と午後の２部交代で通った。夏休みには戦地に送る牧草作り。満足に勉強もできなかった。

戦後は豊かな世の中になったけれど、７年前に沖縄にある「ひめゆりの塔」（唯一の本土決戦となった沖縄で、看護隊として動員されたひめゆり学徒隊の慰霊碑）に行くまでは「私の戦争は終わらない」とずっと思っていた。同じ世代の女学生たちが悲惨な死を遂げたことが、ずっと頭から離れなかった。現地で女学生の写真を見た時、セーラー服姿のあの子もこの子も、みんな知っているような気がして、わんわんと声を上げて泣いた。何も知らずに、兵隊や国のために犠牲になった彼女たちが、ただ悲しかった。

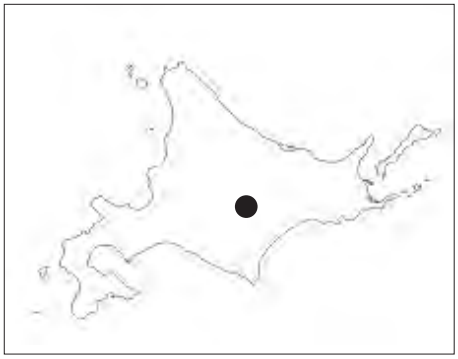
「勝毎ジャーナル」（04.08.14）より

「帯広空襲を語る会」作成
被災確認地点

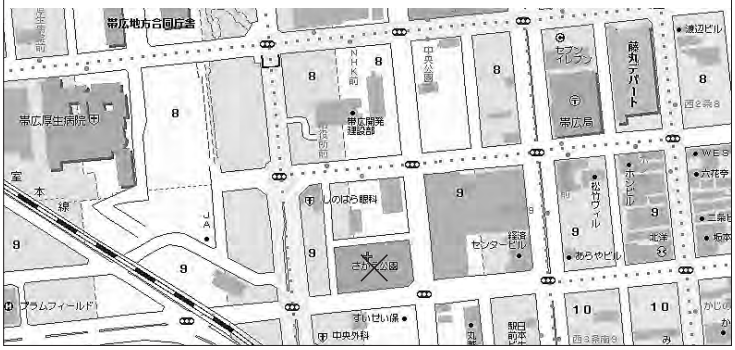
帯広市　第七師団（熊部隊）と 第一飛行師団（鏑部隊）が駐屯した「軍都」

概　要

帯広は町制時代から軍誘致に積極的で、囚人労働で建設した緑ヶ丘飛行場（現百年記念館付近）には1936年に浜松の飛行戦隊が移駐した。以後拡大を続け1944年には第一飛行師団司令部が帯広に移る。前後して「北海道決戦」に備えた部隊再編で旭川の第七師団も移駐し司令部を開設した。第七師団の下には歩兵第26聯隊（下士幌・更別）、山砲第７聯隊（池田町清見ヶ丘）、工兵第７聯隊（東小学校の北側）、輜重兵第７聯隊（芽室公園）が駐屯した他、師団通信隊、同兵器勤務隊、同衛生隊、第１～４野戦病院、病馬廠、防疫給水部など付随する部隊、施設が市内および近郊に配置された。また、第５方面軍直轄の高射砲聯隊（音更）、戦車聯隊（同）、野戦補充馬廠（仙美里）なども十勝には展開しており、部隊や関連施設が合わせて50近くも配備されたことになる。軍事施設建設にあたっては朝鮮人の強制労働も行われている。帯広市だけでも当時の人口が軍進駐によって一万人近く増加したという。敗戦が色濃くなる中で帯広は、「軍都」の趣を強くし、十勝は一大軍事拠点に変貌したのである。「結果からみるなら、軍都化して市勢が発展したというより、市民の必需物資や労力が過度に吸い上げられたため、むしろ荒廃の素因となった観がある。」と「帯広市史」では明快に指摘している。



第七師団司令部防空壕跡地（さかえ公園）の位置



旭川から移駐した第七師団（熊部隊）司令部の防空壕跡。「さかえ公園」（帯広市西４条南９丁目）中心部の盛り土された部分。

第一飛行師団（鏑部隊）司令部は大谷高等女学校の校舎を接収して設置された。現在はポスフールが建っている場所に当たる（帯広市西５条南20丁目）。防空壕後は戦後まで残り、子どもたちが水たまりにして遊んでいたという。

資　料　帯広市内を軍用鉄道が縦断していた

「トカチプチ12号」1999年8月発行より

新町東の高倉橋を渡ってゆるやかに左折

競馬場東側を白樺通りに直進

現存する当時の軍官舎の建物（08年7月撮影）

緑ヶ丘3条通り沿いの土盛された線路跡。付近の案内板には「旧鉄道跡」と明記されている。

軍用鉄道建設に関わる朝鮮人強制労働目撃の証言（当時16歳で軍属として錨部隊で働いていた女性から）

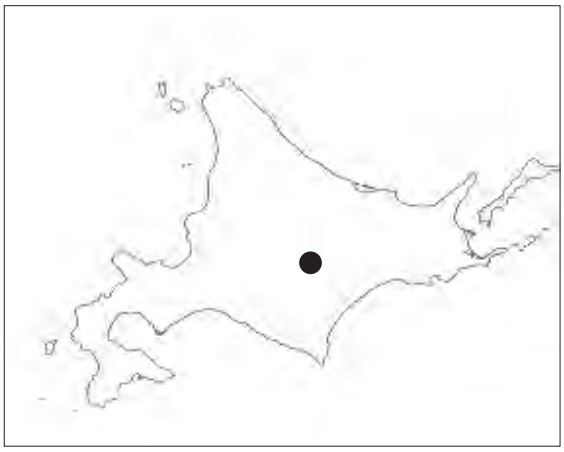
私は、幕別の国民学校高等科を卒業した後、先生の紹介で錨150部隊に軍属として就職し、爆弾を運ぶ仕事に就きました。現在の緑が丘小学校近くの民家に下宿して、そこから丘の上の部隊（現在の自衛隊駐屯地）まで歩いて通っていました。当時は、付近の建物といったら軍官舎ぐらいでした。部隊に向かう途中、どちらが前か後ろか分からないほど真黒な体をした朝鮮人の人たちが2～30人ほど裸同然で働かされている姿を毎日見ていました。道路沿いに線路の路肩を作る作業のようでした。監視の棒頭が間隔を置いて立っていて、朝鮮人が背伸びでもするものなら長い竿の先に縛ったロープで叩くんです。私はまだ15、6歳くらいの娘で怖いもの知らずだったんで「おじさん、だめだよ。たたいちゃ。」と食ってかかりました。でも、全くそんなことは聞いてくれるような感じではなかったのです。部隊が池田町の利別に移ってからは、私も利別に引っ越しました。その時には朝鮮人はいませんでしたが、引きこみ線の工事で亡くなった朝鮮人の幽霊が出るという噂は周りの人たちがしていました。戦争中に朝鮮人に酷いことしたから、今、何かあると韓国からいろいろ言われるんですよね。　（2005年6月、池田町在住の女性から吉田淳一が証言聴取。）

音更町　鈴蘭地区攻撃の痕跡

概　要

この給水塔には1945年７月14・15日の北海道空襲で命中したロケット弾２発の弾痕があり、戦いのむなしさを後世に伝えていた。貴重な戦争遺跡として保存が検討されたが、劣化が進み保存は困難との結論にいたり、2005年、解体されることとなった。

解体にともない、当時、部隊の入り口があった鈴蘭通沿い（鈴蘭郵便局東側）に記念碑が設置された。



解体前の給水搭

上部に２ヶ所の弾痕が見られる。

正式には「高架水槽」といい、1943年旧陸軍高射砲第24連隊（通称北部91部隊）のために建設されたものである。高さ18.6メートル、直径8.8メートル、容量2000リットル。戦後も国立十勝療養所の給水搭として、1996年まで使用されていた。

資　料

現在残されている記念碑

北部第91部隊跡　記念碑

爆撃のごう音、地響き、生々しく証言　語るつどい　音更空襲の恐怖伝える

［2003年８月11日の記事］

音更郷土史研究会（飛岡久会長）主催の「音更空襲を語るつどい」が、９日午後１時半から町文化センターで開かれ、戦争の恐怖を味わった人の生々しい体験が語られた。

1945年７月14、15の両日、米軍による北海道大空襲で、音更では死者３人、重軽傷者７人が出たほか、多くの民家や建物が被害に遭った。同会では戦争体験者の声を次代につなげようと、「語るつどい」を初めて企画した。

初めに同会会員で郷土史研究家の松本尚志さんが、米軍の資料写真を紹介しながら空襲による被害状況や米軍の作戦などについて触れた。

続いて空襲で妹を亡くした永谷芳清さん、家が半壊した本間秀雄さん、防空ごうに避難して恐怖を味わった那須敏雄さんの３人が、58年前の思いを語った。

当時小学４年生だった那須さんは「聞いたことのないごう音や地響きが続き、はらわたがよじれるような感覚だった」と話した。

その後、出席者の中からも戦争を経験した人が登壇し、「２メートル先に爆弾が落ちた」「飛行機が低空で迫ってきた」などの体験を切々と語り、会場から驚きの声が上がっていた。（梅庭寛子）

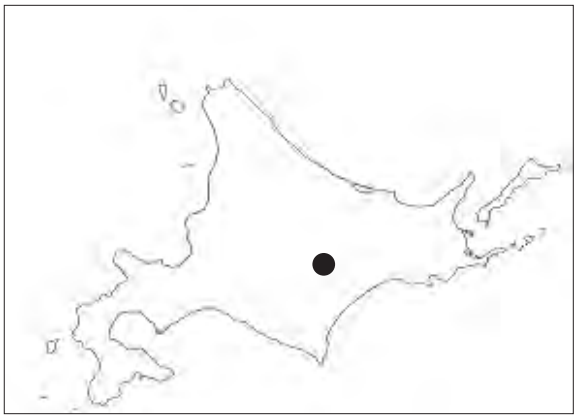
「十勝メールドットコム【音更めーる】」より

幕別町　空襲による被弾痕跡

概　要

1945年７月14日、米空母ハンコックより飛び立った艦載機６機が午前８時30分頃、幕別上空に現れ、当時軍需工場（愛国151工場）であった新田ベニヤ工場（現　ニッタクス）を中心に幕別市街地を空襲した。

機銃掃射と15発の爆弾による空襲であった。

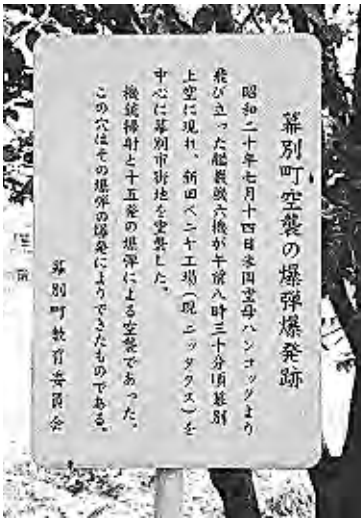


現在残っている唯一の爆弾の爆発により作られた穴。
幕別町により保存されている。

新田の森記念館　入り口

当時の工場壁に残る機銃掃射の弾痕

記念館に展示されている軍需工場時代に生産していた木製のプロペラ。材質はカバの木。他にも燃料タンクや飛行機本体になるベニヤも生産していた。



緊急回覧板（７月16日配布）

連日ノ状況ヨリ見テ空襲激化ト見ナケレバナラヌ。

◎生活必需品、衣料ノ疎開埋没等、昨日回覧ノ通リ緊急措置ヲトルコト。

◎乳幼児、妊産婦、病人、防空活動ノ出来ザル老人ハ努メテ早期ニ一時待避シ置クヲ可ト思料セラル。

◎夫レ以外ノ者ハ愈々勝抜ク防空信念ヲ以テ防空態勢ニ萬全ヲ期スコト。

◎白色、赤其ノ他目立チ易キ着装ハセヌコト。

◎救護対策ハ萬全ヲ期シツツアリ。

◎ラジオ、新聞発表以外ノ事項ハ彼是言及セザルコト。

◎公園、森林ニ待避スルハ可ナルモ必ズ壕ヲ構築シ待避スルコト。

資　料

幕別空襲（「幕別町史」より）

幕別、空襲される

- 幕別消防組は、14（1939）年４月１日に幕別警防団と改組し、火災予消防のほか防空も重要な任務となった。村民の防空訓練が本格的に実施されたのは15（1940）年に入ってからである。家屋が空襲で火災となったと想定した「ばけつリレー」、焼夷弾に砂や濡れムシロをかけ、火たたきで消す訓練を繰りかえして実施し、各家庭では万一に備えて防空壕を作り、コンクリート製の防火水槽を設置した。また、ラジオではB29などの爆音を流し、爆音で飛行機の種類を聞きわけるよう呼びかけた。
- 十勝の空に空襲警報が鳴りひびいたのは20（1945）年６月27日が最初。この日、警戒警報から空襲警報にかわったが、米軍機は飛来しなかった。４日後の７月１日、フィリピン・レイテ湾を出動した空母８隻、軽空母５隻の計13隻のアメリカ海軍機動部隊は、発見されることなく14日朝、北海道南方の海上に達した。これら、空母から発進したグラマン戦闘機が道内主要都市を襲った。14日に幕別を銃爆撃したのは空母ハンコックから出撃した第６空母航空群の爆撃機６機、15日は空母レキシントン、軽空母サンジャシントンから出撃したグラマン戦闘機と爆撃機であった。

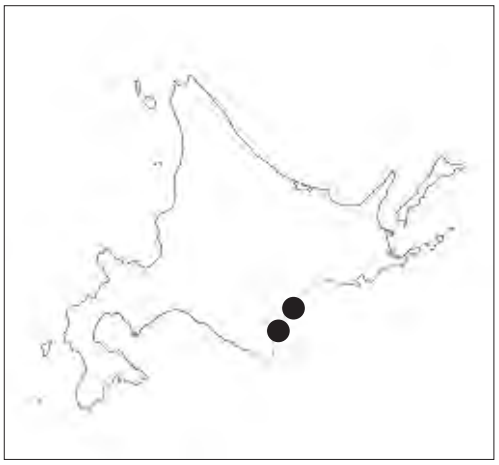
　14日の午前４時57分に警戒警報、同５時30分に空襲警報が発令された。前日の13日午前５時８分に警戒警報、同53分に空襲警報が発令されたが、敵機の来襲はなかった。今度も大丈夫と思っていたところ待避信号の乱打に人々は防空壕に走った。

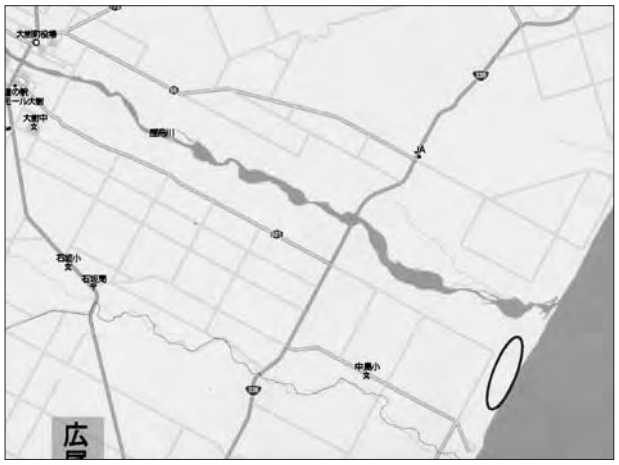
　この日、朝７時すぎ、下音更鈴蘭高台の91部隊と帯広駅を襲った爆撃機８機が、同８時30分ころ止若上空を東進したが、十勝川上空あたりで編隊をとき、２機を残して６機が反転し、愛国151工場といわれていた新田ベニヤ工場に襲いかかり爆弾15発を投下したが工場には命中しなかった。貯木場に落ちた爆弾は丸太材を飛散させ、この丸太が工場の従業員が待機していた防空壕の入口に落下するという出来ごともあった。敵機は機銃掃射を行い９時ころ東方に去った。

浦幌町　十勝海岸線　トーチカ

概　要

戦局の悪化で北海道決戦が予想された1944年、陸軍が釧路から広尾にかけての海岸線を米軍の上陸予定地とにらみ、第七師団司令部を旭川から帯広に移した。そして道東地方の海岸線の防衛陣地として「トーチカ」建設が始まった。十勝には浦幌（豊北海岸）から広尾の海岸線に30数個が残っているが、まだ発見されていないものもあると考えられる。





浦幌町豊北海岸のトーチカ

トーチカとは？

ロシア語で「点、地点」を意味する。軍事的に重要な地点を守るため、コンクリートなどで固めて造った小型の防衛陣地。内部に軽機関銃などを備え、敵を迎え撃つ。

大樹町海岸線にあるトーチカ

説明

作った当時は海岸線の上に造られていたと思われるが、現在は砂浜に並んで立っている。海岸線からも近いため一部のトーチカは傾いたりしている。構造は豊北のものと若干異なっている。入り口が海岸線に向かって右側に造られており、現在も中に入ることができる。入り口からしゃがむようにして中に入ると、３畳から４畳半程度の部屋がある。海岸線に向かって左側には銃眼がある。コンクリートの厚さは１ｍ近くあり頑丈そうに見えるが、鉄筋が入っておらず、敵の艦砲射撃などには全く役に立たなかったであろう。

４基のトーチカが並んでいる。シーズンになると鮭を釣る人たちがたくさん来る。

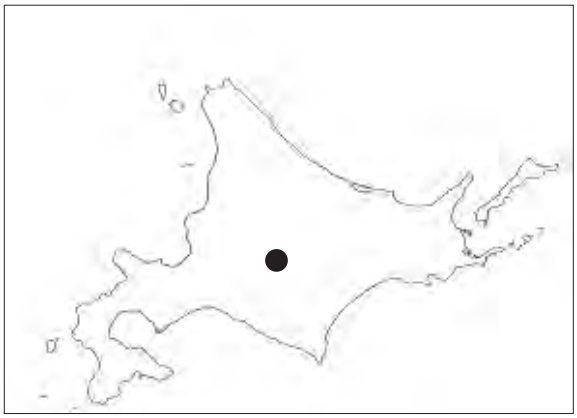
（2008年９月撮影）

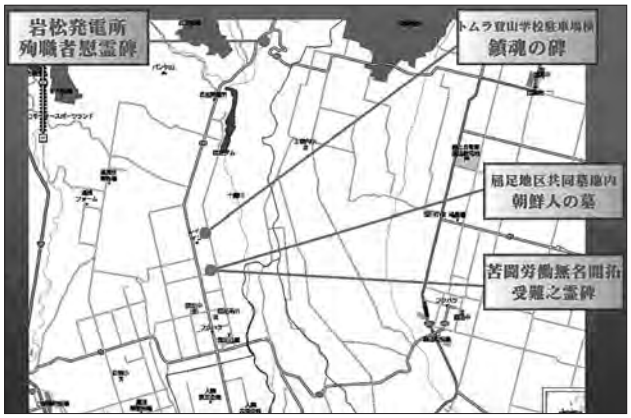
新得町　朝鮮人強制連行

概　要

新得町屈足（くったり）地区には、４つの慰霊碑と墓が建てられている。１つ目は屈足共同墓地に隣接して立てられた「苦闘労働無名開拓受難之霊碑」、２つ目は「朝鮮人の墓」、３つ目はトムラ登山学校に隣接する「鎮魂の碑」、４つ目は岩松ダム下流にある「岩松発電所殉職者慰霊碑」である。屈足地区ではないが５つ目として狩勝高原遊園地内の「苦闘の碑」がある。

この５つの碑は、新得屈足から清水にかけての水田開拓灌漑工事、岩松電源ダム工事、拓殖鉄道工事などに、タコ部屋労働者、朝鮮人労働者が駆り出され、厳しく過酷な労働を強いられて命を落とした犠牲者の供養の碑である。屈足地区のあちこちに埋められ放置されていたが、屈足地域の住民や新得町によって建てられた。





「苦闘労働無名開拓受難之霊碑」

朝鮮人の墓（屈足地区共同墓地内）
屈足地区の共同墓地内にあり、近年石造りの物に変えられた。

「鎮魂の碑」

「岩松発電所殉職者慰霊碑」

「苦闘の碑」

資　料

北海道、十勝における朝鮮人強制連行・強制労働

■　中国への侵略戦争が長引くにつれ、戦争に必要な物資や労働力を総動員するための「国家総動員法」が1938年４月に制定された。翌年の1939年７月には「国家徴用令」が公布され、この中で朝鮮人を動員することも計画された。1939年６月には、中央協和会が設立されており、以後、朝鮮人の労務動員が行われ、軍務への動員も行われていく。これらの動員を「朝鮮人強制連行」とよぶ。植民地朝鮮では民族的な抵抗になることをおそれ、実質的には「強制」であったが、最初のうちは労働者を「募集」という形で連行した。1942年２月からは「官斡旋」の形で行政の関与が強化され、さらに1944年９月には朝鮮人労働者の動員に「国民徴用令」を適用し、「徴用」の形での連行になる。軍隊などの性的な奴隷として「慰安婦」の名で連行された人々もいる。北海道では、赤平市、釧路市阿寒町、上砂川町、旭川市、歌志内市、長万部町、釧路市、札幌市、函館市、美唄市、古平町、三笠市、森町、紋別市、夕張市で朝鮮人女性の「慰安所」の存在が確認されている。

■　「北海道と朝鮮人労働者　朝鮮人強制労働実態調査報告書」（朝鮮人強制労働実態調査報告書編集委員会編1999年３月発行）によると、十勝における朝鮮人強制連行・労働は、「浦幌町」（雄別浦幌炭坑）、「音更町」（鉄道工業帯広陸軍第２飛行場）、「上士幌町」（帝国鉱業開発十勝鉱山／勢多鉱山）、「新得」（鹿島組日発巌松発電所建設工事場）、「池田町」（鉄道工業池田陸軍弾薬庫工事場）、「豊頃町」（鉄道工業豊頃開発事業工事場）があげられている。

■　「戦時朝鮮人強制労働調査資料集－連行先一覧・全国地図・死亡者名簿－」（竹内康人編著、神戸学生・青年センター出版部、2007年８月１日発行）には、十勝では上記に加え「帯広市」（国鉄帯広）があげられている。

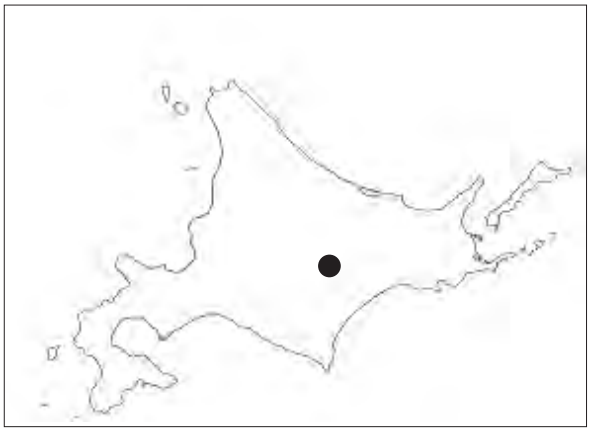
■　日本への朝鮮人強制連行数は少なくとも70万人、うち北海道へは14～15万人とされている。この対全国比20％以上という比重は、全国でも福岡と並んで群を抜いている。

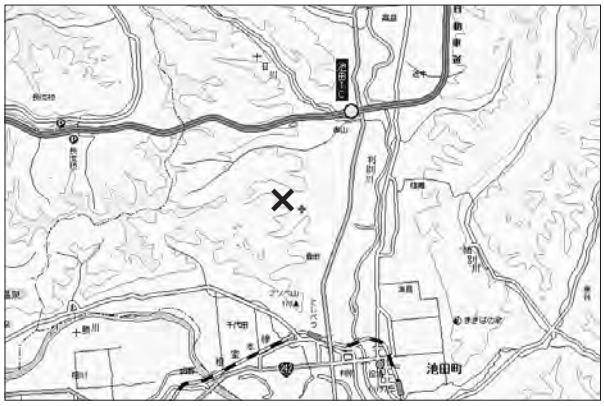
池田町　航空修理廠（しょう）建設における朝鮮人強制労働

概　要

1944年には池田町にも軍隊が配備され、現在は「ワイン城」のある清見ヶ丘一帯には第七師団（熊部隊）山砲第７聯隊の兵舎や倉庫、弾薬庫などが建てられた。利別地域のフンベ山のふもとには、鉄道の引込み線が敷かれ、帯広に司令部をもつ第一飛行師団の航空修理廠（航空機を修理する工場や弾薬庫群）が建設された。その工事のために、100人以上の朝鮮人が強制労働させられている。証言の一部は「池田町史」にも掲載されているが詳細はいまだ不明である。

当時、池田地区や利別地区は、軍事施設と軍人、軍関係者が行きかう「軍都」の様相を呈した。





給水施設跡（池田町豊田北４線の沢　農道沿い）

朝鮮人強制労働によって建設されたフンベ山への引き込み線の跡（現在の利別駅の北側）

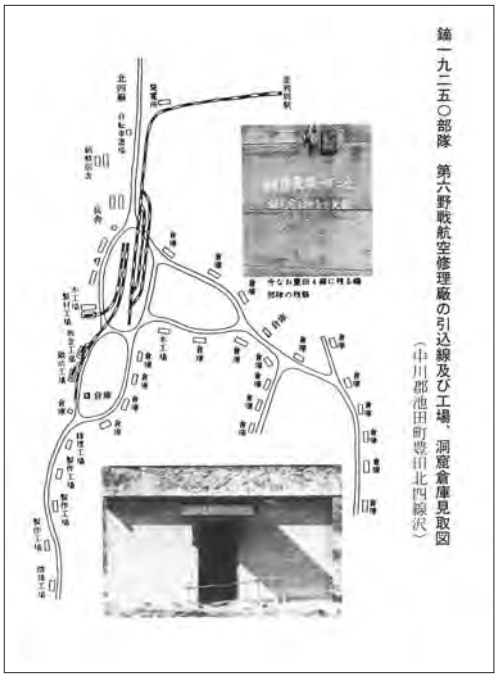
資　料

証　言

「そのころ、鏑（かぶら）部隊では、鉄道の引込み線工事や部品を格納する洞窟工事に朝鮮人を使っていた。朝鮮人の住んでいたところは、『タコ部屋』同然で、食事はジュラルミンの食器に一膳メシ、寝るときは広い板ばりの部屋に頭あわせで二列に寝かせ、頭と頭の間を兵隊が見張るという状態だった。作業のときも鉄砲をもった兵隊が小高いところに立って見張っていた。

服装もひどいもんで、軍隊の古いものを払い下げて着ていたようだ。あるとき、役場の仕事で私がナンバンの実や葉までもっていったら奪い合って食べていた。彼らの移動は、ひみつに行われていたようで、いつ来て、いつ消えていったのか全く分からない。」

（「池田町　戦火の追憶」池田町史編纂室　1995年７月、「池田町史・上巻」）



兵器、エンジン、機材、部品等の保管や工作のための施設は、高い樹木に隠れるように沢の中に立てられていたが、三棟の三角兵舎は、林外の、平野部の末端にあった。

敷地の中の道路は、入り口に守衛所があり、直進すると右手にバラック建ての管理棟、木工、エンジンの作業棟があった。左手には二つに分岐し、手前の道路沿いに兵器庫、燃料置き場があり、奥の分岐沿いには機材庫、部品庫があった。

（「トカプチ」13号「帯広陸軍航空廠を中心に軍都帯広の光と影を追う・下」笹川幸震）

帯広（トカチ）　2005年（平成17年）5月20日（金曜日）

強制労働の実態解明へ

現地調査で行われた貯水施設跡の見学

池田町教育研究協議会

旧陸軍鏑部隊の工廠跡地を調査

当時知る男性の証言も

【池田】町教育研究協議会の人権平和教育研究協議会（委員長・吉田淳一利別小教諭）は十九日、太平洋戦争当時、朝鮮人強制労働が行われていたフンベ山ふもとにある旧陸軍鏑部隊の航空機修理工廠の跡地の現地調査を行った。当時の様子を知る町内の男性も調査に立ち会って、証言した。（藤浪浮）

鏑部隊では、工廠建設、協議会に所属する町内の鉄道線引き込み工事など、小学校教員ら十一人が参に強制労働の朝鮮人が従加した。一九四〇年から事していたとされている一九四五年三月に徴兵されが、詳しい実態は不明。れるまで、同部隊に爆弾同協議会は同部隊の実態やガソリンなどの搬送を解明を戦後六十年である搬入する仕事を請け負っ今年の重点活動としていた町内の男性（ことし）と一緒に工廠跡地を見学。

この日の調査には、同同部隊の宿舎や貯水施設、給水施設の跡をビデオに収めた。

男性は「一九四〇年から四一年の春から秋にかけて百人以上の朝鮮人が働いていた。パンツもない裸姿でトロッコを引かされ、とてもかわいそうだった。逃げ出す者もいたが、つかまったら生きていられなかったのではないか」などと証言、「こうした朝鮮人はタコ部屋と呼ばれる小屋で寝起きしていたが、これとは別に、周辺の民家に住みながら働き、労賃をもらっていた朝鮮人も少数もいた」とも話した。

同協議会は今後も現地調査を重ねるとともに、当時を知る人を捜して証言を集め、強制労働の実態を伝える歴史教材にする考えだ。

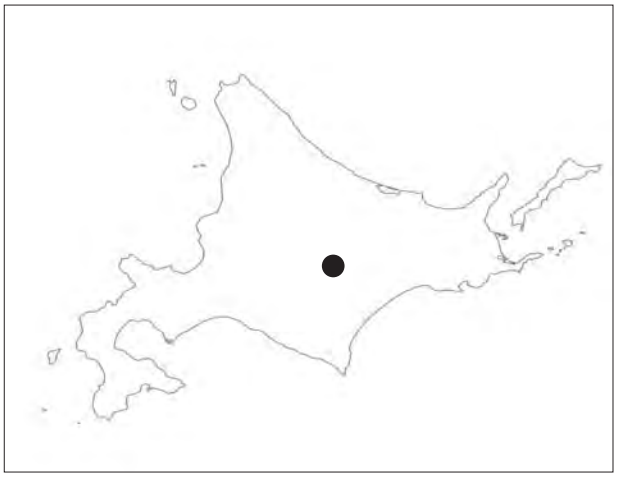
現存する三角兵舎。戦後引揚者住宅となり、現在は道外からの移住者のための住宅として使用されている。（豊田北４線の沢）

池田町　防空壕で被弾した少女・少年が無念の死

概　要

池田町では1945年７月14日午前６時10分ころ、池田駅が米軍機の空襲を受け、機関車の運転士２名、兵士１名が死亡。（兵士の死亡は軍機密扱いのため公表されていなかった。）また、町内旭町の防空壕にいた16歳の少女と13歳の少年も流れ弾に当たって即死する悲劇も起きた。

当時、池田町は機関区が置かれる道内鉄道の要地であり、陸軍第七師団（熊部隊）の山砲第七連隊が駐屯し、第一飛行師団（鏑部隊）の航空修理廠も配置されていた。まさに軍人の行き交う軍隊の町でもあった。航空修理廠建設にあたっては朝鮮人の強制労働が行われた地でもある。



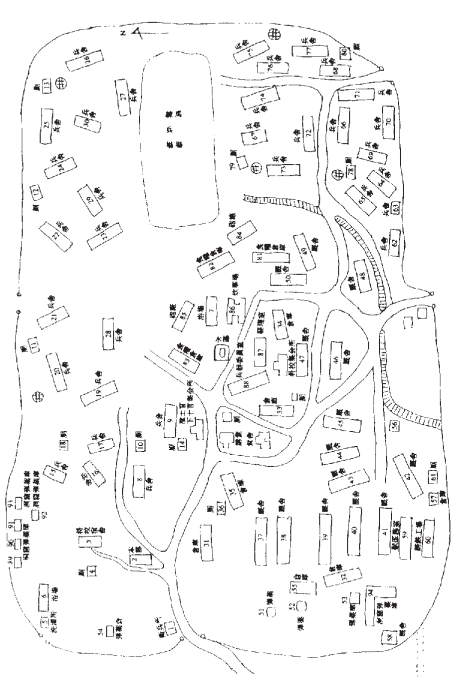
池田町総合体育館前芝生内の「平和祈念碑」

空襲や強制労働には触れられていないが町の平和への意思が示されている。

（碑文）この祈念碑は世界の平和を願う青年たちが平和祈念モニュメント建立実行委員会を組織して広島市役所の被爆石と米軍上陸地点の激戦地であった沖縄県読谷村のサンゴ石灰石と本町の十勝石を用い原子爆弾が爆発した瞬間を表現して建立したものです。

（建立年月日　一九八七年十一月二十七日）

資　料



熊九二一六部隊（山砲第七連隊）駐屯状況図
（中川郡池田町清見ヶ丘）

現在「ワイン城」のある清見ヶ丘公園や池田高校、付近の農地には軍事施設が密集していた。（地図は「池田町史」から）

池田空襲を記録する「池田町史」

昭和20年（1945年）７月14日の早朝、警戒警報の予報もなく、いきなり空襲警報が発令された。この朝アメリカ戦闘爆撃機グラマンは音更町の鈴蘭高台の91部隊（高射砲第24聯隊）を銃撃し、帯広駅にも機銃をあびせかけてやがて池田の機関区の裏から突っ込んできた。時に７月14日午前６時10分ころであったという。そして、爆弾の一発は折から入構していた北見区8634号機関車の缶胴に命中し横転、乗務員２名が重傷を負って中島病院に運び込まれた。しかし、病院では手のほどこしようもなく２名の乗務員は殉職したのであった。また、同グラマンの機銃掃射で付近の防空壕に待避中の兄弟（注・実際はいとこ）が即死するという痛ましい出来事もあった。

このほかに、機関車をねらったはずの爆弾がそれて南一丁目の法華寺の前に落ち、寺の窓ガラスが全部爆風で破れるということや、市街地や鉄道官舎にも機銃があびせられ弾が窓を突き抜けタンスに穴をあけるという肝の冷えることもあった。この日池田を襲ったグラマンは、尺別に進行中の第496列車にも襲いかかり、さらに翌15日には再び音更、帯広がグラマンの襲撃を受けた。

死亡した中嶋スガさん（当時16歳）の弟、中嶋好美さんの証言（当時11歳）

飛行機の爆音とバリバリと激しい機銃掃射の音が入り乱れて聞こえ、これは本物だ!ということで父、姉、私。弟そして父の運搬業を手伝って同居していた宮野三男の家族五人は慌てて家を飛び出し、裏の線路ぶちに作ってあった防空壕へ逃げ込んだのです。しかし、防空壕の中は連日の雨で水びたしで奥に入れず、五人は入り口付近に固まって身を寄せていました。（中略）防空壕の外から機関車を狙って落とした爆弾の激しい炸裂音が聞こえ、更に機銃掃射が機関車に突き刺さる金属音も入り乱れ、私は身をすくめて震えていました。その時です。私の側にいた姉のスガと、従兄の三男が小さな叫び声を上げて防空壕の水びたしの底へ転がり込んでいったのです。父が「おい、どうした」と声を掛けたが返事はなく、側に寄ってみると姉の背中に穴が開き血が吹き出していました。そして三男も下腹部から右の太股にかけて肉が裂けていたのです。父は近所の人の手を借りて二人を戸板に乗せて中島病院へ担ぎ込みました。しかし、姉はすでに事切れており、三男も「水、水、水…」と言いながらその水を飲み込む力もないまま息を引き取りました。

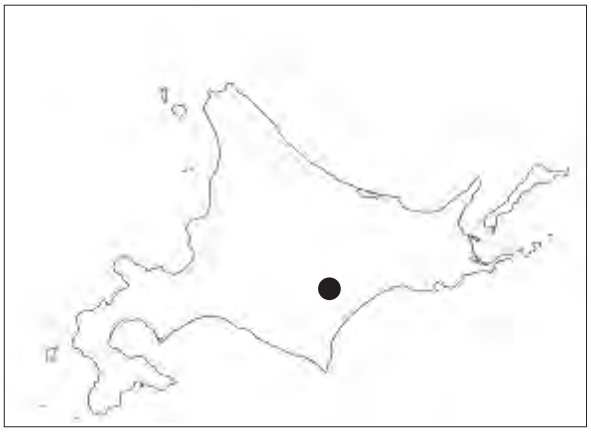
（「池田町広報誌」1995年１月号掲載）

芽室町　今は憩いの公園に、軍隊がいた！

概　要

十勝地方中心部に位置する芽室町には、町内外の人々の憩いの場となっている「芽室公園」がある。春は遠足の子どもたちで賑わい、夏には花菖蒲が咲き乱れ噴水遊びに興じる親子連れやジンギスカンに舌鼓するグループの歓声が緑の芝生に吸い込まれていく。秋には栗がたわわに実り、冬は歩くスキーのコースとして人気を博している。

しかし、この公園に戦時中二個大隊の軍隊が駐屯していたことを知る人はほとんどいない。戦局が悪化した1944年４月、「本土決戦」を想定して第七師団司令部が旭川から帯広に移駐した際、これらの聯隊はすべて、道東地区に配備された。輜重（しちょう）兵第７連隊もまた芽室公園に進駐し、町内を闊歩していたのである。公園にそびえ立つ柏の大木群だけにこの真実をゆだねてはいけない。　※輜重（しちょう）兵…糧食、被服、武器、弾薬などを運ぶことを任務とした兵

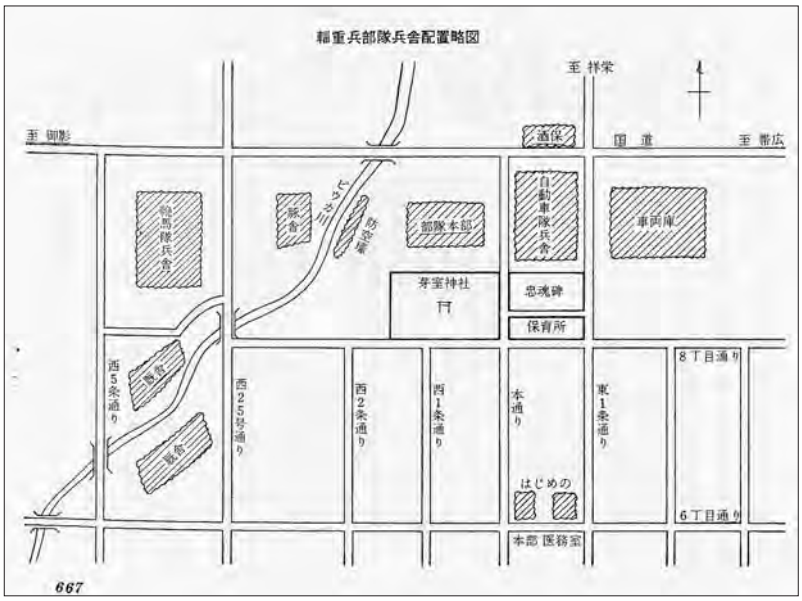


芽室公園全景

当時からある柏の大木群は、兵舎を隠す格好の覆いとなった。

初めの本部が置かれた宝照寺

資　料



防空壕があったと思われる辺りを対岸から望む。（矢印付近）

弾薬等の格納のため洞窟を掘ったとされる崖を芽室橋から望む。洞窟を発見したとの証言が得られている。

本町を駐屯地とした隊は、旭川第七師団輜重兵第７聯隊から北部第９部隊（熊9223）となったもので、部隊編成は自動車大隊と輓馬（ばんば）大隊の二大隊で、道東防備の陣地構築の資材及び糧秣輸送を任務としていた。したがって、陣地構築地への兵員などの派遣がなされ、大樹には沿岸陣地構築の資材輸送に輓馬中隊の一部が、また釧路には阿寒陣地構築のための自動車中隊がそれぞれ派遣されていた。敵の上陸があつた場合の道東最後の拠点は阿寒周辺とし、この地点によって決戦する作戦であったため、この陣地構築は大規模かつ急を要し、熊92部隊（通称名）は別保付近から木材、燃料などの資材輸送に当たっていた。このように他地区への分駐もあり、本町に常時駐留していた兵員は明確ではないが500名前後と思われる。

この部隊が本町を駐屯地として選定した事情は明らかでないが、先遣隊の調査により国道38号線に沿った南側の現芽室公園一帯が駐屯地と決定された。移駐当時は本部を本通り６丁目の宝照寺に置き、本堂を本部事務室に、庫裡（くり）二室を部隊長室に充てていた。医務室を東光寺に、また酒保を遠山スエ宅に置き、一般兵士は競馬場跡地に天幕を張った。将校宿舎は市街地の民家が充てられ、部隊長は本通り１丁目の金沢兵蔵宅に起居し、一般将校の宿舎は自動車大隊が金山コト宅に、また輓馬大隊は芽室郵便局隣接の住宅を宿舎とし、両大隊とも将校10名前後の人員であった。また、山本酒造店の倉庫二階には衣類や防毒マスクなどか保管された。

芽室川芽室橋から上流二、三百メートル付近の左岸の崖に洞くつを掘り、車両や弾薬を格納した。

（上掲地図含め「芽室町史」より）

本別町　本別公園に残る軍用物資・弾薬庫跡

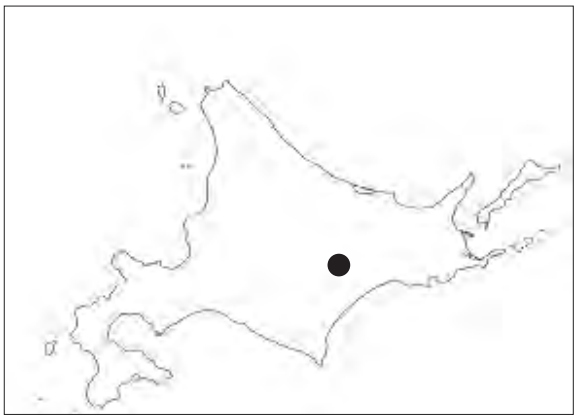
概　要

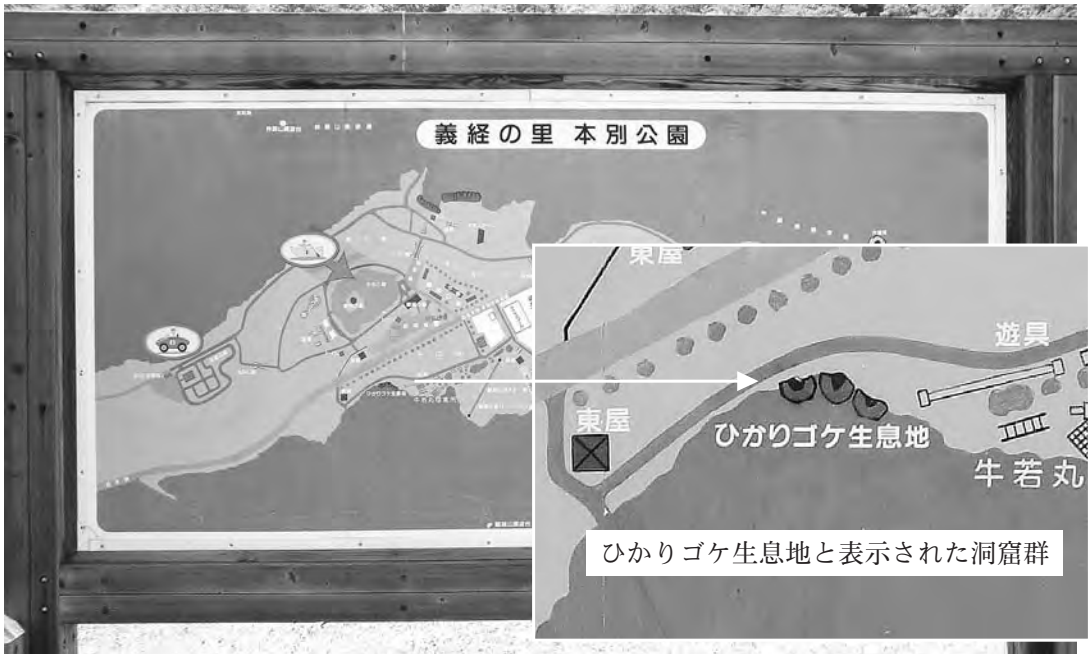
アジア・太平洋戦争時、長期戦に備え、軍用物資を分散した際、本別町にも被服・爆発物等の資材格納庫３棟が本別公園敷地内に建設された。

米軍の空襲が激しくなった1945年４月に軍用資材を格納するとともに、兵員が身を守る防空壕を本別地区小隊の手によって、奥行き10メートル程度の洞窟がこの地帯数ヶ所に造られた。

この３ヶ所の洞窟も大戦当時の残骸として残った。

敗戦後、弾薬は爆破処理された。





資　料

入り口の幅は3メートルほど。鉄柵があり中には入ることができない。また、鉄柵の前には金網が張られており近くに寄れなくなっていた。地震により土砂崩れが起こったためとの説明を受けた。戦争遺跡の風化が進んでいる。

洞窟群のある斜面

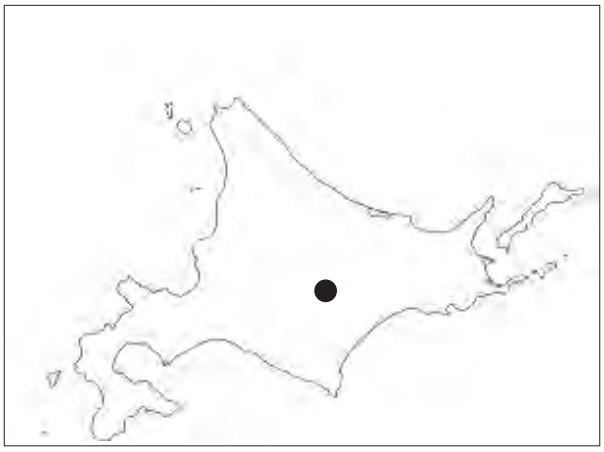
本別公園全景

本別町　本別空襲による被弾痕跡

概　要

1945年７月15日、本別町は北海道で５番目、十勝で最大の空襲を受け、本別市街は全焼家屋492戸、罹災者1925人、死者40人を数える大きな被害となった。

本来は帯広の攻撃を命じられた攻撃隊が、悪天候のために帯広攻撃を断念し、たまたま雲の切れていた本別市街地を攻撃目標としたと言われている。



米軍機が撮影した炎上する本別市街地

資　料

「本別町史」より

７月15日午前８時頃、本別沢方向から47機の米軍艦載機が侵入してきた。

米軍機は超低空で機銃を撃ちこみ、爆弾を投下するなど、およそ50分間にわたり攻撃をくりかえした。被害は死者40人、負傷者14人、全焼家屋279戸、大破家屋112、罹災者1915人という大きなものだった。

（2006年８月撮影）

現在もＪＡ本別の資材倉庫として使用されている。1945年７月15日の爆撃で、屋根は炎上し壁には攻撃された弾痕がいくつも残された。現在は補修され、一部弾痕が確認されている。

被弾した食器棚と鉄柱

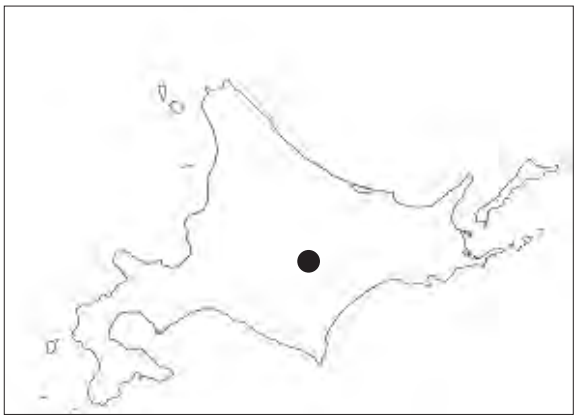
本別歴史民族資料館にて展示

本別町　仙美里（せんびり）　馬魂不滅の碑

概　要

1910年、本別町仙美里に開設された陸軍省軍馬補充部釧路支部足寄太出張所は、1925年に釧路支部から分離する形で、軍馬補充部十勝支部に昇格。現在の本別町西仙美里から足寄町上利別まで約２万ヘクタールの敷地で軍馬の供給、育成、購買などを行った。２歳で買い入れた馬は５歳になるまで育てられ、旧国鉄仙美里駅から戦場に送られた。

1944年、軍組織の改編により第11野戦補充馬廠（第５方面軍直轄）に改称された。



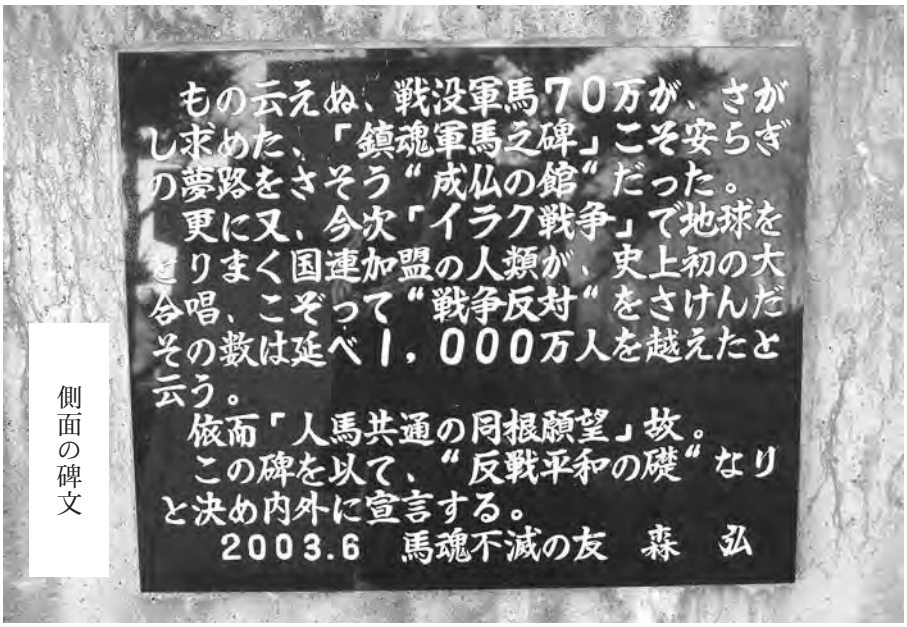
軍馬補充部十勝支部で育成された軍馬を、仙美里駅長として戦場に送らねばならなかった森弘さん（故人）らが、私財を投じ1988年に建立した。

軍馬補充部とは、馬を育て軍馬として調教する施設。東京の本部のほか、全国十二カ所に支部があり、このうち、馬産地の北海道には川上（釧路管内標茶町）と釧路（同白糠町）、十勝（十勝管内本別町）、根室（根室管内別海町）の四支部が置かれていた。主に道内の農家などが飼っていた馬や軍馬として生産された馬を二歳程度で徴用し、五歳ほどまで育て、戦地に送っていた。

戦地に送られた馬は、一頭たりとも帰ってこなかった。

資　料

前面の碑文



側面の碑文

この地で調教された馬たちは、国鉄仙美里（せんびり）駅から貨車に乗せられ、戦地に向かった。板は、貨車とホームの間に渡した「馬踏板（ばふみいた）」。軍馬たちは貨車に乗りたくないと四肢をふんばった。板には、軍馬の怨念（おんねん）がこもったかのように、ひづめの跡が無数に残る。

日清、日露戦争を経験した帝国陸軍にとって、欧州馬に伍する精強な軍馬育成の必要性が急務となったことに加え、軍馬は物資補給手段の確保などの面で軍事的に重要な役割を果たしていた。また、軍馬補充部の拡充は「明治・大正」期の軍事力強化策と軌を一にしていたともいえる。

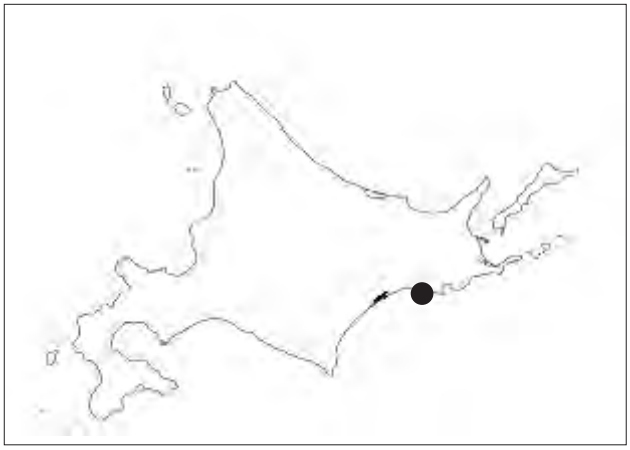
釧路市　市立共栄小学校炊事遠足爆発事件

概　要

1965年10月５日、釧路市の新富士海岸（現在は西港として埋め立てられている）に炊事遠足に訪れていた６年生359名の子どもたちのうち、波打ち際にあった「ルンペンストーブのような物」を風よけに使っていたグループの場所で突然大爆発が発生。４名の子どもの命が奪われ、33名（子ども30名、教員２名、教生１名）が負傷するという事件が起きた。子どもたちが拾って使っていたのは、旧海軍が対潜水艦用として使用した50kg型爆雷で、残っていた信管が炭火で熱せられ爆発を引き起こしたものだった。

1945年８月の敗戦後、釧路では旧陸軍、海軍の爆薬・爆雷などを港の外海に投棄した。作業は事故死者も出す危険なものだった。この投棄された爆雷のうちの一つが台風のうねりで海岸に打ち上げられ、この大事件を引き起こしたのである。政府が国の責任として兵器を完全に処理しなかったばかりに戦後20年も経て子どもたちが日本軍の兵器によって殺されてしまったのである。しかし、日本政府はわずかな「お見舞金」だけで、国家賠償請求は時効を理由に拒否した。

この事件を記憶するために共栄小学校前庭には「平和の像」が、現場近くには「慰霊之碑」が建てられたが、当時、碑の建設を担った教職員が不当配転の攻撃を受ける事態も起きている。この「像」と「碑」は、いまだに果たされない日本の戦争責任、戦後責任を今に問うている。



西港臨海公園「慰霊碑」場所（JR新富士駅南側）

「平和の像」と碑文（共栄小学校校門入って右手）

事件の翌年、「父母と先生の会」が建立。「子どもの世界は、いつも平和としあわせが約束されていなければなりません」と刻印されている。

「炊事遠足被災児童　慰霊之碑」（西港臨海公園テニスコート東端）碑には犠牲となった４人の子どもの名前が刻まれている。現場にあったものを西港の建設でこの地に移設。1977年10月建立。

資　料

事件を報じる釧路新聞
（65年10月６日）

国家補償を求めた山本市長（六五年十月九日付）

平和学習スライド「子どもをおそった戦争の傷あと　共栄小学校炊事遠足事故」説明文より

（北教組釧路市支部　1984年11月制作）

10時20分をすぎたころでした。突然爆発がおこりました。

当時、現場から200m以上はなれた所にいた三日市さんは、「突然、ダーンという花火を打ち上げるような、すごい地響きがした。急いで窓から見ると、灰色の砂煙が10mほど立ち上っていた。びっくりして、はだしのまま飛び出した。」と話していました。

この日は、風が強く、七輪では、なかなか火がつかないので、石油缶などを見つけてきて使うグループもありました。それで、円筒形のルンペンストーブのようなものも、火を起こす風よけ、また、鍋をかける台として使われたのです。

大爆発が起こり、四人の命がうばわれ、33人が重軽傷をおったのは、その直後のことです。

即死した武田君は、右手の指はもぎとられ、胸も足も衣類がちぎれとんで肉がボッコリと取られていたそうです。

あたり一面には、血に染まった新聞紙、血染めの靴、すっぽり穴の開いたフライパン、ねじの曲がったジンギスカン鍋などが、八方に飛び散っていたそうです。

亡くなった鳥取君は、ハトの「ピー子」をとっても可愛がっていました。葬式のとき、家族の人が「天国にいく義男の道案内をしてやって…」と火葬場で放したピー子は、それから十日間、やせほそったままじっと、火葬場の側を離れなかったそうです。

爆風と破片を顔や胸に受けた村瀬さんは、救急車で病院へ運ばれる途中なくなりました。

「うちの子はどこにいるの？」と叫びながら駆けつけたお母さんは死んでいることを知らされ、がっくりと膝を折りました。「あんなに楽しみにしていた遠足なのに…」と、とめどなく流れる涙の中で何回も同じことをつぶやいていたそうです。

頭に、爆雷の破片が突き刺さり、労災病院に入っていた椎名繁樹君は脳内出血などで、両親の必死の祈りの甲斐もなく、翌６日の夜、なくなりました。もうろうとした意識の中で、ときおり「痛いよう－、痛いよう-!」と叫びながらの頑張りも、33時間で力尽きてしまったのです。

釧路市　死者192人、罹災者6000人超す釧路空襲

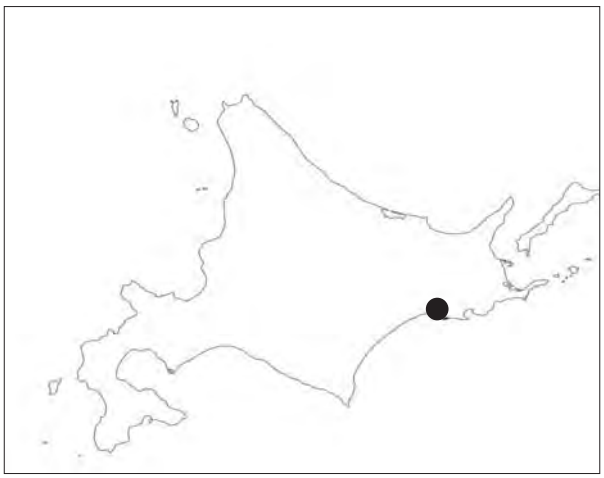
概　要

1945年７月14日（土）の早朝から翌15日（日）の午後にかけて、延141機にのぼる米軍の艦載機グラマンなどが飛来し、250kg爆弾やロケット弾、焼夷弾、機銃掃射などで釧路市の繁華街を中心に無差別攻撃を行った。

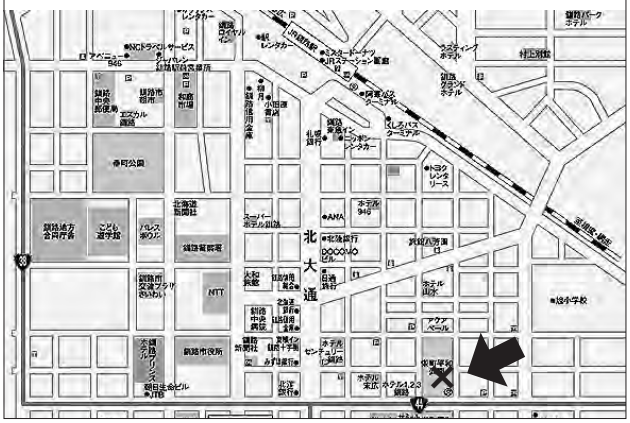
これによって北大通、旭町、栄町、川上町などが炎上。市街地は火の海と化し、192人が死亡、143人が負傷、1,618世帯6,211人が焼け出されたが、当時の人口が現在の４分の１程度であったことからすると、これらの被害はいかに大きなものであったかが分かる。

また、この空襲下で数名の校長や教員が死傷しているが、子ども達や校舎を守ることよりも「御真影」や「教育勅語」死守の命を受けていたための犠牲であった。

釧路市では、毎年７月14日に、北教組釧路支部と釧路戦災記録会の共催による「7.14釧路空襲を考える平和の集い」を開催している他、市内小中学校から募集した平和に関する作品展を催したり、空襲体験者による平和教育授業を実施して、多くの市民に平和と戦争の問題を提起している。



「平和モニュメント」の建つ栄町公園の場所



栄町平和公園の平和モニュメント

最も被害の大きかった栄町地区の公園に建てられた「戦災記念碑」（1973年8月13日建立）

碑文には「ここにあった　悲しみと苦しみの日を　永久に　語りつがねばならぬ」と刻印されてあり、あの日の出来事を永遠に語り継ごうという固い決意が込められている。

資　料

「全面改訂・お話『釧路空襲』」から（北教組釧路支部社会科サークル発行）

7月14日は、ちょうど厳島神社のよみや祭が始まる日ということで、幣舞橋のたもとにある日本銀行横の空き地には、サーカス小屋が建てられたり露店が出るなど、町の中はすっかりお祭り気分であふれていました。しかし、朝の5時ころに、はるか遠くから「グオーン」という飛行機の爆音が聞こえてきました。すると間もなく、アメリカ軍の飛行機16機が、大楽毛方面から姿を現し、「ドカーン」「ダダダダダッ」と、すさまじい爆撃と機銃掃射を何回もくり返しました。（中略）

9時ころに始まった2回目の空襲では、鳥取国民学校（今の鳥取小学校）に爆弾が直撃し、一瞬のうちに体育館の半分が吹き飛び、続いて落ちた二発の爆弾で、教室のほとんどがメチャメチャにこわされました。「あれっ！学校がない！」まい上がっていた土ぼこりがおさまると、防空壕の入り口のすき間から外を見ていた子どもは、こう叫びました。さきほどまで立っていた校舎の大部分が無くなっていたのです。（中略）

空襲は次の日の15日にも行われ、前の日の5回より少ないものの、2回の攻撃で多くの被害が出ました。橋北地区でもっとも激しく攻撃されたのは、国鉄（今のＪＲ）釧路工機部で、8発の爆弾で旋盤工場などの建物の半分が破壊されました。釧路駅の構内にも爆弾が投下され、ちょうど機関車を運転していた機関士が爆弾の直撃を受け、死んだまま機関車に乗って機関区に入ってきたそうです。

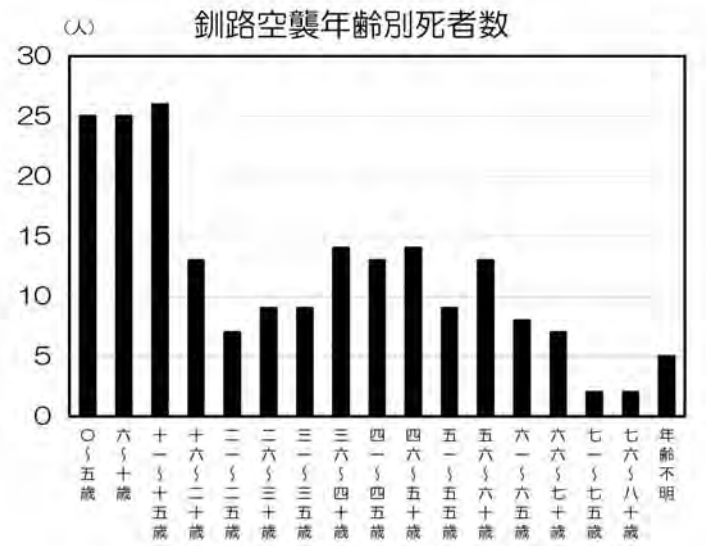
このような悲惨な光景は、市内のいたる所で見られ、旭国民学校のそばにあった町内会の防空壕では、火災のために30人が生きたまま焼かれたり、富士見町でも、爆弾が防空壕を直撃し、中にいた一家4人が吹き飛ばされて全員が死にました。（中略）

動くものは何でも撃った、というアメリカ軍の飛行機でしたが、日本はそれより14年も前に、侵略した中国の各地に無差別に爆弾を落としていたことを、決して忘れてはいけません。

証言：「私は旧制中学2年生の時に釧路空襲を体験した。空襲警報が鳴るとすぐに弟と妹を防空壕に押し込んだ。市内で最初に火が上がったのは旭小学校で、当時たいへん大きな建物だったので、兵舎と間違えられたようだ。そのあと直ぐに、住んでいた近くの釧路工機部も爆破されて工場はめちゃめちゃになった。

また、遺体収容の手助けに行くと、爆弾が落ちた辺りに暮らしていた家族の、頭髪のついた頭の骨や足首が散らばっていた。遺体を集めたが、二斗樽ひとつに満たない量でしかなかったと、後で大人から聞いた。戦争というものは、そういうもので、決してしてはいけない」

（佐藤昌之さん：釧路空襲の証言者・釧路市在住・北海道教育大学名誉教授）



戦争の犠牲者はいつも子ども達である（死因の6割は防空壕での焼死）

戦争は終わっていない！

2008年8月1日（土）、工事現場である釧路川の川底から、63年前に投下した米軍の250kg爆弾が不発状態で掘り出された。周辺住民8千人に「避難指示」が出され、交通渋滞は深夜まで続き、釧路最大のイベント港祭りは中止となった。

川底から引き上げられた米軍の250kg爆弾

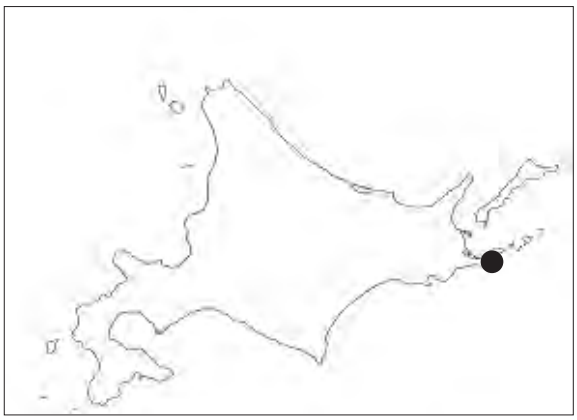
根室市　根室空襲

概　要

根室空襲は1945年７月14日午前５時15分に始まった。当初、港の船舶が標的だったとされる。実際14日の爆撃は、あくまでも港湾関係が中心で市街地への爆撃はほとんどなかった。根室は北方への物資供給拠点。確実に戦力を奪うための攻撃とみられた。

しかし、翌15日、状況が一変した。午前５時８分の空襲警報についで、まず７機が市街地に飛来、その３時間後には40機以上の編隊で500ポンド爆弾やロケット弾が投下され、非戦闘員である女性や子どもにまで激しい機銃掃射が浴びせられた。

根室市への攻撃は道内でも激しく、空襲体験者らで組織する根室空襲研究会の調査では市街地の70％が焼け野原と化し、210人が死亡した。沈められた輸送船の乗組員などを合わせれば、死亡・行方不明含めて、約450人に上る。



空襲で焼け野原と化した根室市街地（根室空襲研究会提供）

米海軍の根室空襲の詳細な記録が『根室空襲』に掲載されている。正確な情報分析を通して攻撃隊の区分を行い実施した。そのスケジュールにのっとった計画的な空襲であり、被害だった。

米海軍は空からの根室空襲を「戦果」と記述し、根室市民はそれを「空襲災害」と記述し記録している。

資　料

証言　若松　富子さん（2005年11月7日）

根室大空襲…家も貸家も焼けた

1945年（昭和20年）７月14日、根室が初めて米軍の空襲を受けた。しかし、被害は港に集中し、市街地はほとんど無事だった。

初日の空襲が終わると、みんな「なんだこんなものか」とばかにしている様子で、警戒を強める雰囲気はありませんでした。ところが翌日の朝８時ごろから、友知沖に停泊した軍艦から飛行機がどんどん飛んできて大爆撃を始めたんです。

初めは家の防空壕（ごう）に、父、母、妹と一緒に隠れておりました。防空壕は母が掘ったもので、４人では手狭でした。そのうち家に焼夷（しょうい）弾が落ち、防空壕の中にも煙がどんどん入ってくるんです。「もういかん」と父が叫び、外へ飛び出しました。私はリュック一つ、母は御用かごを背負って続きました。

米軍のグラマンが根室の上空をブンブン飛び回っていました。晴れていた空が家の燃える煙で真っ黒でした。ダダダダーッと機関銃の弾が降り注ぎ、映画みたいに地面に火花が走っていくんです。家の軒先に隠れて弾をよけ、すきを見て軒の間を走りながら必死で逃げました。

ひとまず花咲国民学校の裏山に逃げ込みましたが、人が大勢いて長くはいられません。父の知人がいる友知まで歩き続け、防空壕で夜を明かしました。

翌朝、父と一緒に街の様子を見に行きました。市街地は焼け野原で、防空壕や押し入れの中で死んでいる人がいました。手足がなくなった人を、泣きながら焼いているおじさんもいました。

７月15日の空襲では根室市街地の７割が焼け、210人が亡くなった。生活基盤をなくした人々は、根室を一時離れざるを得なかった。

父が根室に建てた家や貸家は、すべて燃えてしまいました。親類では将来を期待されていたいとこの常次郎さんが死に、同級生の１人も亡くなりました。

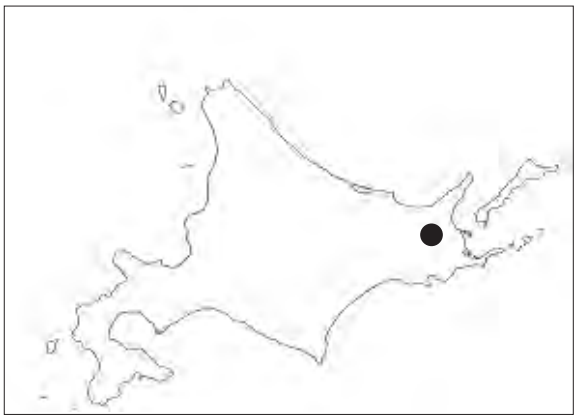
雨露をしのぐところもなく、女学校も休校です。とりあえず家族全員、番屋のある志発島（しぽつとう）に戻ることになりました。根室では食べていけませんが、島には食料も残っていたからです。

「北海道発：YOMIURI ONLINE」より

中標津町　計根別（けねべつ）飛行場群建設における中国人・朝鮮人強制労働

概　要

戦中北海道には25の軍飛行場があり、終戦直前、ソ連の上陸に備え、日本陸海軍は1,000島方面の防衛を強化した。美幌航空隊のほか根釧台地に航空基地群建設構想があり、計根別１～４、標津、中標津、根室の７飛行場が1942年から建設され、計根別第一飛行場は最大だった。千島方面のソ連船団の迎撃に、100式重爆撃機「呑龍（どん）」、キ43一式戦闘機、「隼」（美幌は「零戦」）を配備した。敗戦でGHQ命により破壊、現存物は掩体壕３、格納庫壁２、誘導路のみが残る。



帝国陸軍計根別第一飛行場
掩体壕（えんたいごう）

掩体壕（えんたいごう）とは

航空機を敵の攻撃から守るために建設された施設。旧帝国陸海軍航空隊基地周辺にはいくつも建設された。コンクリート製の有蓋掩体壕や土を盛っただけの無蓋掩体壕などがある。

建設されてから60年以上が経過し、その多くは開発や老朽化によって取り壊されてしまった。現存する掩体壕の中にも保存されずに取り壊されるモノが出ている。

資　料

中国・朝鮮人強制連行

体験談１　柳　四守（リュ・サス）

ある日午後10時半頃憲兵隊に襲われ、トラックに40人余りが積み込まれた。それで連れてこられたのが計根別でした。私たちはそこの飛行場建設の「タコ」として引っぱられたわけです。入れられたのは、飛行場の近くにあった広野組の飯場でした。飯場では、まず逃げたらどうなるか見ておけといって拷問道具を見せました。幹部の命令を拒否した時も拷問にかけられるし、逃げて捕まったらだいたい10人のうち８、９人は死んでしまう。

朝はまだ薄暗いうちに飯場を出て作業を始める。それで夜スコップの先が見えなくなるまで働かされた。１日15、６時間の労働で、その間休みの時間は30分ぐらいしかなかった。休日などは１日もなく、ドシャ降りの雨の日でも働かされた。自由に出歩くようなことはまったくできなくて、自分の知っているのは飛行場の建設現場と飯場の行き帰りの道だけです。

仕事中とか作業中の行き帰りには、10人に２人の割合で日本人棒頭がついて常時監視してました。

体験談２　安　寿烈（アン・スリョル）

私は朝鮮から直接計根別に連行されました。途中ヤクザ風の男が数十名警備員のようにつき、汽車の中で木製の日よけを窓におろし、汽車の窓から外を見ることさえ禁止された。計根別では広野組の飯場に入れられた。現地では朝鮮語は使えなかった。朝鮮語を使うと、「ここをどこだと思っとる！朝鮮語など使うな！」とたちまちビンタがとんできた。で私はもうびっくりして、なんでたたくのかと思って目を丸くして相手の顔を見ると「鮮人（朝鮮人とはいわずに）一匹や二匹殺すのは獣を殺すより問題ないんだ、この生意気野郎！」とどなられた。

現場への行き帰りは両側に監督や世話役が日本刀をぶらさげたり、ツルハシの柄のような棒を持ってピタリとついてくる。

仕事は山をくずして、その土をトロッコで運ぶトロ押しだった。２人１組だが、車１台分に監督が一人ずつ乗り込んで先頭の者につづけと棒でなぐりながらはっぱをかける。仕事が終ってタコ部屋に帰ってきても、夕飯はドンブリ一杯だけで、朝５時から11時間働きどおし、叩かれどおしだからそれくらいでは足りなかった。現場のバラスについてる昆布の根っことか、海草を拾って食べました。

とにかく、めしのときになぐられ、返事が遅いといってはなぐられ、現場でなぐられ、風呂に入ってもなぐられ、おまけに寝てからもぶんなぐられる。よくあれで人間が死なないで生き抜いてきたもんだと、不思議に思います。

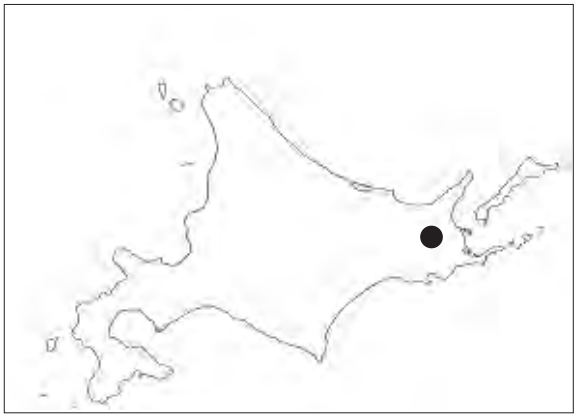
『朝鮮人強制連行強制労働の記録』から

中標津町　計根別飛行場の空襲

概　要

計根別飛行場を建設するにあたって、軍は多くの農家から土地を強制買収し、中国および朝鮮人を強制労働させた。これによって完成した計根別飛行場は計根別地区から西春別をまたいで4本の滑走路を持つ広大な基地になった。

このため中標津空襲では中標津市街地には被害が及ばなかったが、計根別飛行場は、アメリカ軍によって空襲の目標となってしまい、大きな被害が出た。そのときアメリカ軍の銃撃によって戦死した人がいた。



北海道空襲

～1945年7月14日、15日の記録～より

「衛生一等兵の名前」

七月十四日、計根別飛行場を襲った九機編隊のアメリカ海軍機は、完成したばかりの格納庫や施設をつぎつぎと攻撃破壊し、兵士一人が犠牲になった。

「中標津町史」（1976年）には「この空襲は計根別市街地には及ばなかったが、飛行場はせっかく完成した格納庫が破壊され、そのほかの施設にも弾痕を残した。当時、飛行場には襲撃機はあったが交戦することもできず、掩体壕（えんたいごう）に入れるのがやっと。しかも、高射砲隊は静岡に転進したあとだったため、有効射程距離1800mの20mm機関銃で応戦するのが精一杯だった。「低空飛行で銃撃を加えるグラマンからは白いマフラーをなびかせる米兵の嘲笑する顔が目に映った」というのは、目撃者の語るところである。『この時の戦死者は松永衛生一等兵だった』とあるが、年表には『兵一、徴用二計三名死亡、重軽傷六名』とある。徴用二名については定かでない。

資　料

佐々木太良さん（網走市・故人）の証言

そのころ14歳だったが、第11野戦気象隊計根別観測所の筆生という階級の軍属だった。暗号で送られてくる天気図を記録する仕事であったが、空襲の時、航空本部へ行き敵機の状況を聞いてくるよう命ぜられ、自転車で砂利道を急いだ。

『地上部隊の営舎をすぎたところでふたたび爆音が聞こえたと思うまもなく、地面につきささる銃弾の音が私の横を通り抜けました。私はあわてて自転車を放り出し、道路わきのくぼ地に飛び込みました。いつも教えられていたようにうつぶせになって、親指で耳を押さえ残りの指は目を覆ってじっとしていました。

爆風で鉄帽が飛ばされそうになるので、首のひもを固く結び直したりしました。「ダッダッダッダッ」と激しい機銃掃射の音、「ヒューツ」という不気味な音に続く「ドカン」という炸裂音、地面に突き刺さる銃弾の音が近づいてくるたびに「こんどはだめか」と思いました。そして家を出るとき、母と言い争いをしたことが悔やまれたりしました。そのうちに少し余裕ができて頭を上げると、丁度近くの格納庫に向かって急降下してくるグラマンの姿が見えました。そのコースの続きが私のいる場所だったので、あたかも私に襲いかかって来るようです。

12.7ミリ砲は数発ごとに青や赤に光る弾が出るようになっていて、弾の通り道がわかりました。上昇する時には20センチのロケット弾を発射してくるのでした。やがて格納庫は赤い炎を吹き出して燃え上がりました。ドラム缶が火をはきながら空高く吹っ飛んだりして、ようやく第二波の空襲が終わりグラマンは潮が引くように飛び去っていきました。

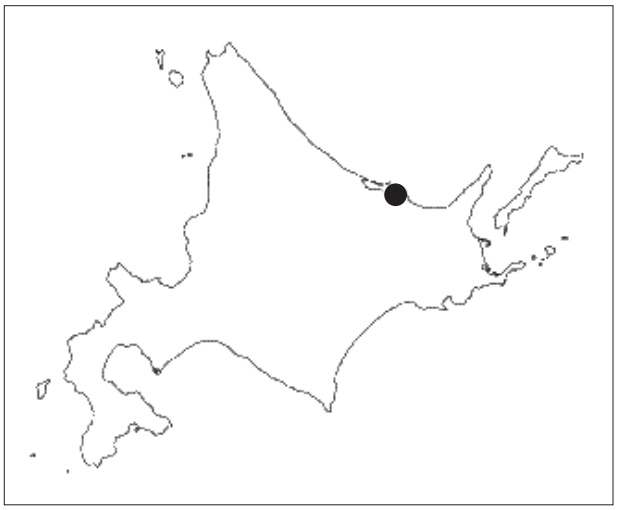
航空本部へ行くことも恐ろしくなったし、敵機が襲ってきたのだから行く必要はなくなったと考えた私は、そのまま帰ることにしました。見ると道路には電線が落ちてスパークして青白い光を上げています。そこを自転車で乗り越えました。地上部隊のタコツボの付近に兵隊が集まっていましたが、犠牲者を収容していたのだと後から分かりました。観測所に戻ると所長は「よく生きて帰ってくれた。休んでよいぞ」と言ってくれました。』

（「ハマナスのかげで」－1945年北海道空襲の記録」菊池慶一著）

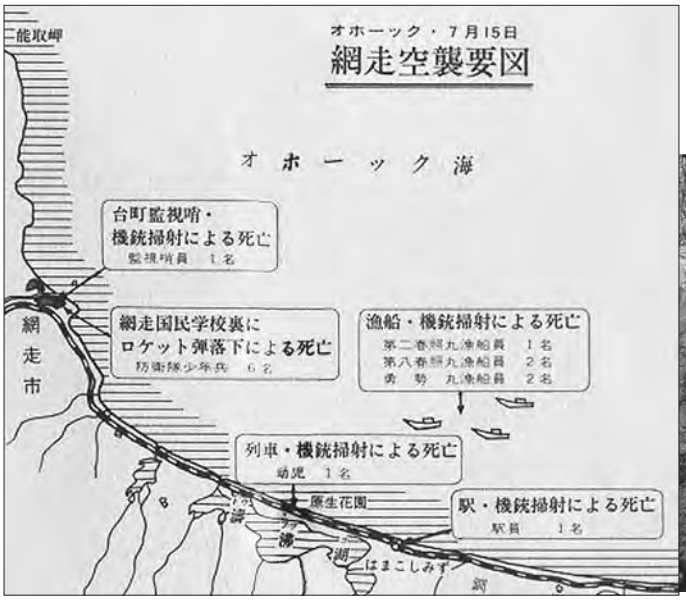
網走市　網走空襲

概　要

1945年７月15日　網走の周辺地域　網走市内が４機のグラマンの空襲を受け、現在の網走小学校（当時男子校）で訓練中の少年兵６名、網走港外で漁船員５名、防空監視哨員１名、計12名が犠牲になった。小清水では、浜小清水駅の助役が駅舎の天井を貫いた機銃掃射を受けて死亡。原生花園では列車が機銃掃射を受けて１歳の赤ちゃんが亡くなった。



「紅の海」菊地慶一著　楡書房



網走空襲の碑
　現網走小学校のすぐ上の高台にある。

資　料

空襲の碑のすぐ横にタコツボ跡がある

証言から

弾が当たった瞬間、すわっていた3人がはねとばされた。気がつくと床にひっくりかえって倒れていた。見ると撃たれた松田君の腿が大きく割れて血が噴き出している。持っていた止血棒で腿をしばると今度は腰の上から噴き出す。顔は見る見る血の気を失って紫色になった。病院に運ばれたがどこの病院でも手に負えないと言われた。

「紅の海」菊池慶一著（楡書房）

「赤いハマナスのかげで」

お母さんは、のり子ちゃんの腰のきず口に石を当て、持っていた救急袋の脱脂綿をかぶせ、手ぬぐいをさいて巻きつけました。弾が通った傷口は、意外に小さく、流れ出す血が少ないのが、お母さんをちょっと安心させました。

「大丈夫、大丈夫」

お母さんは、のり子ちゃんにと言うより、自分に言い聞かすように言って、

「のりちゃん、痛いかい？」と聞きました。

すると、それまで声を出さなかったのり子ちゃんが

「いたくない、じっちゃんうちいく、じっちゃんうちいく」とかすかに言うのです。

のり子ちゃんは、おじいちゃんによくなつく子で、その朝、北見でおじいちゃんに会ってきたばかりでした。

「ダダダッ、ダーン　バリバリ！」

また、飛行機が襲ってきました。見ると、機関車のタンクに穴があいたのでしょう。むくむくと蒸気があがっています。その向こうに見える漁船からも、遠く網走の町からも煙があがっています。

やがて、だいていたのり子ちゃんの顔色が見る見る白くなっていきました。

「のりちゃん、のりちゃん！」

お母さんは、思わず大声を出してのり子ちゃんをゆすぶりました。のり子ちゃんは目を閉じたままこたえません。お母さんの悲鳴のような声を聞いて兵隊さんがハマナスのかげから、はいよってきました。乗客の中に兵隊さんがいたのです。

「これは、悪いところにあたっている。奥さん、あきらめなさい」

傷口を見た兵隊さんがいいました。お母さんはそれを夢のようにききました。この兵隊さんはおかしなことを言う。死ぬはずなんかない。のり子は泣き声もあげていない。ちょっと気を失っただけだ。おかしなことをいわないでほしい。

「奥さん、あきらめなさい。脈がなくなったよ。」

「そんなこと・・・・・・。そんなことはありません！」

お母さんは、はっとして兵隊さんに言いました。

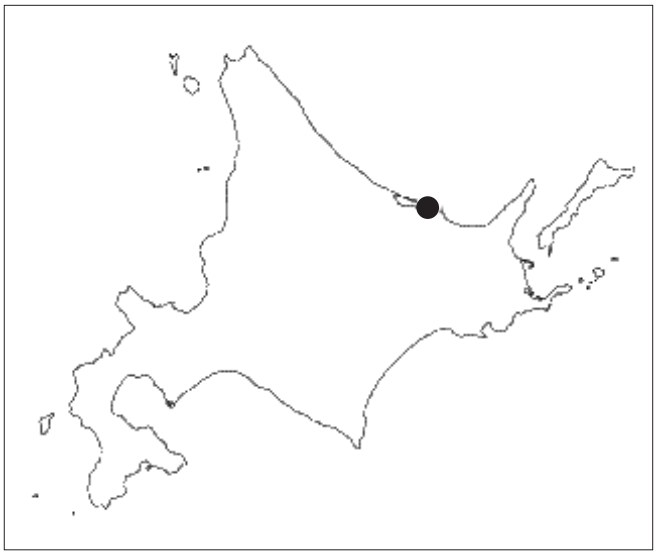
「病院へ行って注射をすれば、息を吹き返すんです。早く、早くのり子を病院に連れてってください。お願いします！」

「ハマナスのかげで　1945年　北海道空襲の記録」菊池慶一著（北書房）

網走市　ポンモイ石切り場の強制労働

概　要

網走市のオホーツク海に面するポンモイ柱状節理は、1941年から1945年にかけて海軍美幌航空隊の飛行場の基礎工事に使われるために石が切り出されていた。そこで動員されたのが強制連行の朝鮮人や徴用の日本人の「タコ労働」だった。労働は苛酷を極め、衛生状態、労働状態の悪化から、伝染病にかかり８割が死亡したといわれている。



ポンモイ　柱状節理

資　料

証言の概要

腕や体に入れ墨をした人がいて、すごく怖かった。着る物はボロボロでシラミもすごかった。逃げたりすると幹部の人が追っかけてきて、つかまったら最後、叩かれたり、水をかけられたりしたり、親がこんな姿を見たらどう思うか、というぐらいひどいことをやっていた。他の人はただ黙って見ているだけ。手を出せば逆にこっちがやられてしまう。

働かされた人たちは、早朝から夜遅くまで食べるものも満足に与えられず仕事をしていた。仕事以外の外出を許されず、当時の人は「タコ部屋」を監獄部屋と呼んでいた。彼らには刃物や時計や金を持たせないことは鉄則だった。彼らは「いい仕事がある」という言葉と酒にだまされて連れてこられ、自分の家族にも連絡できなかった。彼らに関する事件では加害者の方が無罪になったり、半ば政府も黙認し国民もそれを当たり前と見ていたようだった。

当時働いていた人の証言から

起床は４時30分で作業は６時から日暮れまでびっしり働きづめ、栄養不良でみるみるやせた。幹部の棒が頭と言わず体と言わず飛んできた。けが人や病人も働かされ、それはみじめだった。生きてるままか死んでからかはっきりしないが、押し寄せた流氷の海に何人も投げ捨てられるのを目撃した。見ているのを見つかって殴られたこともあったがけがで倒れた朝鮮人が、石切り場から帰ったら消えていたことは何度もあった。

遺体を引き取り供養した住職

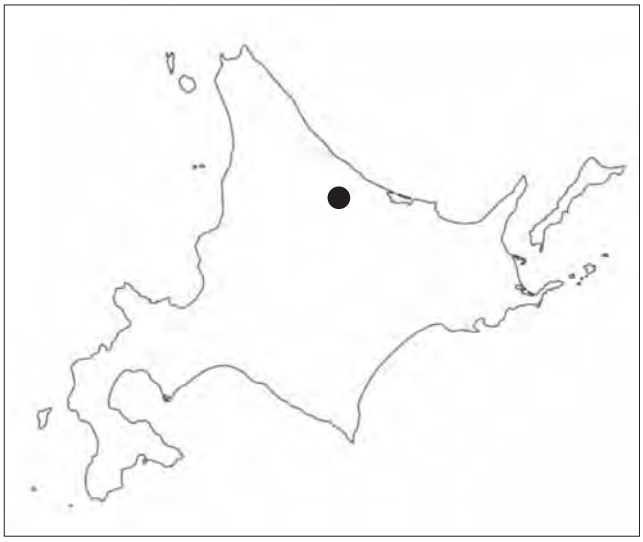
当時の衛生状態の悪さから、「発疹チフス」が流行し、８割の死亡者が出た。死因が伝染病であることから、市内のほとんどの寺が遺体の引き取りと供養を断った。その中でただ一つ供養を行った寺がある。「正法寺」である。当時の住職は「死んだらみんな仏様」と誰でも差別をせず、引取り供養した。1968年には、供養塔も建立した。

〈参考資料〉　「オホーツクの戦争史」第１集（オホーツク歴史の会編）

紋別市　鴻之舞鉱山における朝鮮人強制労働

概　要

アジア・太平洋戦争当時、東洋一の金山と言われた鴻之舞鉱山は、1939年から朝鮮人強制労働が始まり1942年６月には1500人に達した。厳しい監視の下、苛酷な労働条件の中で働かされた。



鉱山跡の記念碑

鴻之舞鉱山慰霊碑

今も残る精錬所跡の大煙突

資　料

証言から

1939年ごろ、第一から第四協和寮が作られ、たくさんの朝鮮人が連れてこられたんです。朝鮮人はこの寮の他、社宅にも家族単位で入っていたようです。また、そのほかに別の離れたところで地崎組の下請をやっていた大塚組のタコ部屋があって、そこにも150人ほどの朝鮮人がおったんです。彼らは布切れ１枚腰に巻いてわら草履をはいただけの姿で猛毒を含む精錬所の廃液沈殿池の築堤工事をやっていました。作業は１トン積みトロッコの手押しなんかで、ひどいけが人も出ていたようです。足を踏み外して沈殿池の中に落ちて死ぬ事故もよくあったが、会社側はそんな犠牲は当然と言ってかまわず突貫工事を続けさせたんです。古い沈殿池はいまの精錬所のたっているところにもあったそうですが、その工事も朝鮮人を使ってやったといわれています。

あるとき、協和寮に野菜を持っていったら寮長がでん、とすわっている訳さ。その前に朝鮮人が３人座っているんだ。ちょっとようすがおかしいなと思ってみていると、横のほうに日本語のよくできる朝鮮人が何か言いながら、長いムチでしばきあげるんだよ。たたかれた朝鮮人はヒーッと泣いていたよ。逃亡した朝鮮人のことで何か聞かれていたらしいんだな。

協和会とは

協和会とは在日朝鮮人を統制支配するために、日本の官憲によって作られた御用団体である。1920年代に続々と作られた「融和団体」（朝鮮人の「保護救済」を掲げながら日本の同化事業にすぎず、警察・特高によって組織構成されていた）が1936年に全国的事業としての協和会設立につながる。

国策政策になってからの協和会は、初期内鮮協和会の形だけの「朝鮮人の保護救済」ですら影をひそめ、同化事業（日本語の使用、和服着用、日本式礼儀作法の励行、神社参拝、神棚設置、創氏改名など）や、戦争動員事業（国防献金、勤労奉仕など）をもっぱらとした。

戦争末期朝鮮に徴兵制が施行されると、日本でも協和会は在日朝鮮人の徴兵に備えて、朝鮮人青年の錬成を行った。

1939年、朝鮮人連行が始まると、協和会は日本に連行された朝鮮人労務者の統制も行うこととなる。

〈参考資料〉　「オホーツクの戦争史」第１集（オホーツク歴史の会編）